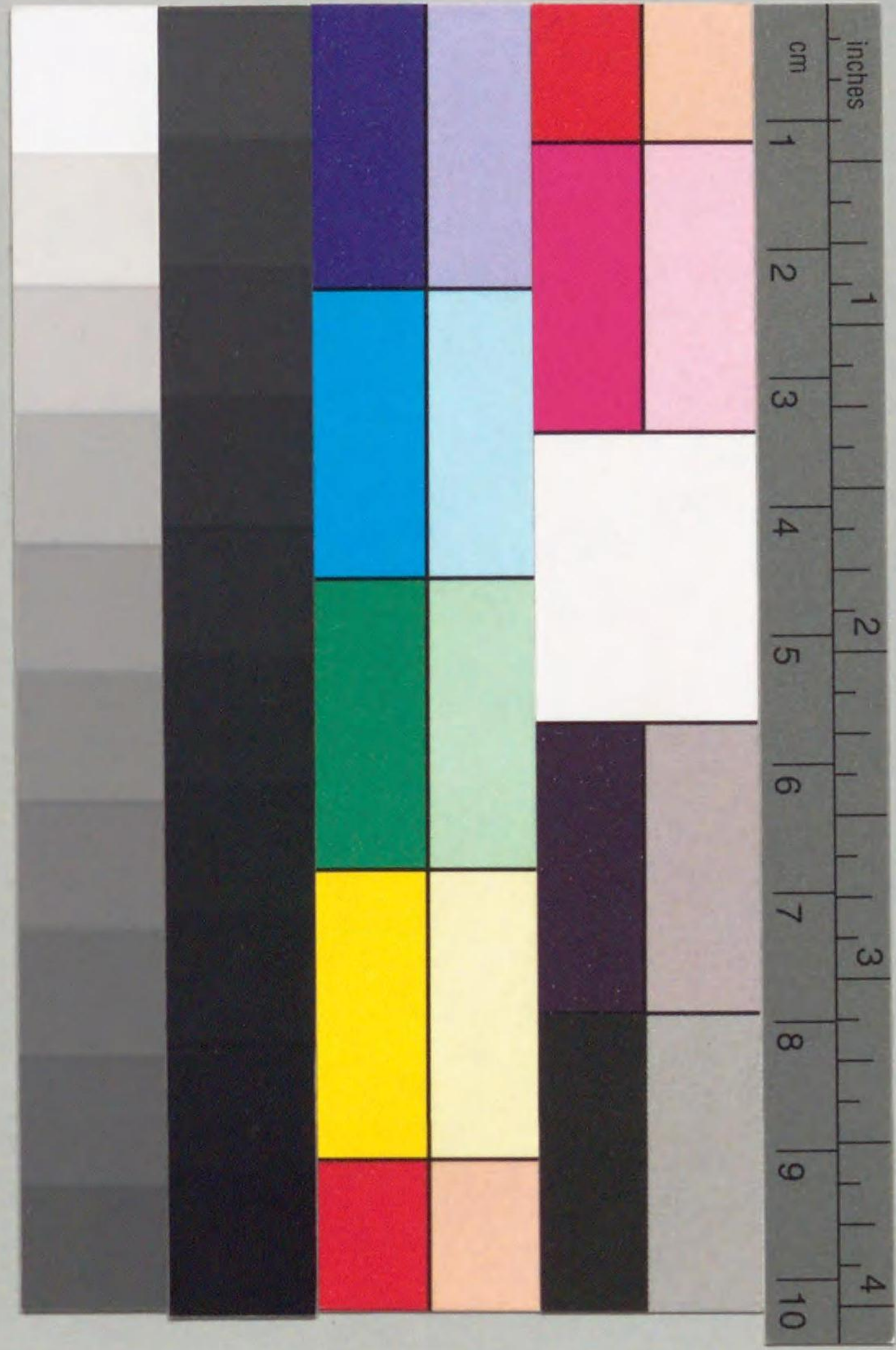


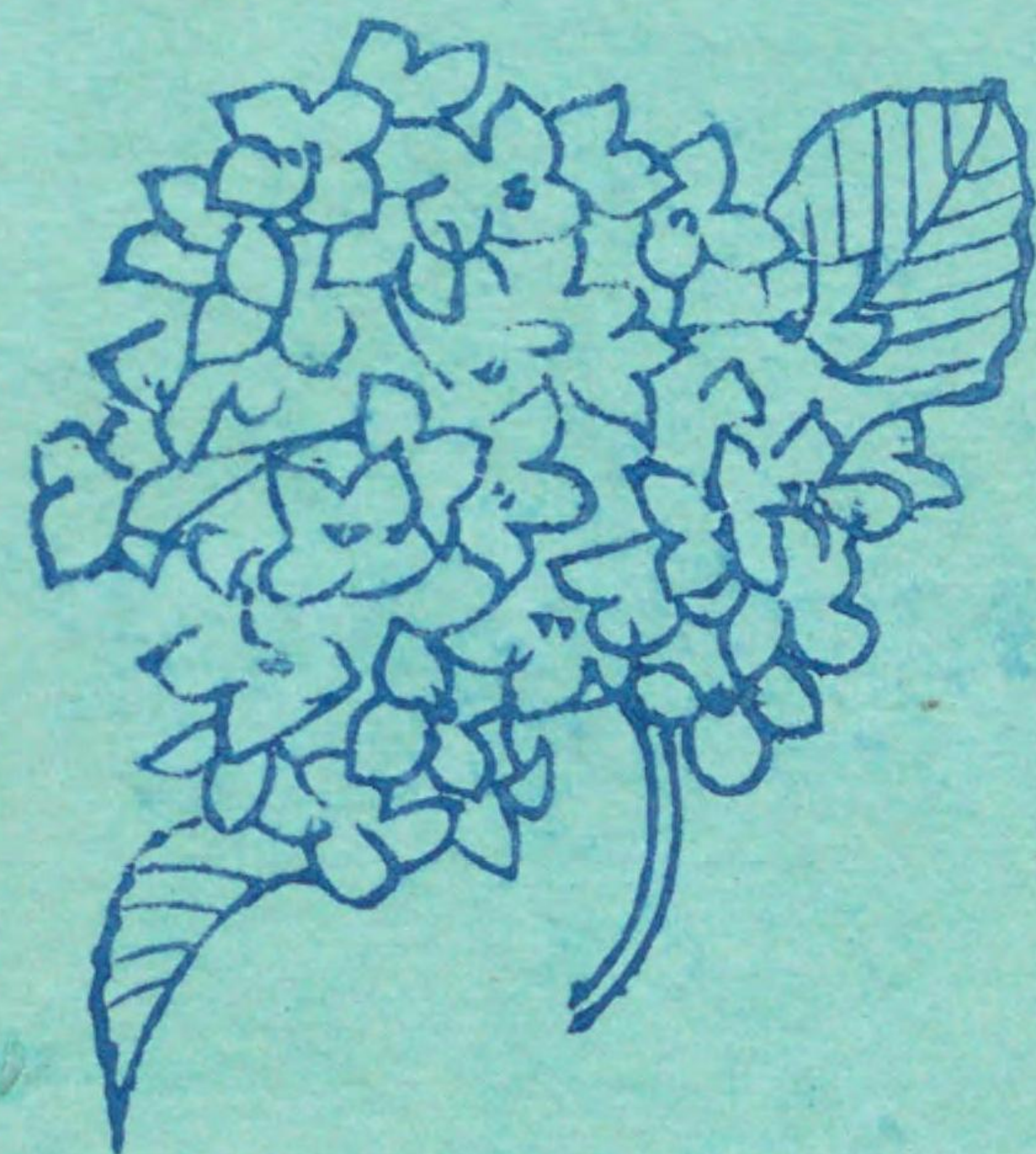
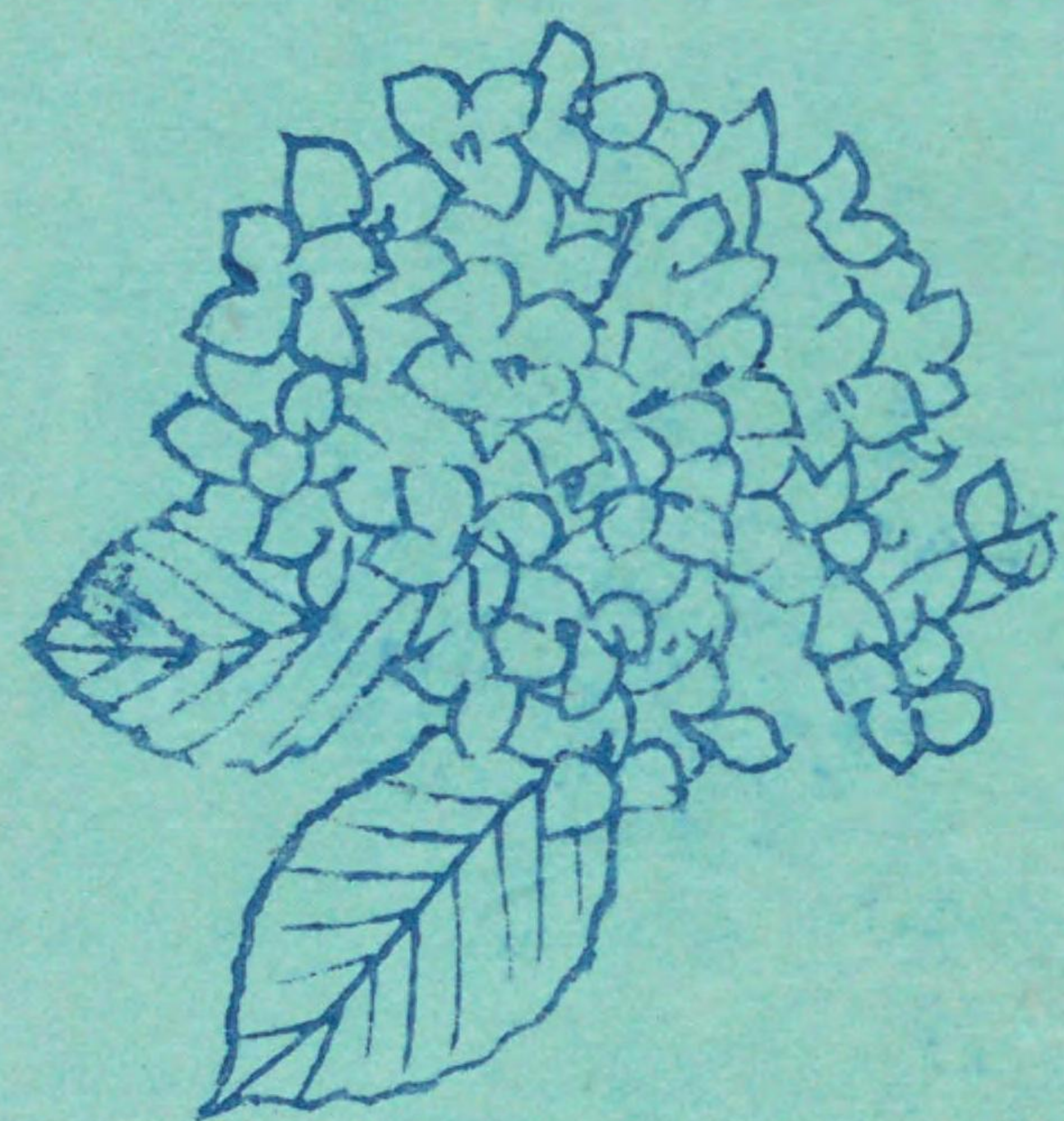
918.6  
1989k



00252001











後

花

園

巻

八





252001

目次

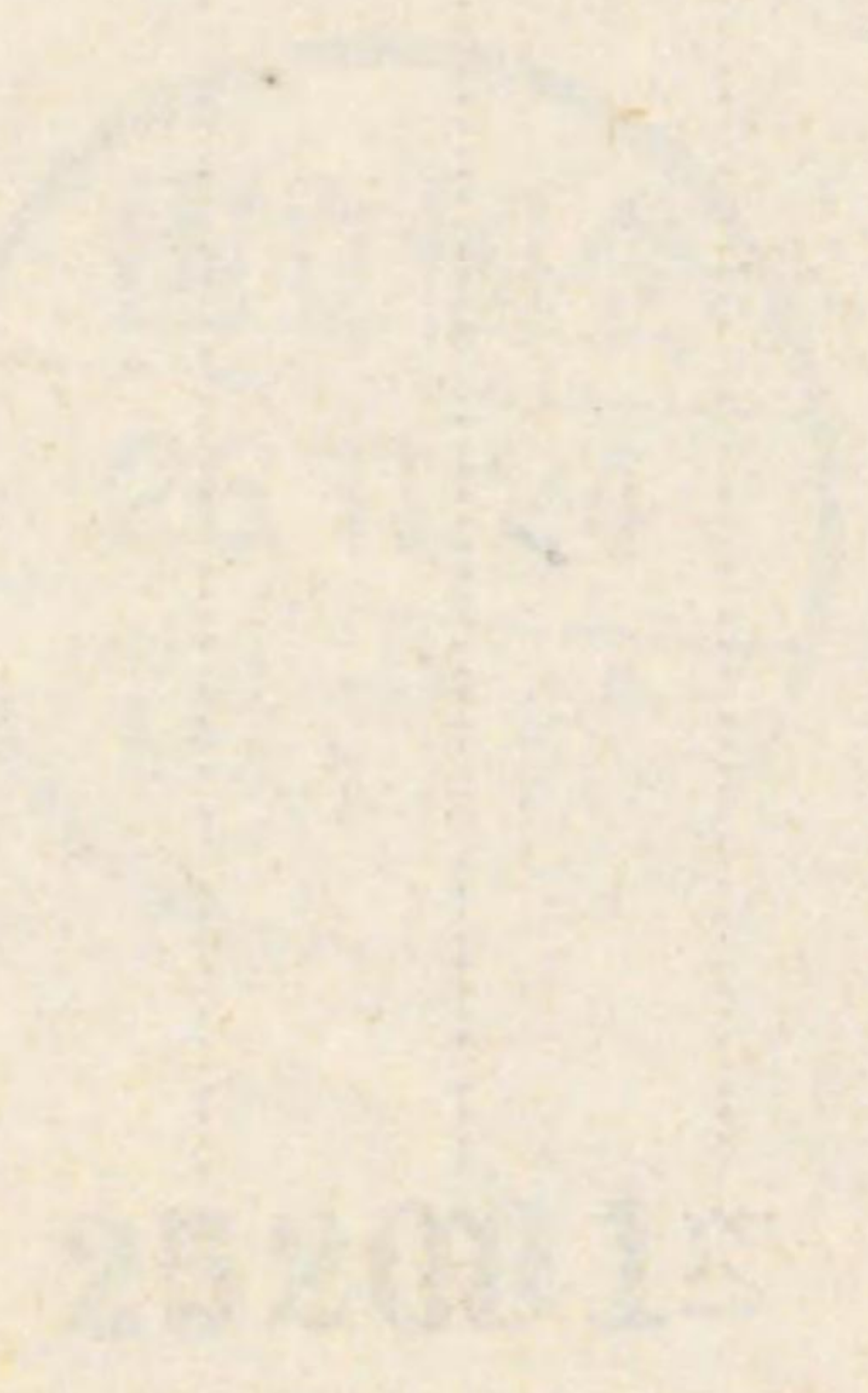
風	流	線	(明治三十六年十月).....	一
續	風	流	線 (明治三十七年六月).....	三
紅	雪	錄	(明治三十七年三月).....	六
續	紅	雪	錄 (明治三十七年四月).....	六



風  
流  
線

日  
夫

版  
上  
の  
書  
は  
一  
冊  
に  
十  
五  
冊  
分  
の  
冊  
子  
に  
分  
ら  
れ  
て  
お  
り  
、  
紙  
張  
は  
十  
五  
冊  
分  
の  
冊  
子  
に  
分  
ら  
れ  
て  
お  
り  
、  
紙  
張  
は  
十  
五  
冊  
分  
の  
冊  
子  
に  
分  
ら  
れ  
て  
お  
り





祝使 山駕籠 ふれ状 橋の袂 急先鋒 芙蓉館 鞍ヶ嶽

異形のもの 緑の旗 手取川 邂逅 田舎酒 綾の鼓 妖

靈星 鶯籠 紫しらべ 革靴の中 空薫 馬之部 みだれ

髪 うたがひ 浪裡白跳 寄手 禮ごころ



祝使

「あれ失禮、どうぞ此方へ。」

と座を譲つて、旅姿の身を片寄せた娘は、道中の風に亂れた、ばさ／＼の銀杏返。たとへば青柳の糸を洗はず、簪の花に露置かぬ状ながら、耳許の清らかな、目の涼しい、細面の、年紀の頃九か二十、類なく目に立つのが、赤毛布でくるりと身を、草鞋穿、脚絆掛、帯の端さへ露さないけれども、包み果てぬ色は洩れて、長き旅路を來たらしく、肩にも裾にも埃を置いたが、もみぢに霜の紅牙えて、祝は濃な風情である。

床几にかけた腰とともに、小な風呂敷包と、蝙蝠傘を傍へすらした、店前に憩ふものは、唯此の一脚より多からぬ、田舎路の御休所。

線流風 老猫と瘦せた犬、鶏も居るけれども、客を待つ土間は凸凹の一坪半のみ。娘は先刻から憩つて



居たが、後れて入つて来た十五六の美少年。髪黒く、面白く、唇朱きが、おなじく草鞋穿、紺足袋に紺の脚絆、身輕に効々しく装ふに、肩から斜懸に革鞆の、何を納れたのか一杯に膨らんだ胴中を、淺黄の紐で緊乎と結へた、重さうなのを腰下り。杖にもあらぬ手まさぐり、途すがら手折つたらしい、二葉三葉しをらしく残つた柳の枝の、長くしなふのを、すらくと纏れるやうに足を引摺り、草臥れた狀して鶴來(地名)の方から辿々と此の處へ。  
敷居を越すにも疲れたらしい。重い歩を休めようとして見ると、一つの外はない床几に、先客があつたので、大人しく先づ挨拶をしたのであつた。

「私の方から申します處を、つい、うつかり傍見をして居たもんですから。」  
あとは目でいつて向き直る、土間の前の土手下は、船もあらず人も無き、渺々たる一大河、礫原赤く、洲は黄也。水は蒼く、瀬は白く、彼方此方に分流して、近きは龍の臥す如く、遠きは虎の躍るに似て、目も遙なる對岸は、恰も國が違つたやう、日中も黄昏の趣あり、一帯の靄の中を、人と馬とちらほらして、森低く、屋根小く、山仄に、描ける海市に異ならず。  
然れば川幅約一里、鶴來といふ村は其處に。旅の娘が動かした瞳は、——恠る景色に見惚れたため、我にもあらず、聲を懸けらるゝまで氣が付かなかつた——心を示して、  
「何うぞ、御遠慮なさらないで、お廣く在らつしやいませ。」と草鞋の上へ草鞋を半ば、底をか

へして、しなやかに足を重ねる。

「澤山です、澤山です。」

少年は妙齡の美人と、膝を交へるのを極り悪げに、ツツと片端。

此方は人馴れた風采で、

「お婆さん、お客様にお茶を上げて下さいな。」

「はい、はい。」

古板敷の筵の上、茶釜を前に、明りとりを逆に、故と暗い方に蹲つて、目に近々と覺束ない針の運び、夏のはじめから山國は、繼物に忙しい白髪の姫、はじめて知つたか新來の客に、しよぼしよぼとした目を注ぎ、

「おや、入らつしやいませ。」

と又つくつく、床几に並んだ二人の姿、コリヤ何うぢや、傍の納戸の古襖に、先祖から貼つて

ある、大津繪から抜け出した、お若衆と藤娘か、七夕様か、雛一對。

二

「難有う存じます。」と少年は茶碗を取つて、姫よりは、美人の方に會釋する。



「どういたしまして、御挨拶で痛入りますこと。」

娘も又自分のものでも與へたやうに、故といつて、吻々、吻々々、眞珠を揃へた齒の皓さ、冷く燃ゆる唇の花は、一たび戦ぐ時秘曲を傳へて、上手の手が樂器の線に觸れたやう、人をして神往かしむるものであつた。何の祕密もなく軽い調子で、

「一寸、植物の採集にでもお出かけなさいましたの？」

まさに埃だらけの赤毛布を絡うた、其の風采を以てすれば、革靴を肩に草鞋穿の姿を見れば、賣藥が賣れますかと問ふべきに、植物云々と尋ねられて、少年は思はず顔を視めたが、露も玉に、水も縁に映りさうな、無量の美なる意味の籠つた美人の瞳を一目見ると、何事を思ふ暇もなく、

「何、家から使者に來ました。」

「お使者に？」

世馴れぬ状はいふまでもない。其の草臥れた様子だけでも、餘り長途の使者である。

「だつて御遠方からぢやござんせんかね。」

少年は川向を、優しい目で見遣りながら、

「今朝から五里ばかり歩行いたんです。纔の途なんです、草臥れて了つたんです。」

時に思ひついたやうに、背後を振り向き、

「お婆さん、湖の處まで最う何のくらゐあるだらうね。」

嫗は目とともに口を開け、

「芙蓉瀉でござりやすかの。」

「あゝ、然うさ。」

「はあ、あと最う二里半さござりやす。」

「や、二里半、未だそんなにあるのか。」

「もし、貴方様は御城下かね。」

「あゝ、」

「それは御大儀ぢや、路が悪いで増し難儀します、ゆつくり休んでござりませ。」

「お婆さん、何ぞ此の方が召食るやうなものはありませんか。」

「否、今橋向うの往還で、並木へ休んで辨當を食べました。何にも欲しくはないんだけれど、咽喉が渴いてしやうがなかつたから、お邪魔をしたんです。難有う。」

年紀にも似ない、いたいけさ、唯二つ三つの弟と思ふにさへ、抱いても遣りたいほど愛らしさ

うに、

「まあねえ、そんな遠くまで、何のお使者に行らつしやるの。」



少年は行儀よく膝に手を置き、

「御婚禮の祝儀に、つかひものを持って行くんです。」

案外かな。

「おゝ！ 御婚禮の。おめでたいでございますね。それぢや御城下から、田舎の御親類へでも御遣はし？」

「親類ぢやありません、ともだちの方が縁附きました、其の人の許へ、姉さんが送るんです。」

「お姉様のおともだち、其の方がお嫁さん、あの、奥様なんですか。」

「えゝ、其處へ使者に参ります。」

「お嫁入のお祝ひに、貴郎のお使者。私もお姉様の、其のおともだちになりたいねえ、可羨いと。」

と艶麗に打微笑む。

## 三

聊も隔てのない、打解けた美人の舉動、唯問はるゝにのみ纔に答へた少年も、此方より、ものいひかくる便を得たが、貴女とも姉さんとも申しかねた口ぶりで、

「ですが、あの、何處へ行らつしやるんですか。」

「私。」

「えゝ。」

「私は當なしの旅鳥。」

娘は頤を襟につけて、打傾き、片袖を靜に拂ふと雪のやうな、指尖で、左の肩を細りと、赤毛布を軽く弾いて、

「妙な色の鳥だこと、お國には、こんなのは居ないでせう。これは天竺の鳥なの。」

「嘘を、天竺にだつて、阿蘭陀にだつて、鳥の赤いのが居るもんですか。」

「だつて、こんな邊鄙にも、貴郎のやうな可愛らしい方が居るんですもの。然うすりや百里も離れた、私の方へ来て御覽なさい、赤い鳥はいくらでも飛んで居ますよ。」

餘の事に笑ひ出して、

「嘘つこは止して、お國は何方。」

「眞個はね、東京。」

「東京？」少年は目を睜つた。此の邊の恁る年紀ごろでは、東都は十萬八千里、一種神聖なる天上界と思惟するので、さしむかひに居る自分は如何、五里の路に疲れたのに、年紀は上でもかよ



わい女が、何うして此處までと怪むなりけり。

夢見るやうに、

「大變ですなあ。」

「些とも大變なことではないの。最う二十里ばかりさきからは、汽車がありますからね。あとは目を瞑つて居ても行かれるんですよ。連れて行つて上げませうかね。」

「否、もつと修行をして、立派なものにならなければ不可ませんが、お嬢さん。」

少年は旅鳥といふものを稱するに、今や令嬢を以てした。

「これから其の東京へ歸るんですか。」

「まるで、西東なの！ 私は貴郎とは行違ひにお城下の方角でせう、向うへ行きます。鞍ヶ嶽といふ山があります。」

「鞍ヶ嶽。」

睫に近き一座の山、其の空ばかり雲暗き、五月晴の空を指して、

「あれ、あの山の續きで、此の川の水の上ですつて。行つたことはありませんが、地理の本で習ひました。それでは鞍ヶ嶽へ上るんですか、女ぢやありませんか。」

「何故ですえ。」

「だつて、此地方のものだつて、めつたに上るものはないんです。」

「でも、おともたちの御祝儀にさへ、貴郎は其の芙蓉の湖とやらへ、お使者においでなさるんでせう。私は良夫を尋ねて行くんですもの、何でもないので。」

「やれ、はあ、お前様、御亭主さ、天狗様か、魔物か。」

と姫は唐突に頓興聲、目は疎いが、耳は然までにないらしい。

娘は背方へ手をついた、仰ぐやうにして、悠然と姫を見遣り、

「ほ、ほ、烏の亭主に天狗は可いねえ。でも此方の色が赤いのでから、對手の鼻は低いかも知れないよ。」

「いや、鼻高様より可恐しい事がある。なか／＼行かれるものではないが。」

四

二人が休んだ床几とは、左手に狭い、朽ちた縁側を隔てたばかりの、襖越に人の氣勢、お若衆と藤娘が其處を抜けて出たらしい、大津繪の古襖の破目に、ちら／＼衣服が見えたのを、大方内の姫に對する、尉殿であらうと思つたが、恠くて形を露したのは、非ず、年配四十有餘、商とも



見えず、工とも見えず、農とも見えない、面に大人の風あつて、身装は山家を其まゝの、雑と是村夫子。

膝の前に、塗の禿げた茶盆を控へて、煙管を手に、胡坐、片手で撫でて居た百日紅の根をくりぬきの、煙草盆を押遣つて、縁側へ體を捻向け、

「はい、誰方も。これから唐突に御無禮しました。唯今鞍ヶ嶽へ上らるゝといふを、襖越に承つたに就いて、お心づけ申します。はい、此の邊はな、見らるゝ通り、都に遠い山里で、峰は高し、樹林は深し、川は大いな。

此の手取川の淵一ツに、一ツづゝにしてからが十や二十の主は居ます。魔の棲まぬ處はないが、殊に其の鞍ヶ嶽は總本家ともいふべきぢや。御婦人の身一ツで、なかゝ行かれる場所ではない。けれども、天狗に許嫁があるやうに言はれるからには、其を恐れはなさるまい。其の事だけなら留めませぬが、能く聞かれえ。」

村夫子は煙管を差置き、

「今さしあたり草木も動かさず、五月晴の上天氣、澄切つて秋日和見たやうぢやが、何と其の底に黒い雲が徐々と頭を出して、はや此の界限、漁るものも耕すものも、寐心が穩でない。先々月あたりから、毎晩悪い夢に魔されて居るではないか。」

それがといふとの、北から南へ三十里ばかり、間が切れて居る鐵道が繋がるで、工事が去年から始まつた處、いや其の工夫といふのがよ、大概つもつても知れること、今時そんな理窟はない筈ぢやが、百が九十九人までは、どれも無宿もの同然で、殺人に放火をかねた、夜叉羅刹ぢやと思はれい、はあ。

山は崩す、水は濁す、犬猫は取つて喰ふ、草は枯す、樹は倒す、石は飛ばす、取分けて目指されるのが、眉目形の勝れた婦人ぢや。

殺されたのもあり、死んだものもあり、好い衣服を着て帯をめたのが、草の中に倒れて居たり、裸體で野原に曝されたり、何がさて、出來た鐵道の三里居まはり、手足な、髪な、ばらゝくにして暴れ居つたわ。

何と可恐い、二條の鐵の線は、するゝと這ひ込んで、最うそれ、昨日一昨日あたりから此の川上で舌なめづり、丁ど貴女が行かれるといふ、鞍ヶ嶽の麓は、鎌首を擡げる處ぢや、私の留めるのは此の事だ、はい。」

煙管を取上げ、流を斜に遠山の頂かけ、殺勢を示してびたりと構へ、陰鬱な顔色して、

「見られい、今日のお天氣も、鶴來といふのに五位鷲が鳴きさうな空合ぢや、太陽様はちやんと照らしてござるが、日中も蔭には闇があります。都と違つて邊土ぢやで、警察の手が届かねば是



非もない。危きには近寄らずや、遠く退いて居るに越したことはないに因つて貴女、悪いことは言はぬ。まづ私の相談に乗らつしやい。」

「懇な言につれて、煙管が宙に動くのを、瞳を流して熟と見たが、傍に憂慮しげな少年より、當の娘は事ともしないで、

「いろ／＼難有う存じますが、まあ、兎も角も参ります。」と判然いひ切る、眉宇に一點の懸念もななさう。

五

村夫子はフンといつて歎息した、半ば眼を閉ぢ、打傾き、

「はあ、其では斷つてお出かけかな。」

美人は些も意に介せず、晴々しい面色で、少年に瞳を返した。

「私はまあ、こんな旅鳥だから、人の目にもつかないでせうが、貴下が其の御祝儀を持つて行らつしやる、お姉様のおともだちなどは、もし今のお話のやうだと、御心配なことですね。」

少年は頭を掉り、

「内の都合がありましたから、私どもの祝は後れて居ますが、其の婚禮は最う疾くに済んだあと

なんです。途中何處を通るといふのでもありません、其の奥様は、湖の別荘に居るんですから。」

「それぢや別條はありませんかね、そして其處らは、可憐い工夫たちの、近寄らない處ですか。」

村夫子引取つて目を睜き、仰山に頷いて、

「まるでかけ離れた極樂浄土、工夫どもが鶴の背で突壞す、埃一ツ來ぬ清らかな湖で、然も大船に乗つたやうな安心な處ぢやが、何うだらうな、貴女料簡を變へて、私がいふ事を肯いて、一先づ湖の方へ來られぬか。」

私は其の邊の田舎のものぢや、好い宿を世話して進ぜう。其處へ落着いてから、人を雇ふなり、連を見計ふなり、それとも逢ひたいといはつしやる人を、都合に因つたら此方へ呼ぶなり、何とか相談の仕方であらうで、悪い事は申さぬが。」

「ですが、あの私は少々急ぐんですから。」

「そ、そ、それがお若い。」

とじり、乗出し、

「其の鞍ヶ嶽に居さつしやるは、人か鬼か存ぜぬけれど、途中、貴女の身體に又然うでもない、もしもの事があつたら何うされる。先方へおいでなすつて、却つて泣きを見られるぢやらう、しばらくの辛抱ぢや、逢はぬが増かも知れませぬ。」



村夫子は大聲に、

「なあ、此家のお婆さん。」

「然よぢや、然よぢや。」と嫗は背屈みをして、針仕事とともに身を入れた。

少年は左右を顧み、いづれが是とも定めかねた、頼りない目遣で、人事ながら心細げに、旅のあはれは是よりぞ知ンぬる風情。

疾くも見て取り、

「あ、其の少人、姉さんは、御思案中ぢやがの、何は兎も角、貴下は私が案内します。城下から此處の湖へおいでなさる、此處までは然まではないが、これから先は川について難澁な傍路へ入ります。見受けた處、くたびれて居られる、又土地のものは、馴れて近道も知つて居るで、幸ぢや、一所に來られえ。」

「可い都合でございますね、貴下、伯父さんをお願いなすつて、ぢや、然うして行らつしやい。ね、」

と頷かせるやうにいつた。

少年は一議に及ばず、

「何うぞお願い申します、飛んだ御厄介でございます。」

村夫子は我が深切の屈いたのを、然も心底から喜ばしげに、飲込み顔、飲込み顔。

「一所においでかな、然うか。いや安心して來られい、田圃道に水溜があつてからが、華奢な身體、抱いて越すに仔細はない、又な。フトすると此處へ、渡船ぢやないが、村方へ魚を廻す漁船が、芙蓉湖へ歸路に通ることがある。あれば徐々來る時分、實は休みながら私も心待にして居ます。其の少人、船が嫌でなくば、景色を見ながら乗るも可かろ。何うぢやな、姉さん、貴女も相談に乗る氣はないかの。」

「私は乗つても山駕籠です。」と屹として、まともに川、遠山を仰いだ眉は、青柳の霞を拂つて、曇りなき月の顔や。

### 山 駕 籠

#### 六

風流線

「へい、煙草が名物でございますで、家並刻みます、鶴來煙草と申しますると、聞えたものでござりやすよ。」と後棒を扛いだのが、土地自慢で得意に語る。東海道雲助は、音の響きと心持で、蜘蛛、と可恐しく聞えるが、此の邊のは、草色筒袖の襦袢に、膝切の緩んだ股引、芋蟲ころ



ころとした形、先棒もこれに同一、それ信州の駕籠舁は、畑主なり蕎麥の花、土地が土地だけ、煙草に附く、蟲のやうなものかも知れぬ。

山駕籠の中で旅の女、苔は堅いが葉のすら／＼とある菖蒲一本、荷物は上へ、屋根裏に挟んだのを、涼しさうに視めながら、溪川の流のふち。

「あゝ、然う。道理で一軒々々、店も、土間も、屋根の上まで煙草の葉だつたね。まるでみぢの中を通つて来たやうな心持がして、薄ら寒いよ。」と彼の赤毛布を被たまゝであつた。前を扛いだは無口な男で、話は後棒が却つて先棒。

「へい／＼、實に最う時候違ひでござります。つい前の白山は、これから眞夏になりまして、谷々の雪が解けませぬで、此の界限は大した暑さといふことを存じませぬ。」

「おや、あの白山は直き其處なの。」

「纜かばかしてござりますが、山又山で、道はなかく、難澁でござります。えゝ、私どもをお雇ひ下さりました、今の煙草の鶴來から、金劍宮と申すのを拜みまして、白山、小白山、吉岡、吉野、木滑村、それから中宮の温泉に成ります。其間すつと峰嶺まで、三方岳、奥三方、千丈平、笈岳、山廻りの天狗様も、一息ついて休まつしやります。御腰かけと申す頂から、妙法山でやがて、白山でござります。背後は早や飛驒の國で、もの十里とはないのでござりますが、つひ

に昔から越したものはござりませぬ。

其の中宮の温泉に参りますと、もし、お嬢様え。」

「おう。」と先棒が聲をかけた。

「そらよ。」

と肩を入れかへる。流が颯と、駕籠は巖摺に石高路、水の激するに異ならず、一揺れ揺れて、すつと出た。

美人は靜に、

「あゝ、何だね。」

「貴女さま、鶴來へおいでなさります前に、お越しなされたでござりませぬ。あの手取川の上を挟んで、中宮と白山下と、向ひ合つて居るのでござります。」

「皆、度々行くのかい。」

「参りますとも。私どもは稼業でござりまして、其の中宮へ湯治に行くお客を乗せましたために、恚うやつて、影法師のやうに、何處か在所の隅に活残つて居ります人足でござります。それも澤山はござりませぬ。錢金で腕車は動かさず、馬は厭だとおつしやるお方はかり。これでも暑中になりますれば、三日に一立ぐらるづ、賃錢が頂けます。」



「而して何なの、私が行く鞍ヶ嶽は、矢張其の路を通るんですか。」

「いんえ、違ひます。鞍ヶ嶽は其の三方ヶ岳、奥三方なんぞの、取着きの難所でござりまして、申さば入口の山門でござりますが、いやもう何の道も、奥の院は、ものごと鷹揚で業が穩でござります、けれども、得てして御門番の衆が、意地くね悪く手荒いのでござりまして、うっかり茸狩に入りまして、どつと足許で水が出たり、目の上で火が燃えたり、六尺棒のかッばらひで、豪く驚かされるでござりますよ。」

「これ、はあ、六尺棒だの、門番だのと、見下げた口を利くめえよ。お山は近いに、當事もねえ。」

と先棒が苦つた聲。

「おつと躓。」

といふと石塊に踏みかけて、駕籠がぐらくとなる。

「それ、見せえ。」 振返つて、だんまりが濼い面。

## 七

屋根うらに掛けた菖蒲ほど、乗つた美人は身動きもしなかつたが、不圖其の耳を欬てたのであ

る。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

先棒の肩の上から、後棒の腰の脇から、路の前後を透したが、露骨な岩山の膚を右に、瘡せた畑を左手に見るのみ、十町四方殆んど人らしいものの影もない、但遙に畦を行く、馬士の寸と、駒の尺、日は當つても影を見るやう。唱名は判然と近いから、

「若い衆さん、お寺があるの。」

「別にお寺はござりません。唯此のさきへ参りますと、比咩神社と申して名高い白山のお宮がござります。」

「でもお念佛が聞えるよ。」

「はあ、彼でござりますかい、ありや、何でござります、大巖の傾斜地藏を拜むのでござります。」

「かたがり地藏？ 妙な名だね。」

「御覽じまし、細ッこい此の谿川の流の岸は、恚うやつて巖が屏風を立てましたやうでござりませう。其の上へまた巖がいかいこと押かさなりました中から、一個、圓になつて飛出して居りますのが、直ぐお顔でござりまして、三丈ばかり、見上げるやうな自然石へ、御像が刻んでござり



ますが、路傍の如意輪様見たやうに、何でも願をかけます事を、合點々々の形で、頭を傾げて在らつしやいます、其處で人が傾斜地藏と申すでござります。え、むかし其の、豪い貴い坊様がお刻みなさりましたさうで、なあ、合棒、何とかいふ坊様だツけや。」

「泰澄様よ。」

「それ、役の行者か泰澄様かと謂はれたお方でござります。験がござりますに、お嬢様御參詣なさりまし。」

「ぢやあ、直ぐ巖に刻んであるの。」

「然やうでござります、へいへい。」

「頼母しいねえ、路々聞けば、山には恐しい魔が棲むといふのに、巖が其のまゝの佛様もおいでだよ。」

南無阿彌陀佛々々と早や耳許に聞えると、後棒も口の裡で南無阿彌陀佛々々々々。

「南無阿彌陀佛。」先棒も調子を合せて、山駕籠は土の上、新木の高い小屋がけの前に下りた。小屋は唯柱で支へて、屋根ばかり。山路の石も草も、其のまゝの土間にして、櫛を入れた桶が三ツ四ツ、流の岸の巖に載せて柄杓が又二三本、柄を此方に向けて斜達に差置かれた。入口に床几を据ゑ、敷物をかけて、一人、袴を一着に及んだのが、傍に小さな机、帳面を開いて往來をじろ

じろ見て居る。

「此處かい。」駕籠の中で、美人はもつれ毛をかけた頬を傾け、顔を外へ、目を遮つた薄暗い土間を透して、下から見上げるやうにすると、仰ぐばかり高い屋根の、向の廂は纔かに御胸の邊なり。正面の巖石一座、苔滑かなる法衣を絡ひ、蔓葛を袈裟にかけて緑青の色堆く、暗き山かと立たせ給ふ。御顔を衝と差向けて、人を見給ふ風情、拜むものと目を合せて、微笑ませ給ふに似たり。然も其の偉大なるや、前に五百の衆生を置いて一切平等、蛙の干物も御目ざしの惠の露に洩れじとこそ、悚然として寒氣のするまで、袖、袂に、清水の點滴、其處ばかりは淵をなして、山寺の鐘も沈むべく、耳に絶えなかつた谿川の響も絶えて、松風が颯と吹く。

八

後棒は襟を擴げて汗を拭いた、手拭を膝に掴んで、小腰を屈め、

「え、お草鞋を脱いでいらつしやりますで、此處でお詣りなさりまし、御面倒でござりませう。」と心づける。駕籠を出るには土間へ跣足であつたから。

けれども居すまひを横にして、美人は、石像を正面に向直つて、

「それぢや餘り失禮です、下りませう。」といふ處へ、息杖を差置くと、直ぐに小屋の中を一文字



に、影寒きばかり澄切つた川のふちに行つた先棒の無口なのが、柄杓に一杯流を汲んで、柄と兩端に兩手をかけ、胸のあたりへ捧げながら、御手洗を齎らした。

「へい。」

「まあ、お世話ねえ。」と荒漢の然もだんまりの、恠るしんせつ、思ひかけざる状して、嬉しさうに情を含んでいつたが、

「一寸待つて。」手を白やかな咽喉に懸けると、襟を結んだ手拭の端を解く、先づ片袖、よろけ縞のお召の袷、紅なし友染の長襦袢は絞の菖蒲、花片に膚を包んで、八口から、しつとりと、駕籠にかゝつて、はらりとなる。留南奇の薰人を打つやうに、淺黄の小柳縹子獨鈷入の帯を漏れて、姿を蔽つた赤毛布、するりと撫肩の背を落つれば、かさねた踵の蝶白く、狂ふが如き牡丹花は、燃立つばかりの背負上であつた。

「憚り様。」

「はッ」といひながら先棒は、餘りの艶麗さに、堅くなつて、ぶる／＼しながら、加減なしにとツ、一浴せ。水は掌の白きを透して、颯と土間へ、流るゝのであつた。

後棒は又此の小屋守とでも云ふ風な、帳簿を控へた男の前で、二ツ三ツ續け様にお辭儀をしたが、やがて渠が乗つかつた床几の下から、其の穿物であるらしい、齒のさゝくれと共に臺の廣い

日和下駄を撮み出して、此方に向返る途端に一目、はじめて彗星よりも驚いたのは、美人の胸に、幽に星の光を曳いた、燦たる時計の黄金鎖。

きよろ／＼しつ々借下駄を丁と直し、

「召しまし。」

「皆、こんなに御苦勞を掛けて濟まないね。」

鬘のもつれ、背のゆらぎ、片膝立てた、右の裳、軽く穿物にかゝつたが、不圖躊躇へる状である。

時に拜み果てて一人、田舎親仁、小屋を罷出る體で、川と御像を背後にしたが、繪馬一ツない小屋の屋根、ちら／＼弱くさす日の光を、あんぐり口開いて當所なく晌し／＼、後棒のあとと床几の前を、横に抜けて出ようとする。

「待て、待たんか！」と呼んで留めたのは、古袴の小屋守で。

這奴物ありげな面體、御佛にかしづく者には似ず、昔々九郎判官吟味のため、新に据ゑた關所の頭人、富樫殿の御内にて、落栗轉倒太といふ風あり。今や稀に、役場の受附に於てこれを見る。



轉倒太は田舎漢に一睨を呉れて切口上。

「これく、素通りをしてはならんよ、待ちなさいく。」

「ひやあ、何でござえすけえ。」

「何でござえす？ 何でござえすぢやない、何分の寄進に附いておいて、お鳥目をお上げといふのだ。」

田舎漢は腕組の下へ、懐の財布を大事に壓へて、

「御冥加錢さ、お賽錢箱へ入れたでがすが。」と怪訝する。

「賽錢は賽錢さ、別に寄附をしなさいといふのだ、此の帳面につける分だよ。多少には寄りません。」

田舎漢は急込んで、目に焼けた色を眞赤、吃つて額の汗を拭いた。

「で、でござえすから、多少には寄らず進ぜたてや。」

「何、其は其として、別に志をお出しなさいよ、分らないな。」

ますく、澁つて、

「そりや、そりや何でござえす。もの、些とばかりでお恥しいこんだけんど、引續いた凶年で心には任しましねえ、それで、はあ、志だけは出いたでがすよ。」

「分りませんな、お賽錢の事ぢやないといふのに。」

又睨んだが、纔に頷き、

「は、あ、お前、何にも知らんのだ、何かい、近在の者ぢやないのかい。」

「私、何でござえす。木滑在のもんで、はあ、鶴來まで用足に行つた歸りでがす。」

「む、然うだらう。」

と頬杖で帳面の端を撮み、田舎漢の寸延な面を、輕蔑したやうに視めながら、何を讀むともなく、へらくと引返して、

「それぢや此のお小屋は何時出來たか知らんだらう。」

「一昨年参りやした時には、何も無かつけえ、其後はしばらく拜みましねえよ。」

「だからよ、こりや去年の夏出來た、お前方、何うだ、それまで參詣をする時は、野天に畏つたものだらう。そら、日が照つても其なり、雨が降れば濡れ、風が吹けば吹曝し、處を、可いか、信心の衆が、炎天干雨ざらしは氣の毒なり、さればといつて、佛を拜むにお天氣を見る分でもなからうといふので、今度な、同行の便利の爲に、可いか、お慈悲深い旦那様が、お建てなすつて下さつた。」

「や、それは早や御奇特ぢや。はい、南無阿彌陀佛。」



「可いかね、其處で其のお慈悲深い旦那様といふのは、お前方は知つてるか何うだか、城下に、貧窮人の、お救小屋を立ててお在なさる、巨山様といふ今の世の活佛だ。」

謂ふや否や、聲が聞えたほど慌しく、

「ひやあ、あの活如來様でござえすけえ。」

「然う、然う、然う活如來。」といつて、面を和げ大得意。

「知らねえでか、私が村さにも、崖崩れに潰れた家の、活残つて何うもなりましねえのが、二軒も如來様に養はれて居りますで、はい〜。」

「分りましたか。で、其の如來様が諸人便宜のために、小屋をお掛け下すつた。處で又此の下へ入つて、雨露にも打たれず、蓮の臺を被つたやうに、難有く、安樂にお參詣をする冥加として、皆さんから屋根代を頂戴します。」

「お嬢様、お召しなされまして可うござります。」

後棒は美人の駕籠を出ようとして控へたのを、借りた下駄の遠慮だと思つたのである。

「少時。」と小聲でいつて、衣紋正しく、小屋守が言分に耳を立てて控へたり。

十

小屋守 爽な辯舌で、

「けれども屋根代を頂いて、別に其でお小屋の入費を差引くといふ譯ではありません。寄進にお付きなさる若干金は、皆城下の其のお救小屋へまはして、諸人助の足にするんだから、何の事はない、手数入らずに慈悲善根を施す道理、功德ではあるまいか、何うだね、分りましたか。」

「そんではあ、些とばかりでも如來様が諸人さ助けさつしやる、お手傳ひになるでござえますか。」

「然うだ、砂利が須彌で、お前の村方でも食べさせて頂いて居るといふが、皆其の天窓へ情がかゝるさな、眞實だよ。活如來の巨山様は、聞えた大分限者でいらつしやるけれども、何しろ貧窮人多勢の處へ、續いての凶年で、今日も三人、明日も五人と、小屋入をする始末だから、金銀は落ちて居らず、御自分の飯を一杯減らし、召物を一枚脱いで、人助けを遊ばすで、巨山様お身なりなどといふものは、恠う見受けた處、お前さんより、もつと粗末。其のかはり昨日拾ひ上げられた乞食でも、一度救小屋へ入つた上は、今朝ッからお前さんのやうに破れた股引は穿いて居らぬ。いえさ、譬だが、まあ、其處がお慈悲だ。あ、多少には因らんからな。」

田舎漢は背伸をして、財布の底を探して居た。



「それ、十銭が五銭でも、一々帳面につけて、國處、姓名が丁と乗る、月の末に縣廳へ差出すと、知事様が御覽になりますぞ。」

「ひやあ、南無阿彌陀。」

小屋守は筆を構へて墨を含ませ、

「え、木滑村か。」

「上でござりやして、へいへい。」

「上木滑村……石川郡だね、名は……六兵衛、さあ、つけました、縣廳で御覽になるよ。」

六兵衛大き手を内端に出して、机の隅へ密と置く。

「一銭！」と高らかに調子を張つて尻上り。

これに怯乎としたやうす、又撮み出して恐々乗せる。

「二銭か。」と氣の抜けたやうな小さな聲。

「はあ、お輕少でござりやす。」止むことを得ず重ねて二銭。

一寸一寸の一寸、三ツ、銅貨をはじいて、ひよいと並べて、

合せて三銭、石川郡、木滑村……六兵衛、知事様が御覽になるよ。」

だら／＼流る、汗だらけの胸を、平手で拭うて、六兵衛足も地につかず、

「勘辨してくらつせえ、これで何うにもなりましねえ。」

「五銭、確に受取り。」と持直して筆を置いて、小屋守は顔を背けた。

六兵衛はほつと息、憐を乞ふ笑滿面、皺の中に目を細めて、

「はあ、もしお次手さござりやしたら、私等村からお救小屋に入りやした、七左衛門後家と八平

が爺様に、もの、變ることちうもねえだかと、おことづけさ頼みますてや、やあ。」

と、お辭儀をした。

小屋守見返りもせず、帳面に肱をついて、黙つて二つばかり打領く。

後棒が、

「もし、お嬢様。」

「私や參詣は止しませう。」

十一

裊を駕籠の中へ折返して、美人は下駄にかけた足を引いた。

立てて居た膝を屈め、手を支へた姿小さく、恰も石の袖に包まる、やう、小屋の彼方に斷崖暗

き、巨頭の地藏尊を伏拜んだ、合掌を解くと、左右を見て、



「駕籠屋さん、出掛けませう。」

時に擦違つて背後を通つて、とぼく小屋を出る田舎漢の、石高路に揺らるゝばかり、浮きつ沈みつする體で、世の中疑はしい目色をしながら、二三度見返つて立去るのを、うつかり見送つて居た駕籠の後棒。

「へい、御參詣なさりませんで可うござりやすか。」

「此處から拜みましたよ。」

「御見物がてら、入らつしやれば宜しうござりますに。」

「だつて、屋根代が要るといふもの。」

「後棒、上げようぜ。」と口を切つた、先棒のだんまりは、揃へた日和下駄を搔撮んで、無言で床几の下へ、突戻すやうにして、大跨に取つて返した。駕籠昇どもも、小屋守が舉動、仔細は知らず幾分の不平を抱いたに相違ない。齊しく拗ねたといふ見得で、

「そらよ。」

「おう。」小屋を打棄つた乗物の上げ方や、美人の姿は地を離れた、神々しいばかり高くなる。

「もし、もし、もし。」と尻上りに小屋守の物々しい呼留めやう。

「私かい。」

「え、駕籠のお方、何分の御寄進をなすつて下さい。」

「否、私は其の小屋で、雨も風も凌がしては頂きません。」

「では其の、屋根代とは申しますまい、巨山家の慈善事業に、御賛成下さつてな、御志頂戴いたしたうございますが。」

振向きもせず駕籠の中で、横顔で莞爾して、

「私は人助けをしますやうな、そんな難有い身分ぢやないのです。」

小屋守は色を作し、

「ですが、お見受け申した處、五十錢、一圓にお困りなさる御仁體でもありません。へ、へ、へ、駕籠になんぞ、お召しなすつて、貴女。手前主人なぞは、いたせば馬車にも乗られまする身代を、貧窮人のために跣足で駄まはつて世話をしますぢやありませんか。」

「それは御勝手になさいまし。」

「はてな、知事様も御賛成で、私は正五位ぢやけれども人間ぢや、巨山殿は無官ぢやが、佛たとおつしやつて、尊敬をなさるくらゐ、誰一人涙を流して感心せぬものはないんですが、何だかお氣に入らないと見えますな、貴女。」

貴女は變な方ですな。釋迦にも提婆だ。話の種にお名前を承りませう、何といふ方です、お



名前は何といひます。」

美人は柳眉を動かして、口を結んだ、しばらくして、言はねば卑怯だと思つたらう。

「名は龍です。」と言ひながら、激した風情で、菖蒲の葉をじり／＼と裂いて、礮と投げた。

「姓は、住處は？」

「ほ、交番でお聞きなさいな。さあ、駕籠屋さん。」

ふれ 状

十二

三宮は鞍ヶ嶽の陰に隠れた、山間の小さな村で、村長九郎次も小さな老人、天保年間の生とて、演劇の庄屋様好の扮装、村端の流に近く、野佛があつた跡の土饅頭の上へ押上ると、椿の樹の下、小藪の前、男女入り交り十四五人、ずらりと取巻いた黄昏頃、中にはきちんと髪を分けて派手な浴衣を着たのもあり、白粉を濃かに、紅い二布の見えるもあり。

九郎次は忙しさに懐中から端を見せた、四疊みの状一通、一大事認めでありさうなのに手かけたが、ずらりと天窓敷を見渡して、

「やあ、皆の衆、一統へ傳達さすべし事あるで、此處で讀上げて聞かせるぢやが、薄暗うなつて来たで、眼鏡でも間に合はぬ。雑と主意をいふべいに、能う覚えエ。またそれ／＼へ觸れるだぞ。」

「お庄屋様、何か、御苦勞でござりえす。」と色の生白いのが先づ會釋した。

「朝から方々駈歩行いて居るわ。こりや今はじまつた事でない。後月十五日前さから、施法院の方丈様と談合の上、一筆認めて、二太郎が家を筆頭にずらりと廻状さ廻しただが、一向に埒明かぬ。ものの此村は家數百と無いに、書いた事は六條か七條、煙草一服吸ふ中に讀めるこんだで、印をつけて隣家送れば二日とはかゝらぬ筈ぢやが、一月の餘になつても、未だ四軒目へ届かぬではあんまいか、扁や疔が面倒で讀めざらば、それ、お寺へ來ても、學校さ先生が許へ持つて行つても、分る事だに、はてさて不念千萬な。

其内に日は迫る、一處へ呼び寄せべいにも、足はのろし、手は届かぬ。其處で日がな一日恚うやつて廻つて居るぢや、些と氣をつけて呉らつしやい。」

一ツ叱言をいふと、村の束の不機嫌さ、伯父親の意見よりは利が強く、鎮守の祭に雨が降つたほど寂となる、機を見て、九郎次痰のある咳拂。

「餘の儀でないや。主たちも知るづらあ、追つて此の邊へもな、鐵道が敷けて汽車が通る、それ、陸蒸汽といふ機械ぢや。就いては、其の道さ拵へに、人夫どもが繰込むわ、やれそれと夢見



たやうに思ふ内に、やがて今日明日、鐵棒をこそ持たねども、鶴背を提げた草鞋穿の鬼が、によ  
ツこり鞍ヶ嶽のそれ其處さ、入口の橋の上から、顔を突出すは、今かも知れぬ。  
噂より十倍での、小娘は裂いて樹にかける、圓鬚は田の中に突込まれて、島田さ土手に仰向け  
ぢや、いやはや、恐しいことの百年目。

手取川向うから、三人五人、十人づゝ、何處までも續いて、幅三里ばかりの間の人捉網ぢやで、  
目にかゝると命がないぞ。此の先の木滑在から、辰口の温泉へ行つて、奉公さして居る湯女ぢや  
が、馴染の後追うて城下へ足拔をする途中、傾斜地藏の鶴來路で、手酷い目に合されてな、横に  
見過いて行く筈の、親許へ倒れ込んだは今朝の事ぢやに、人の身の上と思はつしやるな。女房た  
ち娘ども、夜歩行は斷つての事、朝晩も氣をつけて、うつかりと一人で出まいぞ。また戸締も氣  
を附けるぢや、戸の方へつン向いて、明け放して寐ては成らぬ、傳達は此のことぢや。それゝ  
恠ういふ内から、主たちは何うしたものだ。手を握つて居るのもあれば、腰を撫でて居るのがあ  
り、や、頼すりした和郎も見える、苦々しい。」と情なさう。朝から歩行きづめの藁草履、半ば摺  
りへらしたので踏みしだく、踵に石の觸るより、餘程こたへた顔色で、九郎次は衝と下りた。土  
饅頭の左右に分れ、膏汗とともに握り合つた手を放して、皆うろゝゝとももの色、紅、白粉も逢  
魔ヶ時。

### 橋の袂

#### 十三

「お貞、何うしたのだ、庄屋の爺さんが朝ツからくるゝ廻つて居たが、今また其處で、何か説  
教をしたやうぢやないか。」

九郎次が見て、此村へ、鬼が今にも其處からいつた入口の橋の上、欄干に兵兒帯をかけて、  
凭懸つたやうな腰をかけたやうな、反身で居るのは、當三宮村、尋常科の訓導で、其の鼻の下の  
髯とともに、唯一人の學者である。

藪の前の暗い中から、白い蝙蝠ひらゝくと、黄昏の色に分れて、水ある方へ歩行き寄つたは、  
部厚な大面の肥満娘、いや塗つたことゝ、庄屋が白壁に異ならず、髪を束髪に、帯をお太鼓に、  
紅の二布下駄に溢れた、厭らしき風俗、束髪だけに、お太鼓だけに、即ち訓導の御物にて、見  
識が高く、脊が低い。

お貞は猪首を抜衣紋で、會釋と嬌態と、目づかひを一所なり。  
「先生さ、私等は何うしべい、鐵道の工夫ちうが、遣つて來るで、是からも、多時夜歩行さ



出来ましねえとよ。暮方に出てても擱まつて殺されるちうだ、何たる事だんべいか、巡查様頼むち  
ゆつて、此處ら七ヶ村に、出張の旦那、一人切ではしやうことがねえだし、お前様明日から何と  
して逢ひますべいね。」と愁ふる顔、梨花の雨の風情に似ず、胡瓜の花に五月雨也。訓導は鼻で笑  
ひ、

「當前だ。工夫が来ようが、何うしようが、女の出歩行はよくないなあ。皆浮氣に生れついて、  
人の謂ふ事を背かないのだから、丁ど可い意見だね。は、は、は、何だとよ、如何に亂暴だつて、  
矢張目のある人間だ、然う無法な事をする筈はない、心がけの良いものなら指一本も指さないさ  
うだ。其のかはりお前のやうな悪性ものは、譬ひ石櫃の中に入つて、鐵の鎖を下して置いて、  
擱み出して慰むとさ、夜歩行きにや限らない。」

聞くと齊く胡瓜の花、蛇が吸ふかとぶる／＼して、

「あれ、私さ何處に浮氣のうしますだよ。お前様が先生だあで、私はあ、田植にも出ましねえだ。  
平百姓の娘とは附合もせぬやうにして居るだに、酷いこといはつしやるよ。さあ、何處さ私悪  
性だか、それ、聞かない事にや濟みません。」

と、身を揉んで擦り寄る肩を、訓導襦衣を着た手で抱へ、

「そしたら、何だつて我輩の姿を見ない中に、其處らうろ／＼出て居るな、何處かの土百姓と、

矢張こんな風だらう。」と丁と突放すと、欄干にぐにやりと縋り、

「何をいはつしやるだよ。庄屋様のお達を聞くだつて、彼の達とはすつと背後に離れて居ました  
は、私一人でねえかね。平時、お前様、お姿の、此處で見かけましねえぢや、背戸の瓢箪棚の下  
さ潜らねえだけんども、先刻はあ、やあ俳優の立女形さ駕籠で乗込むちゆつて、小前の娘ツ子さ  
大え騒の遣るでねえかね、私未だ化粧が済ましねえだつけんど駈け出してそれを見ただよ。」と、  
づんぐりした腕を出して、鬢を搔撫でたものにて候。

「嘘を吐け、狒々が勸進元をしまし、何の洒落にこんな山へ女形が乗込むものか。」

「いんねさ、俳優ぢやねえけんども、繪で見たやうな美しい女さ、駕籠で鞍ヶ嶽へ行つただよ。目の  
切の佳い、細面の、色の白いことさ、日向を歩行いたとは見えましねえ、それに豪く品が好えた、  
そんではあ。」

と、襟を抜き、腰を撫でて、

「見たくでもない赤毛布さ被て居ただ、銀杏返でよ、開けねえぢやあんめえかね。」

十四

「あとで娘ツ子さ、山媛だ、山媛様だ、ときよと／＼して、恐怖がるやら、難有がるやら、拜む



ものもあつただね。野面から飛出して来た若い衆達は、遠くから見た目に、赤毛布でねえ、もみちを着て居さつした、秋祭を待たねえで、あの駕籠さ、お神輿にして擔ぎたかつたツて謂つただよ。」

「何處のもんだ。」

「そりや、はあ分りましねえ。」

「而して何か、是から鞍ヶ嶽へ上つたのか、何を當てに行つたらう。」

「然うだあね、其の女さも何處の人だか分りましねえし、もう一人、山の天邊の千蛇が池さ縁に、此間つから籠つてござる何處の者だか分んねえ書生さんがあるでねえかね。どちらもどちらだアで、其の人さ尋ねて行くかも知んねえだよ。」

訓導は是を聞いて、然も輕んじ賤めた態度で、頂の方を見やり、

「何うせかはりもんだが、おい、お貞、そんなに住い女か。」

「あれ、見たくでもねえ、そんな住い女だら何うするだ。」と厭な目色。

「こんな住い女だら何うするだ。」と未だものの色は分るのに、訓導は、ぐいと娘の頬を突いたが、お芋の煮えたを箸でさいた形である。

「は、は、は、いや、そりや可いが、お貞、其の旅の女から、此處の橋錢を取つたらう、錢は誰

が預つて置いたんだ。」

「誰も請取りはしねえですよ。」

訓導は眉を擧め、

「請取らない、何故請取らない？ 誰も何とも謂はないのか。」

「何はあ、お錢さあ置いて行かつしやいと謂うただがね、寄越しましねえ。」

「えそりや、何だ、橋番を置いてあるんぢやないから、橋錢を呉れるツたつて承知はしない。巨山様の慈善事業に寄附を頼むんだつて謂はなけりや不可いと、吩咐けて置くのに、氣が利かない山獸どもぢやないか。村の者も村の者、大分月末に纏めて納める、橋の錢が滞るぞ。商賣ではないから、一々請求をする譯にも行かんがね。我輩が凡て預つて巨山氏へ一纏めにしちや届けるんだから、粒が多いほど世間へ對して我輩の顔が立つ。三宮には訓導の垂井が居て、これ／＼の寄附を募つたと、體の可い、我輩の名譽になつて、知事公にも名を知られる、詰り出世の基ともいふもんだから、お前も我輩の何なら心付けて、随分催促をしてやれ、眞實だ。よく／＼目をつけて下さればこそ、我輩だけは此の邊でも巨山氏の芙蓉瀉の別荘へ出入が出来るのさ。お前なぞも又働きに因つては、我輩の何だといつて、あの別荘を拜ませて遣る。其の結構な事、まるで御殿だ、四方湖で取巻いた景色なんざ、龍宮を見たやうだ。なあ、人事ではないぢやないか。」



だから其の旅の女になんぞ、お前が眞先に談判を爲る筈だ。」

「はあ、皆ががやくといはしたつけ、片田舎だ、言が通じましねえ。私、先生さど何ぢやお蔭にや、何でもちやんと分るけに、橋の錢さ出してくんなさるちうと、橋錢は幾干だ、言はつしやる。いんね、此處さ橋の錢貰ふでねえツて、活如来様の事話したら、又かい、御免だよツて、ずんく行かつしたけえ。何かもの凄いやうな女だでね、村の衆も氣怯れさして、其のま、通して了うただよ。」

訓導はちよツと舌打、

「變だな、巨山氏の名を聞いて、御免だなんぞ、罰が當る。」

十五

「待てく、しかし禍が福で、丁ど可い、此の邊へ陣取るといふ、工夫どもが乗込んだ日にや、何の事はない其の女の後を追懸けて來たやうなもんで、鞍ヶ嶽へ封じ込んだ形になる、手當り次第亂暴な奴等だ、然も山へ上つたのは美しい女だといふから、何の道玩弄物になつて、死骸を曝すか。それが厭なら麓へも降りられまい、巨山氏を御免だなんて、罰は觀面だから恐しい。」

「然うだあよ、山から降りられぬやうに成つただら、笈ヶ岳の夫婦雪崩になんべいさ。」

對手が及びもない美女だけに、訓導の令聞呪ふやうな事をいつた。俗に夫婦雪崩と稱へる、昔西國方の旅の巡禮の若い夫婦、奥三方に詣でんとして、途中笈ヶ岳の半腹で、不意の寒さに封じられて、千丈の雪に埋まつた、翌年春五月、一山の雪悉く消えた朝霞の晴間に、男女の姿、二ツならんで、山懐に眞白に残つたが、笈を擔いだありのまゝの俤、それより年々雪解の頃、唯其の姿ばかり消え残つて、やがて颯と失せるのを、口碑に傳へていふのである。

「眞實だ。」

「それだが先生さ、私等も何うかされはしねえだかと、はあ、心配で、氣術なうてなりましねえ。」

「馬鹿を謂へ、人を見て法を説けた、何、我輩等見識のある者に、奴等手出しをするものか。束髮に結つたお前なんか、第一見な、村の若い者だつて恐れて串戯口一ツき、やしない。其と同一事よ、附いてる者が附いてる者だと、自然と威が添ふからお辭儀をして先方から除けて通る。皆宵の口から戸じまりをしたつて、お前一人は威張つて歩行け、其處は、我輩といふ者が。……」

橋の袂へ前方から、村をさして、きやつ、きやつ、ざろくと小兒ども。

「錢くれさい。」



「先生がいはしつた、私等が小遣にするぢやねえだよ。」

「施行だ、施行だ。」

奇音を發して口々に聲を上げ、左右を取巻き、ぶら下るやうに、八九人、眞裸な兄も交つて、

彼處の空地で相撲を取つたのが、むら／＼とたかつて來たが。

橋の中途に令閨と二人で控へた、訓導の姿を見附けると、哄と忠義顔に勢づいて、二三人前へ廻つて取切つて、

「錢置けちや。」

「施行せいやあ。」

優しい聲で、

「靜に、靜に、何をいふのか一時で分らない。何うしたんだな。さあ、能くいつて聞かせて呉れ、叔父さんには分らないから。」

と、腰へ摺つた、一人の兒の兩手を取つて、茶の中折帽の下に、秀でた眉を俯向けに、眼鏡をかけたが伏目に見ながら、薄い髭ある引緊つた唇に、詮方なささうな笑を含んで、嬰兒も懐くべく柔かに尋ねていつた。

脊は餘り高くない、中肉の瘦せた人物、無造作な洋服で、膝より高くズツクをかけた、鶴の脚、

草鞋軽く穿しめて、枯木の枝の短なのを、杖の代りに提げた、年紀は三十二三であらう、全身一點の弛める線なく、繕はずして、自然の品あり。一度名工が是を見なば、其姿をありのまゝ、或は描き、或は彫みて、立處に一個何等か専門の學者の像を爲し得ることを認めるであらう。けれども三宮村の訓導垂井の眼には、纔に山林の小官吏、月給は、恐らく自分より下ぐるるに見て取られた。

### 急先鋒

#### 十六

垂井訓導は、それと見ると愛娘の肩を離れて、凭懸つた橋の欄干から分れると、兵兒帯がだりりと下る、腰を据ゑ、反身で徐々と歩み寄つて、

「何ですな、何うかしたのですか。」

旅客と小兒どもへ兼帯に聲をかけると、幼いものは一樣に、訓導の顔を見上げて、口々に又哄と騒いだ。

「先生、此の人さ、お錢を出さねえだあ。」



腰に掴まつた里の童の手を取つて、俯向いて其のきよろ／＼やる猿眼を見て居たのが、傍に搔  
退け、面を上げて、旅客は訓導に立向ひ、  
「先生……ですか、貴下。此の小兒達は何をいふんだか、大勢一時だから些とも分らんで困りま  
した、何ういふことです。」  
訓導は頤に手を當てて、

「静になさい、然う騒ぐんぢやありません。」

先づ威勢を見せて、蜘蛛の子を追ひ散らし、

「君は御存じないと見えます。皆でお錢をお錢をと申したわけで、此の橋をお渡りなさるのに、  
幾干かお出し下さいといふんです。」

「分りました、橋錢ですな、幾干。」と直に衣兜へ、無造作に手を突込む。

此方は何のためともなく、腕まくりをしながら、

「何、橋錢ぢやないのです。街道筋の商法橋なら、渡賃を頂けばといつて、たか／＼八厘か一錢  
ですが、それと性質が違ふのですな、御覽の通り橋が恚うやつて新しいんで、」

とゆるやかに饒舌り出すと、煩雜いといつた形で、旅客は二ツ三ツ杖を掉つた。

「新しいから、如何程なんです。」

「別に値價といつて極つては居らんの。一體こりや去年此の土地の洪水のあとで架りましたが、  
村で致したのぢやありません。以前は唯もう丸木橋のやうなもので往來をして居たですが、其の  
水で流されますと、村方困窮の折から、丸太一本手の届きません處を、篤志の大慈善家があつて、  
新に立派なのを拵へて下すつたですな。なし崩しに其の費用を辨するといつても、人助けにされ  
た事業ですから、取らうとは言はれんですが、其の方は又久しい以前から、城下に救小屋をお建  
てなされて、出入りいつも四五百の窮民を養うて居らる、で、其の幾分の足に、廣く諸君の寄附  
を仰ぐでして、慈善家の恩恵で出来ました、此の橋をお通りの方に、志を頂戴しようといふわけ  
です。僕が申さいでも當國の境をお跨ぎになつた以上は、速に御承知でありませう。慈善家とい  
ふのは、巨山氏、誰も活如來といへば、知らないものはありません。」  
巨山といつた時、旅客は稻妻の如く其の眉を擧めて、颯と不快な色を湛へた。と同時に人の面  
を襲うて、キラ／＼と輝いたは、磨ける鋼鐵の杵を溢れて、眼鏡の下に一閃した、鋭い瞳の働き  
であつた。

是が爲に、射竦められたか、思はず顔を背向けて振返る、訓導の背後の方へ、ならば爪立つて  
歩きたさうに、肥満女、束髪は堆く、胸を張つて、脊の低いのを氣にする足つき、肉をたぶだ  
ぶと近いたが、恰も弾き返されたかと、あとじさりに衝と退いた。



間は遠し、此の女は、旦那とともに旅客の眼光に恐怖を抱いたわけではない、別に膽を冷し、魂を消すべきものがあつて、橋の袂に來たのである。

「親方、もし、何をなすつて在らつしやるんで。」

旅客の右手に來て立停まつて、一寸肩を揺つて會釋をした、一個の壯俊、色黒く、額狭く、鼻隆く、頤細く、觸ると火の出さうな眼の上へ、向う頤卷を緊乎として、口許の苦み走つた、威勢の良い奴、(風)と紺地へ青く抜いた、半被、腹掛、三尺帶、竹を破つたやうなきり、と細い足ごしらへ、朋友の分も背負つたらしい、鶴嘴を二挺、斧を一挺、柄を繩で結んで、一所に、ひよいと軽く肩。親方に引添うて、じろりと訓導を見た凄さ。

十七

然ればこそ此の兄哥、鬼ならば刃の牙、蛇ならば炎の舌、悪工夫の急先鋒、渾名を一番槍力松で。

今呼んで親方といつた、敢て邊幅を修せずと雖も、品威自から兼備はり、清癯鶴に似たる人物は、北國の新線路擔任の技師、工學士、姓は水上名は規矩夫。一同旦那と稱へ、先生といふ處、對手に因つて、殊に此の力松の時の如きは、親分となり、親方となり、お頭となり、棟梁となり、

ともすれば隊長となるのである。

「親方、何うなすつたんだね、え、親方。」

工學士は靜に振向き、

「橋を渡るのに幾干か寄越せといふ掛合なんだが、」

「へい、ぢや何ですか、此の橋に渡を付けろといふんですね。へん、石橋の山車が練込みやしめえし、何をいつてやがる、生意氣な、何奴だ。」

眉の根を八文字に縮めると、小股を踏開いてづつと出た。

「汝か、やい、お頭に木戸を突きやあがつたな。出る、こん畜生、仰様に反らして、土性ツ骨を渡つて呉れう。」

訓導は兵兒帶の端とともに雙の手をたたりと下げ、魂を宙に、足もふら／＼と前途を開いて、横様に又欄干に附着いた。二三間隔つて、白粉は妙な腰つき、口紅の色も蒼くなつて、肥つた死神のやうな手ぶり、身を揉んで招いて居る。

「さあ、お出でなせえ、親方。」と路を譲つてあとに退つた、力松、鶴嘴の肩を入交へ、フ、ンと笑つて、

「獣め！」



「待て、亂暴な事をいつちや不可ん。そして何だ、錢を惜んだやうで見ツともない、力。」

「え、」

「皆、最う此處へ来る時分か。」

「直ぐ参りやす、長靴の大将も一所でさ。」

工學士は頷いて、杖の尖で地の上に線を描いた。

「ではな、私は代を拂つて先へ渡る。」

「お止しなせえ、親方、詰らねえ、何ですぜ、何處か其處らに居る奴でさ。餘計な橋錢なんか取

上げやあがつて、第一此の村の奴等が迷惑をするんだツて謂ひますぜ。水が無けりや真中から打

壊して通る處だ。がたく震へて落ちちねえやうに、欄干に掴まらして置く内がお情でさ、打棄

つておいでなさいやしな。」

「まあ、待てよ。」

と工學士は、幼兒に對した時の如く、莞爾と片頬笑み、

「可いやうにするから、黙つて居な。で私は先へ渡る、お前此處に、皆を待合して居るんだよ。

可いか。」

力松口を尖らして、

「可うがす。そりや可うがすがね、だつて馬鹿々々しいぢやありませんか。私ア吝でいふんぢやありませんが、鏝だつて出しませんぜ。」

井をぐわちやくと、

「恠う、あるにやあるぜ、髻もありや錢もあら、汝に拂はねえばかりよ、唐變木。」

「ぢや、貴下、志だけ、輕少です。」

銀貨一片。

黙つて手を出さず、目ばかり睜つて大息を吐いて居るから、工學士は其のまゝ、訓導の脇の傍なる欄干の上へ、衝と差置くと、姿黒く、夕暮の橋の新しい上に、鮮明に露はれて、悠々と通つた。

氣で壓されたやうに、束髪は身を翻して、ひよろ／＼と出たが、五歩も行かず、立竦んで停まつた前を、すつと過ぎ、やがて渡り果てる、と早や暗い。

藪の邊で、其の姿が見えなくなつたと思ふと間もなく、岸なる岩の上に、すつくと丈高く瘦せた彫像の風情で立つた。

手にした枯枝の枝も揺ぐばかり、水は近く、靴の尖に雪を碎いて、颯と翻つて、靜に流れて、又颯と翻つて、靜に流れる。



對岸一叢の樹立の中に、八日の月の影淡く、處々に岩の光、流の色。  
力松も橋の袂を開いて、學士とさしむかひに相臨んで、此の溪川を隔てたのである。

十八

「親方、親方。」

流は近く岩に響き、聲は遠く谷を返した。力松大音に、

「來ましたぜ、來ましたぜ。」

「來たか。皆其處に留まれといへ。而して捨吉を呼べ、捨吉を、と工學士はや、伸上るやうにし  
て、此方の岸から命じたのである。

力松は背後様に、片手を高く舉げて、

「やあ引、急げ、やい、急げ、と下腹に踏張を入れて、甲走る。

左右畠の一條路、三廻りばかり蛇つて長い、森に接した畷の上、遮るものなき月の下へ、前な  
るは影暗く、後なるは形仄に、鱗を立てて十八九人。續いて一團、又一團、一町措き、二町措き  
の其の間を、ちらりと、二人三人が相繫いで、正に色黒く丈長き異様の怪物、月の光と黄昏の  
名残の色とに隠見して、末は遙に雲間より地平線上に降れる氣勢。

魁の同勢は、力松の聲に一動揺み、前後左右が入交つて、墨汁を磔と擲つたるやう、手足の影  
をべたくと地に印して、衝と駆けて近いた。

「捨吉、居るか。」

「居る。」といつてのツそり出た、眼のきらりと光る青年、髪を長く耳にかけて、細りたる頤の  
尖に、投遣の鬚伸びたれば、顔の形三角なり、肩に一ツ、脇腹の邊にも、大な鍵裂の痕のある、  
これは(流)と抜いた半被一枚、淺黄の膝切の股引で、瘦せた毛脛を露出の素跣足、腕組をした力  
松に立向ひ、

「何だ。」

「待ちねえ、お頭が汝に御用だぜ。」といひながらキラリと鶴嘴を、月の射す岩角に突いて、流の  
中に蹴る、水の泡を搔擱む如く、溪川の上に手を伸し、

「捨吉が参りやした、頭！」

工學士、

「捨か。」

蓬々しい年少な工夫の姿は、黙つて前面に顯れた。

「最上些と下の方へ、流の下だ。」と工學士は岩傳ひ。捨吉は命に應じて、南北、流を挟み、水



暗く岩の白き間へ、雙方一條の黒き線を曳いて、十五六歩。

「可し。」

同時に足を停めたのである。

學士は力ある沈んだ音調。

「一ツ、二ツ。」

捨吉は手を拱いて、耳を傾けて身動きもせず。

「三ツ、四ツ、五ツ、」

算ふる聲と舉動に、略規矩夫の意を了したか、捨吉は振向いて、靜に背後なる樹立を見た。

「其の六本目の榎を倒せ、丁ど今立つてる處、岩の切目だ。」

聞きも敢ず、力松ぢたゞらを踏んで、

「占、占、橋が出来るんだい。」

捨吉は拱いた腕も解かず、踵を回らし、のそくと樹の下へ。身を反して仰向けに、兩の瞳は

下闇に星の流る、如く、屹と見上げると、葉を垂れて、榎は梢から早や力なげに、月と分る、風

情であつた。

直に根方に蹲つて、捨吉の姿見えなくなるや、どやくと寄つて五六人、手助と覺しく取巻いた。

橋の上なる訓導夫婦は、有るが如く、無きが如く、幻かとはかり消えもやらず、活ながら葬られ  
たやうな形。

従つて爰に工學士の指揮の下に、工夫等が爲せる業は、恰も土の底、幽冥の境に於て、行はる  
る事に似て、端倪すべからざるものであつた。

三宮村の草分以來、未だ嘗つて聞いたことのない、異様な響がして、ドウと鞍ヶ嶽の麓へ響く  
と、榎はざわ／＼と枝にかけた月を外して、ざつと幹を揺つて横ざまに流の上。

仁者の架した橋を頼まず、鬼の渡る路は出來た。

### 芙蓉館

#### 十九

見よ、如何に美しや。越の白山の名は解けて、山陰に月の隠る、時も、此處には雪の色を湛へ  
て、芙蓉の花の湖一輪、朝は醒めたる高士の如く、夕は醉へる美人に似たり。

其の夕づく日を颯と浴びた、薄紅の漣ひら／＼、水に船ありて陸に人無き、砂の汀を葦に沿  
うて、使者の美少年と村夫子。



「船の中で聞きました、お前様の行かうといふ、巨山の別荘は直き其處ぢや。何うぢや、大分お草臥かな。」

少年は物珍しげに、四邊を眊し、眊しながら、

「何うしてこんな佳い景色でせう。芙蓉の湖といふのは眞個です。」

「然やう、賞美して申す名ぢや。」

「それでも綺麗な名を知らないものは、私なんぞの近處では、皆、獺瀉、獺瀉ッていひますが、然うすると何だか薄暗い、凄處のやうに聞えます。」

「は、あ、いや、彼是、時刻も其の獺瀉になりかけました。」

と日脚を視めて打笑ひ、

「憊うと知つたら、粟生の茶屋で、漁船なんぞ待ち合さんで来ようものをな。何の三里足らずの路ぢや、お前様を負つても、もつと早く来られました。」

今か／＼と待つ中に、甚う船が遅く来たで、棹をさしてからが疾くても、時は後れた。

しかし、どの道お泊りであらうに因つて、仔細はない。日が暮れて着くまでの事ぢや、お前様が其の柳の枝へ、針をさしたら、釣をしながら歩行いても大事もないの。」

少年も莞爾して、

「でも、急いで行きませう、獺瀉になつては厭です。」

村夫子は打領き、

「成程々々。あ、優しいことをいはつしやる。先づ別荘へ行つたら、お前様が祝ひなさる奥方に、其の話を聞かして遣られえ、何よりの土産ぢやで、どんなにか喜ぶぢやろ。」

けどもな、眞個は矢張獺瀉ぢや、此の芙蓉といふ湖の名は、此處には限らぬ。十里、十五里と周圍の廣うない水溜の、然まで世に聞えぬのは、土地のものが賞美して方々でつけて居る。確

信州にもある筈ぢや。其處で、所のものだけに、茶店の婆まで、芙蓉瀉は嬉しいのよ。

何で又獺瀉といふならば、一體此の湖は、近い頃出来たもので、白山と一所に、古歌に詠まれて居るのではないぢや。

先刻船で下つて来て、手取川の支流から分れて入つて、湖の入口で上つたの。見られい、こんもりと背後に見える、あの村も其の時分は、船つきの漁場でない、矢張田植稲刈の在ぢやつた、其處の庄屋に何と、天人見たやうな美しい娘が居たとの。毎年、獺瀉が魚を祭る頃になると、其の庄屋の奥庭の縁に近い、飛石の上へ、生々とした大鯉を一尾づつ、然も初物を供へたさうぢや。鯉の漁も、それからでないと思つたといふ。

娘が七歳の時から始めて、十九の年まで、一年も缺かした事がないで、村方では、手取川の



淵に棲む、獺の主が、其の美女に懸想して、牲を供へるのぢやと言うて居た。

十九の年、城下の武家の三男を養子に取つた、祝言の夜が更けて、奥庭に怪しいものの影を鐵砲で射留めたのが、六尺にあまる獺で、疵から血が流れると一所に雨が降出した、其が何と車軸を流して、五日も六日も、小止が無うて、七日めに洪水ぢや。其時大川が切れ込んで、此の湖が出来たのぢやで、水はけは又別に海までついたが、丁ど船を漕入れて來る手取から、湖口までは獺の通うた路ぢやといふ事。其處で人が獺瀉といふのぢやが、フト少年の顔を覗いて、「いや、案じられるな、今は最う見た處、そのやうな俤は毛ほどもない、清淨な芙蓉の湖。あれあれ、早や月が見える、波がきら／＼と寄るわ、寄るわ、それ、向うが最う別荘ぢや。」唯見る、白き端艇の如く、小波の中に突出たのは、館の土塀の片端であつた。

二十

「お待ち、まあお待ちよ、今、肝心な處だから、」と巨山の別荘芙蓉館の二階なる、廻縁の端に立つて、お辻といふ仲働、東西、これより、目の中へ入つて失くなりまする體に、雙眼鏡を堅く押付け、釘で打つたやうに爪尖を揃へて立つたが、

「あ、呑んだ。」

咽喉へごくりと唾を通して、

「一思ひ。鶉呑みとは能くいつたものだ、ねえ、お孝さん。」

小間使のお孝は袖に、梅の薫の馥郁たる、地は黒のお召縮緬、赤と黄とお納戸の細な翁格子の材織、當館の令室、美樹子の召料を柔かに掛けて居る。夕暮の裾寒う、庭の池の杜若の葉の戦ぐにつけ、高樓におはする方の、背後から被らせ參らすつもりで、階下から上つて來た途中、廊下で道草を食ふと知るべし。

「お貸しよ。一寸、さあ。」

「お待ちつてば、どうも希代なこと。あの、ひよいと呑込む工合ツたら、お前さんの何か承知をする處と、撮食をやる時にそっくりだよ。」

「可いよ、自分の親仁が漁師の癖に、何も鶉が魚を捕るのが、珍しいことはないぢやないかね、お見せつたら。」

「珍しくないものなら、別に御覽なさるにも及びますまい。今拜借をして來たばかりだから、親仁が急に田地持になつても、直にはお貸し申されません。」とお辻は泰悠に姿勢を變へて、銀の如き湖水の上を、すらりと雙眼鏡で向直る。

お孝は少しく聲を憚り、



「奥様はね、お前さんのやうな意地悪根性ぢやありませんよ、何時でも貸して下さいます。」  
「だから可いぢやないか、またお借なさるが可いやね。おつと、おつと、あゝ、持上つた。」  
「え」と伸上つて欄干から顔を差出したが、遠き柳に薄煙、水の果つる處山あるのみ。

「何がさ、お辻さん。」  
と顔を見上げる。仲働は高慢に口を結んで、

「フム、大分重かつたと見える。川口の井戸端で、何家かの女房が水を汲んだ處なのさ、手桶を  
両手に、えいやつと腰を切つた。おやゝ、あゝ、然うか。一寸きらく魚が飛ぶのだと思つた  
ら、あれ、柳の蔭で、爺様の漁師が釣つたのだよ、鮮麗に映じます。」

「何が映じます。お見せなねえ」と甘えた口。

「おつと、又釣れた見えるゝ、釣棹の絲まで見える。」

「御覽な、心柄だから仕方がない。鶉が意地汚をする處だの、勝手働きの水汲だの、魚を釣る處、  
お前さんのお父さんぢやなくつて。

私に貸して御覽なさい、そんな下卑た物なんぞ見やしないよ。遠くに鞍ヶ嶽の下を、水がちよ  
ろゝと歩行く處だの、筏を流して来る眺だの、白鷺の立つ姿ね、空を向きやお月様を拜むわ。」  
どうせ貸さないと斷念めて小間使、出任せに雲上なことをいふ。仲働は眉を開き、鼻の下を長

うしたがヒタと見入るものあつて、無言なり。

「お辻さん、然う仰向いぢや、見つけたつてお星様よ、金平糖ぢやありませんよ、あれさ口を開  
けて、どうだらう。」

「お黙り。」

「ぢやお見せなね。」

「お黙り、其處どころぢやなくなつた。今ね、向うの葦の處を、……あゝ、出た、出た。二人づ  
れで此方へ来る人があるんだがね。」

「道だもの、二人でも三人でも歩行きませぬ。」

「一人は少いよ、先へ立つて、あれ横を見た、むゝ、此方に向いた。おや、御門の松の枝で。」  
湖に流れた緑の枝、搔い潜るやうに身を捻つて、

「おゝ、綺麗な、色の白い、俳優のやうな美しい學校の生徒さん。おや、おや、おや、もう一人  
はどうも風つきが。やお宅の旦那様だ。」

思はず雙眼鏡を取つて外すと、何も見えず、舞臺は一面の淺黄幕、唯漣の寄るばかり。



仲働の慌しいのに、お孝は吃驚、身を開いて横に飛んだが、  
「嘘ばかり。」

お辻は雙眼鏡を取り退けた、目のあたりきよとんとして、

「いゝえ、眞個。」と逆にして硝子を覗く。

「串戯ぢやありませんよ、何處の國にか望遠鏡の中に、旦那様がいらつしやるもんですか、あれ  
さ、振つて見たつて仕やうがないやね、館の中に、……」

「おつと、皆までおいひでない、館の中にお前ぢやあるまいしといふのだらう。」

と又當がひ、湖上を斜かけに見當を附けて、ぐるりと廻つたと思ふと、ひよいと飛上るやうな  
腰附で、

「御覽、見て御覽、旦那様だよ。」

「どれ、お見せ。」

「さあ、といつてうっかり渡すと、引手繰つて入交つて、お孝は持つたものを、するり縁側。

「まあ、お羽織ぢやないか、此の娘は。」と恭しく拾ひながら窘めるのを、耳にも入れないで覗い  
たが、思はず調子高に、

「奥様。」と呼んだ。

「何だねえ、大な聲で。」

「旦那様ですよ。だつて、」

「だらう。」

「あれ〜、」

「そら、ね。」

「まあ、」

「奥様、旦那様がおいでなさいました。」と殆ど同時に同音にいつて、二人でばたくと御注進。

障子がすらりと開いたので、兩人びたりと足を留めると、部屋の中から島田を綺麗に、高等な  
化粧をした、年紀も六か七の少いのが、白足袋でちよろ〜と、小刻みに裳を軽く、お組といふ  
小間使、四五冊草双紙を取擱げた中から出たが、お次に用もなく控へたらしい、おとなしづくり  
の容色佳。

「え、旦那様がおいでなの。」と欄干に寄つて柱に掴まる。

背後を抜けて、隣の室の障子を縁側から、お孝が膝をついて密と開けた、これは片手に雙眼鏡。

主が換つて、お辻が羽織を捧げて中腰。

「あの、旦那様がお見えなさいます。」



お辻もちやんと手を支いた。

横手床の間の仄暗きに、濃い色の杜若、大輪なるが活けられたる、其の紫に照り榮ゆる、月の  
佛さし俯向いて、ぞつと見入つた机の上に、半ば開いた謡の本。

實や浮世の業ながら、殊に拙き海士小舟の、渡り兼たる夢の世に、すむとやいはん、うた  
かたの、潮波車寄るべなき、身は蛭人の袖ともに、思ひを干さぬ心かな、かくばかり經が  
たく見ゆる世中に、羨しくも澄む月の、出潮をいざや波まうよく、影恥かしき我姿々々、  
忍車をひく潮の、あとに残れる溜り水、いつまですみは果つべき、野中の草の露ならば、  
日影に消えも失すべきに。

彼の松風を讀みさして、愁然として端坐した、あでなる人のありさまこそ、巨山の夫人美樹子  
である。人目なき今、はらくと落涙して我知らず机に胸、姿も心も、惱ましげに崩折れたが、  
女どもに顔を出されて、衣紋を吃と、頬におくれ毛の亂も見せず。や、ふくみ聲の情ある、聞く  
ものの身に沁むばかり。

「然うかい。」といつて立たうとする。

背後へ逸疾く差寄つて、

「風が冷うございます。」

と一人が藤紫の純子の裏を、幽に翻して着せかけた、お召縮緬の羽織を通して、帯は淺黄紗綾  
形の鹽瀬と黒縹子の打合せ、お納戸と薄鼠の子持縹織の袴の裳を引合はせて、なよやかに身を  
起す。丈もすら／＼とうつりの好い、珊瑚の根懸の高い圓鬘で、中差は、堆い、深彫の金の風吹  
牡丹、棟高な斑布の鬘櫛、定紋つき平打の金簪、烏羽たまの髪艶やかなる、闇の水に、螢の光  
の流る、やう、すらりと立つて縁側へ。

二十二

「さあ、いそがしい、さあ、忙しい、忙しいのは是からだ。」

お辻は廊下から饒舌り込んで、突然立膝で取着いた、女中部屋の火鉢には、焼鏝を一挺、柄の  
太いのが突込んである。傍に、高島田、金糸をかけたのが、かよい腕で、重さに引附けられた  
やうに、火熨斗を當てて、袴に取縫つた形でお組。

斜に坐つて針仕事、紫紺の羽二重、紋着の女衣服、紅梅色の裏を返して、媚かしく膝にかけ、  
襟に糸を刺して居るのは、貧相で淋しいが鼻筋の通つた色白な、年寄つたお針で、傍目も觸らず。

お辻は火箸でくる／＼と灰に渦、ふん／＼と嗅いで、  
「不思議々々、恚う見た處、薩摩芋も燻べてないやうでは、爰許もお忙しさうだ、ねえ、お組さ



ん。

「知りませんよ。」

「い、加減なことばかり。此の間糎がすんだばかりで、何處に薩摩芋があるものかね、お前。」

「其處はお情深い旦那様、丁と俵で貯蓄てございます。」

「人聞きの悪いことを、奥様が大層お好きのやうだ。」

「い、えさ、私たちのことを思召してなんだよ、眞個にお優しいッたらない。」

と染々いふ口の下から、

「それにしても忙しい。」

「忙しいくッて、お前、何が忙しい。然うやつて饒舌つて居るぢやないか。」

「此の饒舌るうちが忙しいんだよ、慥くいふお辻さんなればこそ、平氣な顔をして居るけれど、

不意に旦那様がお歸りの處へ、おつれがあると來たんだもの、昨夜から目が廻る、頭が廻る、手

足がまはる、身體がまはる、ソレまはる。」

と膝頭に袂を挟んで、白足袋の尖を揃へ、火鉢の前でくるりと廻る。

「どツこい。」とサソクに又火箸で灰をくるりとやつて、

「何うだ、働きものかね。」とけろりとする。

あッけに取られて、手を留め、

「申戯ぢやないよ、もう彼方へ行つてお呉れ、眞個に此方は忙しいのだよ。直ぐ間に合せなくつ

ぢやならないのぢやないか。」

「奥様のお召だね、おやく、襟をくけて何うおしだ。」

「大急ぎで男ものに縫直すんだね、お客様にお着せ申さうとおつしやるんだよ。」

「へい、あの俳優の若旦那に、

「俳優ぢやないよ。」

「見たやうにお綺麗なさ。へい、おや、こゝにある、これも、」

といつて、手に取つた、襲衣は雪の下朱葉。白鹽瀬の無垢で見るも冷かな、燃立つ炎の凍つた

紅絹裏、お辻は觸つた指尖から悚然とした寒い顔。

お針は一服吸ひつけて、

「お辻さん、お前、そんなに震へるほど欲がつたつて仕様がないやね。」

「否さ、まあ、一寸、軽くつて、柔くつて、冷くつて、薄雪のやうぢやないか。私なんぞが着た

日にや、衣服の方で解けてなくなるだらうけれど、お客様が此の白と、其の紫紺のをかさねて着

たら、あの美しい處へ、まあ、どんなだらうと思つてね、何なの？奥様のお指揮なの。」



「あ、お指揮、だがね、旦那様と御相談なすつたんだよ、いくら御不自由がないからたつて、然う急に新しいのが出来はしないから。」

「然うだらうよ。たとひ内の奥様に、あの初心なお客だつて、内證で遊ばすとなつた日にや、此處一番尋常ごとぢやないからね。其處で。」

「お襦袢は、切が間に合ふからね、新しいのでちやんと出来ます。」

「而して此のお袴、あ、こりや昨日、お客が提革靴からお出しなすつたんだよ。」

「然うさ、昨夜一度お穿きなすつただけれど、皺になつて居るからね。革靴の中からお出したなんて、お前能く知つておいでだね。」

仲働は昂然として、

「其處はお辻さん、覗いて居たもの。」

二十三

「然うさ、私は、雙眼鏡で見付け出して、俳優だつて騒いだのは、私だけれど、何も覗いたのは善い男の所爲ぢやありません、御門が彼れだからね。御覽の通り、華奢な、尋常なお客様、お年紀もゆかず、此處は初、吃驚なすつて、蟲でもお起しなさりはしないかと案じられたからですよ。」

それ、旦那様だといふと、直ぐに御門番に通じたんだけれど、前に二階で見つけたんだから間に合ひません。丁どお客様が松の樹の正面の、湖の縁へお立ちなすつた鼻のさきへ、どつとお前、眞黒な虹が噴出したやうに、大な刎橋が降りたらうぢやないか。

呆然はそれで澤山な處へ、其こそ思ひがけもなさらない、まあ天から降つた體の橋だから危しさに、やうく旦那様のあとから雲を踏むお心持で、怖々お渡んなさると、すぐに、ぐわらぐわらと巻き戻つて、お頭の上を松の樹へ絡んで納つたらう、恐しい響だし、お前さん、恚う疊つた處を見ると、宛然大な蜈蚣さね。あとは又お邸の周圍が残らず水になるのだから、知らないものは驚きます。むかし龍宮へ行つた話は、龜に乗つて蜈蚣を退治ただけれど、此方は蜈蚣に乗つかつて喜見城へ入るのなもの、蛤は蟲の毒さ、何もあんなにしてお置きなさらなくても可さうなもんだと、私は思ふよ。」とお辻は思入つた狀していふ。

お針どのは仕事にかつて、くけ直す襟を一抜き、指で挟んで、りうと撫で、

「それでも恚うやつて、四方水の、あの橋の下りない内は、浮城のやうな中に住んでれば、私たちはじめ、浮世を放れた、といへば氣寂しいけれども、天上界も同一で、結構なわけぢやないか。

それに又、いくら塚原さんがお強いたつて、といふ時、えへん！と咳拂。五間ばかり隔てて聞える。塚原傳内、當館守護の豪傑で、北辰一刀流の達人である。



「そら、二時頃の氣合が入つた、毎日同じ刻限ね、戸障子へ響くよ。これぢやなるほど、眞個の懸聲をしたら、梁を渡る鼠が轉がるかも知れないね。」

「だからね、お強いにはお強いさ、そりや、當節の事だから、眞劍で切つ果つは知らず、源氏平家の大仕合に、無手で二三百人の中へ飛込んで、天窗の土器に龜裂一ツ入れないといふ方だから、五人、七人、抜刀で押込みがあつたつて、それこそ親船に乗つたやうなものだらうさ、また佛様といはれていらつしやる旦那様の許へ、たとひ鬼だつて、覗くこともあるまいけれども、恠うやつて男氣の少い處、萬一といふことがあつて御覽、無事なまでも餘計な騒ぎぢやないか、昔だつて然うさ、百萬石のお大名でも、ちやんと要害といふものはあるんだよ。」

「それも然うかね、殊に又、工夫が入込んで物騒だといふから。そりや可いけれどもね、お客さまは橋ばかりぢやないよ、まだ驚いたことがあるんですよ。」

奥様は襖の蔭までお出迎なすつたけれど、皆ばらくと出て、式臺で、旦那様お歸りを申上げたらう。あとで、御洗足を持つて行つて、お足を洗つた時、お客様が、今は當家の旦那かツて、呆氣に取られておいでなすつたぢやないか、あの、お服装だからね。與一平……ぢや爺様過ぎる、與太郎は安本丹、然うさ、與左衛門ぐらゐるに思つておいでなすつたのに違ひはないのさ。かさねがさねだから、一先づお座敷へお通し申して、少時お一人で在らした時にや、あの美しいお顔

が恍惚して、人形のやうだつたよ。」

「其處をお前さんが覗いて居たね。へい、然うすると、」

「提革鞆の中から出して、薩摩緋のお召の下へ、お穿きなすつたのが此の袴さ。おやく、お組さん、まだ火熨斗が濟まないぢやないか。此の人は、む、なるほど、擦つて見たり、取着いたり、それぢや日が暮れても、果しがない。」

お組は耳朶に色を染めたが、極りの悪さう、ものもいひ得ない唇に水一口。

「一寸、其の霧を吹いた日にや、勿體ない、あの方に、水を吐きかけるも同一だあね。」

娘は一層、紅を漲らして、我を忘れて、はつと飲む。仲働手を拍つて、

「おもしろい〜。」

#### 二十四

「さてと、其の、お召物の縫直しが済むと、紫紺の羽二重の御紋着に、白の紋鹽瀬のお襲ねで、此のお袴を召すんだね。」

とお辻は更めて、悠然と坐り直る。

「あ、然うだよ、而してお前忙しいのぢやないか、どうぞ最うお構ひなさらず、」



「否、眞面目にさ、どんなにか、まあ、嗚お似合ひなさるだらう。」

「まづ藝人にだつてありませんね。」

「あゝやつて、緋を召しておいでなされば、凛々しくつて、可愛らしくつて佳いけれど、御紋着でお袴と来た日にや、どんなだらう、私は思ひやられるよ。」

「些とまたお覗きなさるが可いのさ。」

「あれさ、眞面目にさ、其處で何うするの。」

「何を、何うするの？お前。」

「だつて分らないぢやないか、おなじ達引いてお上げなさるなら、縞物か何か、一寸々々不斷にお召なさるものが可ささうなもんだと思ふよ。」

「そりや追つて遊ばすだらう。今度はいづれ呉服屋でもお呼びなすつて、こりやほんの、今夜のお間に合せさ。」

「今夜、はてな、お客様が御紋着で、其で何、お組さんと三々九度ごとでもあるのかね。」

「厭な、お辻さん。」とお組は袴に面を伏せる。

「おや、此の娘は膝に縫る氣だね。」

いはれて目を細く上氣した、横顔で打背き、

「私どうしませう。」

「何をいつて居るんだよ、と額越に見てお針どのは密めるやうにいふ。

「分らないぢやないか、然うでもなけりや、」

「お前が分らないんだね、お客様は、舞を遊ばすんですよ。」

「踊なの、と怪訝な様子。」

「これだから、漁夫の娘は話せない、舞といへば踊といふ、煤拂の埃のやうだ、馬鹿々々しいぢやないか。」

お能のね、お仕舞といふんです。

それ、旦那様が謡を遊ばすだらう、奥様は鼓が御名人、お客様が舞をお舞ひなさるので、其のお遊びがあらうといふのさ。御紋着でなくつちや、折角の御技倆が榮えないぢやないか、分りましたか。」

仰山に、

「分つた！ はあ、それでは彼の方は能俳優。」

「お名は何とかいつたつけ、」

「え、恠うだに因つて、若杉幸之助様といふんです。」



「別に、お家柄の名ぢやありませんね。けれども、お能の方は、御維新の時分から近い頃まで、しばらく譯が解らなくなつて居たんだから、どんな又御苗字にかはつて居ないとも限らないね。何しろ、奥様がお話の次手には、つい、私は氣にも留めないでお名は覺えて居なかつたけれど、お年もいかにないのに、大層お出来遊ばすんだと聞いて居るがね、嗚お見事な事だらうよ。而してほんとうの藝人で鼓もお上手だといふこつた、お聲も、唯聞いても震ひつくやうに良いやうぢやないか。」

「そりやもう。」と力を入れる。

「拜見ものだね、お次から、そつとでも窺ひたいよ。」

「それから、あの、今夜は、奥様も一調を遊ばすさうでございます。」とお組は舞袴をきちんと疊んだ。

「一調ツて？」

「鼓の曲。」

「其處々々、其處だよ、道理こそ。」獨で合點して頻に頷き、

「否ね、革靴からお袴を出してお召しなすつた處へ、お組さんがお茶を持つて行つたとお思ひな。盆を貸して下さいッておつしやるから、聞傳へにして私が持つて出たら、其の革靴から、何うで

す、鰻を三把ばかり、紅白の水引のか、つたのを引出しておのせなすつた。おや、おや、と思ひましたね、はて、こりや容色は可いが、乾物屋の御用聞か知らと、澄まして見て居ると、其のあとへ出ましてね、おなじく盆に乗りましたのが、裏と表をかさねた皮と、鼓の胴。あの繪で見えてさへ、しをらしいのに、古びがついて、何となく神々しいのだから、お人柄も十段立ち増つて、私や、思はず、三ッ指をびつたりついたよ。」

### 鞍ヶ嶽

#### 二十五

こゝに手取川の對岸、鶴來の南、日に暗く、月にも暗く、樹木濃かに鬱蒼として、所謂梅雨期の日本晴にも、其の邊は五位鷺の鳴かんとす氣勢、名にし負ふ北國空、一朶の怪しき雲を籠めて、金城の天地、長に朗かならず、行く處、到る處、庭の池、川の水、屋根の上、寺の鐘、社の棟、秋の白菊の夕まぐれ、春は櫻の朝ぼらけ、机の上にも、明窓にも、柱にかけたる姿見にも、縁なる嗽茶碗にも、常にこれがために一點の隈ありて存する如き、異靈の一山あり。鞍ヶ嶽と名づく。傳へ聞く富樫政親、地の峻峻巖巖なるを相し、城いて詰の丸となしけるが、長享の年中、土寇



大に起りて、果は此處をも抜きし時、政親最後の決戦に、敵の勇士、水卷小助忠家と引組んで、馬ながら諸ともに墜ちて失せしとなむ、頂に大湫あり。

知らず此の池、それよりして朱の鞍ありて、ともすれば水に浮ぶとかや、然も水脈は遠く鶴來なる、金劍の宮の境内、砥ノ池といふに相通じて、此處に灯して高く翳せば、彼處に其の影映るといへり。いかさまにも水の色、千年の秋を封じたれども、草に似たる一葉も浮ばず、心あれば、晴天風なきに荒海の渦を巻き、然らざれば、風の中に靜なる月の如く小波はた、落ち散る埃を洗はんとして、晝も星の影を動かすあるのみ。

其の凄さの故に、土地の者は稱ふるのであらう、千蛇ヶ池は、同國醫王山の頂にもある筈であつた。けれども恚る名に呼ぶを以つて、何時の世よりか誤つて、一度、長蟲の鱗を腐らす鐵氣の、針一本だに投ずれば、立處に山海嘯、十萬の家を浸し、或は當年の大暴風雨となつて、五穀盡く實らずとて、行詰つた相場師などの、覺悟を極め、禪に鐵を藏して裸體で這ひ上る輩のために、麓の村々組合で、むかしから建てた番小屋がある。松茸を守るにあらず、蓴菜を守るのでない。池の見張をするのであるから、掘立小屋は固より頂上、池に近き山懐にあつて、恰も其の處、奇、一聲高く富樫と呼べば、三ツ四ツ七ツまで續けざまに山彦を返す山。されば蕎麥を賭けて將棋を指す底の隠居所でないから、捨てられた親仁か知らず、誰か水を守るものぞ。然も夜、殊

に夏、今や五月の半である。

元來、池に番人を要するのは、初秋から、米の相場の狂ふ時を主とするので、それも近頃は然るまでなく、魑魅魍魎と馴染な男のいない時は、等閑にして差置くのに、隙間漏る怪しの火かな。三宮から上り一里半、森を越しては空を仰ぎ、森を越しては空を仰ぎ、峻坂急くすること四度、五度にして、それより、水を越え、石を飛び、岩を攀ぢ、草に縋り、果は蔓葛に釣られて上る、其の間、路はた、鋸の刃を渡るやう、森一ツ潛ることに、一夜明けたる心地といふを、頂までは五日路六日路にも當るであらう、麓の鎌は峰の殘月、世を隔てたる深山の中。満山正に天地に大なる鐵の如く、黒き中に、赤く閃くは爐の炎である。白く戸に浸むは煙である。

驚破、惡魔の、土塊を煉つて、月に化せんとする時か。

否、里人等は、恐しい夢から覺め際に、譬ひ鞍ヶ嶽の恚る光景を認めても、敢てこれを怪しいとはしなかつた。

此の二三日前の日が暮れて、渠等は岨づたひに二個の松明の、ちらりと燃えたのを少時視めた、尤も其の日、一挺の山駕籠に婀娜たる美人を乗せて、さしかつたことはいふまでもないのである。



然し、駕籠は纜に取着の森一ツ、それより上には昇き入る、路のないのを知つて、いづれも、今年ことしの秋早あきはやかるべし、あはれ、其その白脛しろはぎのあとはるかは遙やまが山路やまぢの霜しもとなつて、爪紅つまべにの血ちは岩角いはかどにもみぢを染めよう、旅たびの袖そでは、やがて溪川たかはに錦にしきを散らすであらうと言つて、且かつつ憐あはれみ、且かつつ危あやぶんで居たのであつた。

實まことに、髪かみは亂みだれ、衣きぬは裂さけ、手て足あしに血ちの名残なごりこそ留とどめたが、旅たびの女むすめは、番小屋ばんこやの中に、一個ひとりの青年せうねんと爐ろを圍かこんで、炎尖ほさきに瞳ひとみいよく清すしく、面おもていよく白しろく、健在けんざい。

二十六

裏山うらやま風かぜするともなく、折燻をりくべた松まつの葉はから、立昇たちのはる炎下伏ほのほしたぶせに、煙けむりの絡附からみついた時ときであつた、旅たびの女むすめ、——傾斜地かたがらち藏ざうの小屋守こやもりに自ら名告なのおつた——お龍りゆうは、端坐たんざした膝ひざを爐ろの縁ふちに進すすめて、燃料もくぞくにも火箸ひばしにも、枯枝かれえだを灰はひにさし入れながら、

「村岡さん。」と沈しづんだ聲こゑで呼びかけて、手てを留とどめて熟じつと見た。

青年わかものは爐ろを隔へだて、紺こんの色鼠いろねずみに褪あせて、綻ほころびも處々ところどころ、釦ぼたんもちぎれた、學校服がくかうふく。惟おもふに最初はじめてから其そのの身丈みだけに合あへて、整ととのへた品しなではあるまい。古着ふるぎなどをありのま、手て足あしに通とほしたものと見える、瘦やせた體からだに太ふといのを絡まとうたが、傍かたはらなる人ひとの情なさけ、赤毛布あかげつとを裾すそにかけて、駕籠かごにもつけて來た風呂敷包ふろしきづつみを、

結目むすびめも解とかず枕まくらにした、頬ほにかゝるばかり頭髪とうはつ伸びて、顔かほの色蒼白いろあせしろく枯かれた頤おほほに薄鬚うすひげ生ひひたり、鼻筋はなすぢ通とほつて、眉まゆ優やさしく、見みるに額ひたひの清きよらかなる、可哀あはれ、恚いからざりし時ときの惚しぼる、其そのの佛おほかげの紅こう一點いってん、唇くちびるの色いろの美うつくしさ。然しかも窪くぼめる雙さうの瞳ひとみ、鋭すどき光ひかりを包つむと謂いははば、讀者みよひとは何なんとなく三宮村さんぐうむらに榎えのきを倒たふした、工夫こうふ捨吉すてきちの面相おもざしを思おもひ浮うかべて、やがて相肖あひにたるを認しためらるゝであらう。

服装なりこそ違ちがへ、年恰好としかつかう、耳みみの形かたちも酷似そっくりで、但たゞ其そのの兩眼りやうがんの、彼かれは淚涸なみだかれて霜しもに沓さえ、此これは情なさけを湛たへて露つゆに濕うるへる事ことの、異ことなるばかりである。

默然もくねんとして答こたへなかつた。

「村岡さん。」

又また呼びかけて、背後うしろを見返みかへる、壁黒かべくろく、暗くらき雲くもの切目きりめと覺おぼしく、煌々きらきらと星ほしの輝かがやきあり。お龍りゆうは瘦やせたやうに、肩かたを窄すぼめ、

「不二太ふじたさん、然さう遠慮えんりよをしないで、最もう、直すぐに應あとおつしやいなね、此間このあひだからも然さうだけれど、誰だれも聞きく處ところぢやありません。而そして何なにか話はなしをしませう、私わたしはつくづく寂さみしいわ。」

未まだ燃もえやらぬ枝えだを其そのまゝ、力ちからなげに取落とりおとし、髪かみの根ねもがツくりと横よこになる身みを支さへようとして片膝かたひざ立たてた、裳もすそを溢こぼる、友染ゆうせんも、寒さむさうな風情ふぜいである。

村岡むらおかと呼ばれた學生がくせいは、横よこざまに肱ひぢを曲まげて、己おのが耳みみの根ねを引ひつみ、



「寂しいですか。」と唯一言。

「貴下と二人で居るんですから、然ういふ譚はない筈だと思ひますけれど、黙つて居ると寂しいんですよ。それでも東京に居た時はもつと寂しくつてなりませんでした。今ぢや一所に居るんだから、可いやうなもんですがね、何爲か、矢張寂しいの。貴下、寂しがつちや悪くツて？ 何か話をして下さいなね。」

「話といつて、又同一ことを繰返していふだけです。風が吹けば思ひ出す、車の音がすりや考へ出して、それからそれへ話に枝葉が出来るんですがね、こんな山の中だ、目と星ばかり動いて居ちや、自分ながら啞か聲かと思ふほど、これを饒舌らうといふ事もなくつたぢやありませんか。それに、此の間、二人の駕籠屋を案内に、此屋へ貴女が尋ねて来て、僕が昏睡して居たのを起して、介抱をして呉れました。あとで駕籠屋を歸してから、まづ貴女の御深切、謝すべき事は謝し、泣くべき事は泣き、訴ふべき事は訴へ、怨むべき事は怨み、悲むべき事は悲み、聞くべき事は聞いて、三日あまり、寐るのさへ忘れて、喃喃として語り續けたでせう。」

更めて貴女に向つて、世間ぢや、僕の事を何と思つて居ますと尋ねれば、貴女は矢張、東京はいふまでもなく、いづれの國でも誰一人、村岡不二太が、日光の華嚴の瀑へ投身して死んだといふのを、露ばかりも疑つて居るものはない。

然も其の自殺したのは、龍さん。」

不二太は岸破と起きた。

お龍は嬉しさに、爐を見て、再び燃料を。

「貴女との間が思ふやうに行かない、其の鬱憤のために爲たのではなく、婆迦婆の弟子が懊惱に堪へないで、身命を擲つたと、親身までが、信じて居る、といつて答へるでせう。」

二十七

「して見れば、僕が假に形骸だけでも、こゝに生きて居るのを知つたものは、世の中に貴女ばかりだ。人が生死の祕密を打明けたら、祕さないことはありません。」

此の間の駕籠屋も然うです、こんな、餓鬼道に徜徉つて居るやうな、薄汚い男を見て、貴女と並べて、夫人、旦那様といつたですな。

較べて見りや姫様と乞食だ、誰がそんなことを思ふもんです、考へると龍さんが、こりや路すからも、鞍ヶ嶽へ、良人か許嫁か、戀人か、何しろ縁あるものを尋ねて上ると、公然といつて呉れたに相違ないんだ。

村岡は死んだんです、ものをいつても亡骸同様、動いても幽霊同然、二度と世の中へ名告つて



出られる身體でない。

然るに其を、嘗て大なる望を抱いて、大學にあつた時の如く、良人と思つて下さるんなら、龍さん、貴女は、幽霊と結婚するんで、貴女も死んだものといはなければならんのだ。

詰り僕のために、死んでくれたんです、何といつて、謝するにも言なく、泣くに涙もないので、僕は唯、昨日、一昨日、一昨日から、過去を繰返して話しただけで、別にいふことはありません。

と瞬きついついたが、目を見据ゑて、しばらくして、

「然し、龍さんは、話をせんぢや寂しいですか。」

「そりや、不二さん、おつしやるまでもないの。あの、日光でおかくなすつてから、私はね、其の時から一緒に死んだ氣で居るんですよ。最初から、随分人目を忍んだ間ですから、豫て暗號がありました。可い鹽梅に、其の暗號で知らして下すつたから、眞個に私だけは、不二さんが死なないことを知つて居たから、すぐにも邸を脱け出さうと思つたけれど、……随分久しい間でしたねえ、貴下が隠れて在らつしやる處とさへいへば、金精峠から奥白根、碓氷の中、信州の戸隠、越後の妙高山、越中の立山まで、知らない國を夢にばかりは見居りました。でも、死なないで居るのを知らしたのは、私に冥土のあとを追はせまい爲ばかり。どんなこと

があらうとも、屹と來てはならないといふお言ですから、一生懸命に堪へては居たけれど、此の山からお寄越しなすつたおたよりぢや、最後の決心が、お出來なすつたつていふんですもの。

ひよつと、お目にかゝるのが、もう今度は、新しい屍でも、お尋ね申さないでは居られなくなつたから。

私もね、二度と邸へは歸られないやうな事をして、飛出して來たんです、ですから、死んだもののつもりですよ。

それでも寂しいにや寂しいぢやありませんか。え、不二さん。あなた何にもおつしやらないけれど、過去つた事より、私のお話しなさいつていふのは、あなたが、最後になすつた、其の決心の事なんです、どうぞ、それを話して聞かして下さいなね。」

村岡は是を聞いて、目に一段の光を添へた。

「龍さん、それです。貴女は此處に來てから、未だ一度も、寂しいといつた事はなかつたですな。或はそれが、僕に對して仕て下さる、お志の辛抱かも知れんけれど、兎に角、此の山に居て、此の夜氣に打たれて、寂寞を感じて下さらんです、僕のいふ事が能く解りません。だから、今日は宵の口から、一言も發しないで、靜に待つて居たんです。

可し、それではお話し申ませう。此處へ、



といつて差出した、垢じみて蒼く爪の伸びた指へ、お龍は黙つて、白い手から、生々しい獣の骨の如き、枝うつた燃料を興へたのである。

「こりや、僕の方が馴れて居ます、生樹だから、」

と掻き起して、俯向いて、ふっ。

ばつと立つた炎の影にも、憔悴の、一際見ゆる渠が風采、此の世の人とは思はれず。然も聲は、凜として、

「あとで、何爲、あの時に、あからさまに自分の弱點を露出して、龍さんと思ふやうになれない所爲だといふ遺書をして、洲崎、吉原に於て行はるゝ如き、一人情死の愚を謳はれて死んでしまはんだつたかと、非常に後悔をしたんです。」

二十八

「また實際、龍さんを前に置いていつちや何だが、一婦人のために、生命を棄てるつていふのを、親類なり、友人なり、天下に発表し得るやうな勇氣があるなら、僕はもう彼の時に、事實華嚴の瀑で死んだんだ。」

處が然うはいかんです。執着があり、未練があり、就中名譽心が盛だから、絶望した懷疑派の一人が、哲學のために殉じた體に、世を欺き、人を欺き、自分を欺いて、公に遺書を貽しました。どうして、手近な處でも、いつはり多き世の中に、死ぬるばかりが誠なりけりといふですものね。誰がいつはつて死ぬるもんです、果せるかな、現在生きて居るんだ。はゝゝはゝゝ。」

不二太は意味もなく高らかに然し寂しく笑つた。お龍は一切、其の意を了したるものの如く莞爾して、

「それでも、あの當時は、私だつて嘘だとは思はなかつたんですもの。世間ぢや何れだけ騒いだでせう。不二さんの死骸といふのが、未だ見つかりもしない先から、真似をして身を投げたものが三人ありますよ。眞個に貴下は大膽ね。」

不二太は耳を引張つて、

「大膽？ 何、大膽なことがあるもんですか。極めて小膽な、吝な卑怯な料簡ぢやありませんか。

村岡が最後之感を遺書して、いつはつて死んだのに較べると、大晦日に首を縊る奴が遙に豪い！

其の方が、却つて本心を打明けて死を恐れんのですな。勇氣があります。しかし僕は、區々たる名譽心のために、大罪を犯したですな。たとひ愚にもせよ、癡にもせよ、僕ゆるゑに多くの人が死

にましたから、詰り手を下さないで、人を殺したと同一なんだ。

まだ最初の中は、山の中から自白して、名告つて出て、立派に社會の制裁を受けよう。あはよ



くば、一たび死んだものの蘇生つた嬉しさのまぎれに、罪が許されるかも知れんなどと、果敢ない望を持ったこともあつたんですが、既に蔭ながら人を殺したのを知るに到つて、最う其の望は絶えたんです。

到底自分は、再び世の中へ出られる身體でないかと考へると、それから實際、死生の問題を解決しなければならん必要が起つたんです。

不二太は説いて、爰に至つて、靜に、

「お聞きなさいよ。其處ではじめて、いつはつて遺書したやうな懊惱を實際に爲出したです。何とぞして、生ながら自分を葬り得て安心が出来るやうな、解脱の要道をもとめんけりやならんでせう。

釋尊は王宮を出でて、先づ、これを婆迦婆仙人に聞いたんです。僕は嘗て少く學んだ、胸中の書籍に就いて尋ねたです。」

渠は頤を胸に埋め、

「僕はこゝに尋ねたですな。然うすると、此の胸には、金釧も未だ新しい、つけたてではありませんか。」

いひかけて袴と胸を打つた手を、肩へへらして兩手をかけて緊乎と組む。爐の焰は、ものあつ

て、上より壓し伏せるやうに又暗くなつた。夜氣膚に迫り、沈々として、數千里の雪の、世を鎖して此の孤屋を封する氣勢、時にさらくと音するばかり、靜まり返つた緘黙を破つて、板戸に觸れて幽に響くのは、靄の顔の、灰白く、近々と來て隙間より冷かに内を覗ふのであつた。

顔を上げると、いつの間にか、お龍は爐の此方にまはつて、背後から毛布を背に被せかけて、差覗いて立つて居る。

目を見合せ、

「恐しく寒いこと、と其まゝ、寄添つて、姿を並べた。

不二太は悵然として、

「龍さん、解脱の道を胸に問へば、新しい釧の間から、微に答へるのは貴女の名、貴女の名ばかりであつたんです。」と切々となつて聲が曇つた。

お龍もほろりとして、

「まあ、ねえ。」

二十九

「え、！龍さんの名をいつて何にする。汝蛆蟲の如き身を以て、濫に尼連禪河畔の長者の女の、



乳酪を欲するも同一だ。

釋尊すら、世を遁れ、山に入り、眞先に婆迦婆に道を聞いて、五百人の弟子の光景を見たけれども、然うして得脱しようとは思はれないから、去つて、阿羅々迦羅邏に聞き、鬱頭羅迦に聞いて、なほ明星一點の光明も認め得なかつたために、婆迦婆の弟子の行に倣つて、其處で、苦行の林に坐した。

或は一日に一粒の粟を啖ひ、或は膚に木の葉を絡ひ、或は蛇の如く地に這つて動かさず、或は日出づるより日の入るまで、偏に太陽を睨み詰め、

不二太は又例の耳を掴みつつ語つたのである。

「或は、隻足で立つて身を支へ、或は終生日に一本づつ、頭髮を抜き、或は木の枝に巢を組んで、果實を嚙んで世を終るなどと、皆、婆迦婆の弟子の苦行です。

釋尊も、六年間、此の難行を爲すのだけれども、到底終局の解脫に達することが出来なかつたので、心をかへて、苦行の座を立つて、傍を流る、尼連禪河に降りて、身を清め、月も日も塵も積り積つた垢を落した。爾時に疲勞一時に起つて、暈眩して岸に倒れた處へ、恰も通りかゝつたのが牛乳をさげた長者の女で。美少女は、高位の沙門の倒れたのを見て、抱起して、其の手に携へた乳酪を供養した。釋尊はこれがために、神氣を恢復して、即ちあらためて、菩提樹の蔭に端

坐して、工夫を凝した七々四十九日のあけがた、朝日の雲より出でたる如く、豁然として大悟して、成道正覺を得たのでせう。

然るに僕如きものが、はじめツから一足飛に、龍さん、貴女を望むんです、長者の女を求めるんです。解脫なんざ思ひも寄らない！頭から退轉だ。

どうして正覺が得られるもんです。けれども世の中へは顔を出せん。深山路に分け入つて、樵夫に辨當の殘を恵んで貰ふにさへ、聲を密め、顔を背けるほど、人目を憚る境遇だから、唯今までに、あらゆる苦行を盡したです。

華嚴の瀑に、世を欺いてから、あしかけ三年、藁の上にさへ寐たことなく、暖な湯を呑んだことさへない。嗟！これほどなら、何爲彼の時に、實際を打明けて、眞個に死ななかつたらうと、思はない日はなかつたですが、もう其の時分には、貴女に逢へないがために死ぬといふより、一見なければ死なれないやうになつた。

ですが、僕が、こんなものが、貴女に逢へようとは思はない、勿論、夫婦にならうなどとは金輪際思ひもかけぬ事、今以て、斷乎として、誓つてそんな心はない。

けれども斷念める事は出来んです。固より未練で、臆病で、あらためて、死を事實には爲し得ない、死ぬには死なねず、生きられもせず、苦行を盡して解脫はならず、懊惱に懊惱、煩悶に



煩悶をかさねた結果、今、龍さんがお聞きだつた、其の最後の決心が出来たんです。一段語り果てて、不二太は、深く息を吐いて、今や朦朧として、座の一隅に侵し進んだ霧の煙を吸つた。

お龍は髯の中にたゞ其のみ美しい、學生の口許に目を注いで、

「はあ、それでは硫黄ヶ島へ行つたやうな、救の船が見つかつたんですか。」

「飛んでもない。」

「思想界ぢや兎も角ですが、あなたは何も警察へ引かれるやうな罪人ぢやない、私さへ宜しくば、世の中へ名告つて出ますか。」

「以ての外です。」

「ぢや、一生、何處のか山奥に朽ち果てて、人の形の苔になるの。」

「そんなんぢやありません。」

「ではどうするの、不二さん。一度私に逢つて死なうといふ、御決心？」

村岡は頭を掉つた。

お龍は面に、希望を湛へて、

「それぢや可いではありませんか、私は夫婦になる氣だもの。」と事もなげにいつて、直に問題は

解決したと思つたやうに、安らかに眉を開いたのである。お龍が此時の佛は墮獄の罪人を救ひ得た天人の如く、端嚴にして且つ微妙なるものであつた。

不二太、

「否！」

三十

お龍は餘りのことに、返すべき言もなかつた。

「……………」

「どうして、斷つてそんな事は思はない、僕が今、此の身體で、貴女と夫婦にならうとすれば、狒々が配偶を求めろのだ、以前からも又然うです。一目見たい、逢ひたいと、思はんことといつたらなかつたけれども、未だ嘗て一度も、世帯を持たうの、寢ようのといふ考へを起した覺えはないのです。こりや明な道理で、食ふ道知らんものが、一家を営まうといふ料簡の起る筈なく、片時も安眠をし得ないものが、何になります！」と不二太はやゝ激した風情で、擲つが如くいつた。

「まあ、貴下、不二さん、世の中へも出なけりや、山にお引籠りなさるでもなし、私も構ふ氣ぢ



やないのですつて？」

「いかにも。ですが貴女を構はないなんて、そんな事があるもんですか。構はないのぢやない、構はれないのです。たゞ機會があり、場合に因つたら、僕其時こそ、生命を棄てても構ひます。そりや屹と、決して御志を忘れはせん。」

「否、私が聞くのは私の身についての事ぢやないの、何うするのよ、貴下は、」

とお龍は我を忘れて摺り寄つたが、憂慮しさに堪へぬ風情で、

「不二さん、何うするのよ、最後の決心ツて、又死なうなんていふのぢやないの。私はね、一所でなくつちや死なせないから！」

思ひ詰めた、男の膝に手を置いて面を正しくして屹といふ。

村岡は又耳とともに己が毛髪を搔い掴んで、

「死ぬもんですか、此の因業な奴が死ねつたつて死なればせんです。」

龍さん。」

お龍は頷いて、黙つて次の言を待つた。

「もう十分間、然うやつて居て、最後の決心といふものを聞いて下さい。」

恐らく是を聞いたら、驚いて呆れて、といひかけた、片手わな、きながら、お龍の冷い袖を壓

へた。

「此、此の袂を拂つて去るでせう。固より承知だ。其の時は、穢はしい、厄雜な身體は、藻脱の殻となつても、魂は附添つて、無事に麓まで送りますよ。龍さん。」

古の哲人は、悟道の曉に佛になりました。

僕は迷に迷をかさねた結果、思ひ切つて悪魔、外道になつたのです。

村岡は死ぬに死なねず、生きるにも生きられず、横にも縦にも身を置くに處なく、煩悶に煩悶して、死しても到底、解脱を得、慰安を求むることが出来ないから、生きながら悪魔になるのだ。

あらゆる罪を犯す、爲し得る限り不法を働く。悪逆、無道、酷薄、残忍、人を殺す、

「え、」

「火を放つ、」

「嬰兒を屠る、婦女を辱める。」

「……………」

「犯して其の眼に唾吐き、屠つて其の臟腑を炙る。牛馬を裂き、犬を煮る、草木を枯らし、水を濁す、いづれも天魔破句の爲す處、即ち僕の行はんとする處だ。」

「貴下が。」



「勿論、」と答へた。

「不二さん、貴下が、」

「勿論、」と昂然として答へた。

「草木を涸らすの。」

「其の根を穿り、其の花片を捲るです。」

「牛、馬を裂くの。」

「其の舌を噛み、其の脳を嘗めることを誓つてしませう。」

「水を濁すの。」

「敢て其の源を蹂躪する。」

「放火をするんですか。」

「何でもない。」

「人殺し。」

「仔細はないです。」

「婦人を……捕へて、」

「……………」

「貴下、嬰兒を、——」

しばらくして、口吃しながら、

「勿……論。」と答へたのである。

三十一

「而して、然うして、然う、そんなことをして貴下の身は何うなるんです。」

お龍は顔さへ辭さへ、ものに激した状であつた。

今はなかくくに落着いて、不二太は却つて自若として、

「其の結果、僕は何等かのものに滅されるんですな。罪惡は必ず滅亡しなければならんです。鬼

を制するは神、邪を破るは正、魔を封ずるは佛、罪を正すは法、暗黒を照らすのは光明でせう。

僕は今、光明を求めて認むる能はず、法に従はうと思つて出來ず、正を欲して得ず、神佛にも

棄てられた身體だから、自分を救ふためでなく、我を滅さう、罰しようとして、神佛の顯るゝの

を待つて、跪いて、訴へて、泣いて、救を求め、慰藉を求めて、たとひ殺されても可いから安心

して死なうと思ふんです。

僕は敢て火水も厭はん、お話し申したやうな、鬼畜に齊しい、惡逆を擅にすれば、何者か來



て、是を滅さずには居ますまい、可矣、それは悪魔でも構はん。そ、そんな奴を殺さうとして出現すれば自分のためには佛です。又もし、刑官でも差支へない、我がためには慈善家だ。直ぐに其の袂に絶つて、其處で解脱しようと思悟したです。龍さん、僕が三年間、いふに忍びない煩悶の曉、漸く断ずることを得た、最後の決心といふのは是です。」

判然と、いへる言は明快であつた。けれどもお龍は押返して、  
「待つて下さい、それでは、むづかしい理窟は分りませんけれども、何、詰り恚うですか。貴下は生きちや居られない、死ぬにも死なれないから、心でなり、仕事でなり、よくないことをして、悪人になる。」

然うすると、悪人は滅びなければならぬから、天なり、命なり、神、佛、人なり、何にせよ、其の悪人を滅すものは屹と、善人、人でなければ、神、佛ですから、其處で、頼んで、成佛をしたいといふのね。

それぢや、優しくいつたら何なんぞせう、一層氣候が蒸暑いくらるなら、風も吹け、雨も降れ、然うしたあとで、太陽の影を拜まうといふんですかね。  
「先づ然うです、と不二太は嬉しうにいつた。お龍は可愛い兒の駄々を、合點した趣で、  
「さつぱりして好いわ！」

とぐツと枯枝を搔上げると、何うしたのか此度は軽くひらくと燃えた。其の明に、胸を折つて居る小柳の帯も青く、艶やかに照り添つて、唇朱く、血の色を帯びた雪よりも白い横顔へ、衝と、紅の輝く絲を曳いたやうに、炎の尖が閃いてかゝつた、はらくとある後れ毛の末がアハヤ。

はツと思ふ咄嗟の間に、不二太は美人の肩を向うへ突いて、  
「危い！ 髪が……」と優しい聲、服の隈々も一刷深く濃くなつて、眉の間の顰も消えて、口許も頬も、暗澹たる破小屋の片隅に、明かに見えたが、恰も此の時は、一點彩なき墨繪のおどろおどろしい深山の圖なる、二個芥子の如き人物に、繪の具の滴美しく染め出だされたる光景であつた。

お龍は煙の染む目を婀娜に織うして、咽喉清らかに稍仰向きつつ、頬を動かして、纏れかゝつた鬢の毛を掉り靡け、

「私だつて、火水の中も厭ひませんよ。貴下が構つてくれなくつても、何時までも一所に居て、而して、貴下の前途を見届けて、安心をして、最う一度、インキの壺を提げて、あの本郷のね、龍岡町邊を通つた時のやうな顔を見ませうね。」と目も通はさないで、爐を見ながら焚火にしなやかな十の指、炎の尖の高くなり低くなるまゝに、微に打動かすつつ差翳した。腕組をして瞻つて、



「だから、だから不可ん、龍さん、だから駄目だ。僕を滅すものは遠く他に待つには及ばない。悪逆無道な心を聞いて、貴女が此ま、僕の横面へ唾して、アイと見棄てて去れば、立處に其が即ち引導を渡してくれる善知識、僕は快く目を眠るものを、留を刺してくれば可いに！」

### 異形のもの

三十一

不二太は胸に、肩に、腕に、溢る、ばかりの真心を身悶に顯して、

「怒、龍さんが見棄てないから、何より其が執着の種なんだ、天地に容れられない、こんな人畜を何だつて庇ふんです。たとひ袂を壓へて居たつて、叩き拂つて去つたふ管ぢやありませんか。

今もいふ通り、然うすりや斷念めて、僕は苦患を忘れて死ぬ。」

「貴下、そりや不可ません。獨りで死んで、自分だけが好くつたつて、後に残つたものは何うすると思ふんですえ。

構はないぢやありませんか、夫婦にならなくつてもお傍に居ようといふんだから、何も私のこゝとに氣をお揉みなさるには及びません。」

おつしやる通りにして、十年なり、百年なり、また唯た今でも、貴下を成敗する正しいものが出て来るのを、私だつて待ちますよ、ねえ。一所に苦勞をしませうねえ。」

「……………」

「また、貴下、御挨拶ぢや私は厭、好事だわ、私、勝手なんです。」

「一言もありません。」と不二太は張詰めた氣の一思ひに碎けて消えるかとばかり、便ない胸を壓へようとして、四邊を胸すと、フト枕にして居た、風呂敷包。

すばと身體を横倒に引寄せて、膝に乗せ、縦に鳩尾を支へたが……待て。

「や、こりや、皺になる、衣服でせう。」

「否、乳ですよ、何とかいつたつけ、不二さん、

あれさ、……尼連禪河の女の乳なの、お金ですよ。」

「不残、」

「はあ。衣服はないんです、他にね、好きな書籍が五六冊、」

「何の書籍？」

「韓非子、」といつて嫣然として一笑して、又、一燻、樺の皮に火が移つた、新しい焔は幅廣く燃えはじめ。



不二太は胸を引いて、大きく空さまに手を翳し、

「こりや良い火だ。」

「私の方が上手でせう。不二さんは沈んだ氣の癖に、赫々と炭を繼ぐのが好だつたね。お、而して、ぱつと大掴みでなしに、これから何うするんです？ 恠うやつて多日此處に居るんですか。可いわ、然うすりや私も其のつもりで、薪も拾ひませう、清水も汲んで上げませう、不二さん、可いやうにして下さい。」

これには答へず、村岡は火の影に、黑白も分かぬ、屋根裏の隙間を熟と仰いだか、  
「何時です。」

鐘は固より、鶏犬の鳴音はおろか、世にいふ松風の聲も聞えぬに、鎖が晃いて靜にパチリ、

「一時四十分、時計が些と狂つて居ますやうですよ。」

不二太は頷いたばかりであつた。

「山が高いから、早く東が白みませうかね。貴下、此處がまた何してお氣に入つたんです。」

「朋友が澤山あるからです。」

「お友達？」

「有名な魔所です。此の山の城の門にして、これから奥は、峰續き、山續き、白山の谷へかけて

凡そ妖いものの住家ですな。所の人は天狗といひます、魍魎魍魎の類、山の神、土地の神、こだま、すだまの高臺の市街なんだね。

しかし、魔所といつても場所に因つては、崇高な處もある、俊秀な處もある、雲に超然として高く、神仙となり、仙女となつて、月と語り、星と遊んで澄したもんださうだけれど、取着的此の鞍ヶ嶽、千蛇ヶ池あたりに居るのは、皆僕のやうな駈出しの悪魔、邪鬼外道の輩だ。

ですからいはれなきに残忍な仕事を働く、能く老人なんかいふがね、此處へ攫はれて來た小兒がある、あの、迷兒の迷兒の與太郎やといふ奴、一寸僕にも肖て居る。然うすると奥の笈ヶ岳へ行つて頼むと、悪戯徒が、親分にぐツと取占められて、謝罪つて返すんですつて。

龍さん、貴女は先刻寂しいといひました。時刻も可し、一時すぎ。其の朋輩を引合せながら僕が悪事の手はじめをして見せませう。」

三十三

「それから龍さん、明日にも連立つて山を下りませう。此處に居ちや何一つだつて目的の犠牲を手に入れる事は出来ないのだから。」

お龍は眞顔になり摺寄つて、



「何處へ行らつしやる、仕事の手初ッて何ですな。」と、稍懼を抱いた體で、男に縋るやうにしたが、其の目を睜つて答を待つた間は一個、うら少い美人に過ぎぬのであつた。

「最初の仕事にも、居處を變へるにも、先づ第一着に、華嚴の瀑へ行くんですな。」

と事もなげにいつて退けると、

「嘘ばかり。いくら心ぢや魔になつたつて、鬼になつたつて、日光山まで、此の鞍ヶ嶽の頂から、何處を飛んで行かれるのよ。落人ぢやないけれども、路傍の石の地藏にも心を置かなくつてはならない身體ぢやありませんか。」

「何、上野國まで行くのぢやありません、つい此の上のね、龍さん、千蛇ヶ池まで上れば可いです。」

千蛇ヶ池は瀑ぢやない、勿論瀑ぢやないが、其の怪奇、其の幽邃、月と、太陽と、星と、一所に映す水の色、是を華嚴の瀑の、瀧壺の底の巖の下なる、別天地と稱して可い、僕は元來其處に沈んだ身體なんだ。

だから、なぞらへて其の池を、怒う……お聞きなさい、耳の底に何となく音もしないで轟々と響く、我が朋友、山々谷々に充滿た、悪魔の呼吸を、岩の底に葬られて聞く、千丈の瀧の音と思つて、一番手初めを行ツつける、龍さん、仕事といふのは、先づ、

不二太は屹となつて膝を立てて、何物か四邊に求むる様子を見て取り、

「何です、」

「松明。」

「あ、然う、」

とお龍も膝をうかして見た、燃残りの松明一把、大なる糞蟲の形したるが、所がら、此處よ、此處よ、と鳴きも出さんする狀に、壁際の暗き中ながら直ぐに知れた。過日夜明けて後、孤家を辭した駕籠昇の残し置いた賜物である。

不二太が洋服の手許赫く、松明はめらくと炎を立てた、これを爐に突込む時、焚火は揉伏せて煙にしたので。

此の煙灰白く、小屋の中に群つて、不二太が立上つた松明の火から、末濃に紫を吐くのと入亂れつつ、二人の身の周圍をぐるぐるとまはつて、戸口に向ふのに續いて出た。

不二太は一度立停つて、後に跟いたお龍の立姿を見ながら、衝と隻手を前方へ差延べ、板戸を引開けようとする、建付けは透いて居るのに、何かひそく、濕やかに戸外から壓へて居て、ねばるやうで、開かなかつた。

不二太は思ふことがあつたと見え、



「お待ちなさい、犠牲を捜しに出るものが、又歸るに家のあるべき道理はないのだ。是ッ切山を降りるから、僕は何にもない。龍さんは其の包を、」

「可うございます、それでは。」

「と腰へつけるかな、いや、肩から西行背負といふのが可いか。」

といひ、力を入れてぐツと引いた、ガタリと開くと、煙は怪しい形して、一團フイと外へ。續いてむら／＼むら／＼と、ひらめいて出たが、一面の濃な靄は、殆ど戸を封するばかり、丈もなく、幅もなく、厚みもなく、限知られず、山に幕を蔽ひかけて屯した中にちぎれ／＼。彼處に一ツ、此處に一ツ、圓に固つて残つたの、碎けて三ツ五ツになるもあり、相交つて朦朧としてゐるあり、末廣がりになつて遠ざかりつつ去るのもある。或ものは蟹に似て脚なく、或ものは犬に肖て尾なく、又人に肖て手が見えぬ。

靄は煙の下を潜つて、重く、鈍く、緩かに動き出して、折から戸を出でた學生の胸を籠め、背後に草鞋の紐を結ぶ美人の足を乗せて、雲が來て導くやう。

三十四

さて番小屋を出て眺めた、深更鞍ヶ嶽の光景は、單に爐の煙の奇しき振舞ばかりではなかつた

のである。

一段々々果る峰は、大空に一ツづ、夜が深く、いよ／＼高く、いよ／＼静に、いよ／＼暗く、

其の高きにつけ、静なるにつけ、暗きにつけ、彌が上に謂ふべからざる秘密を藏して彌勒出世の

曉まで、天にも地にも片言を洩し語らざるべく、決心したかと視められた。然も其の形の男波

や、女波や、碎けて返る小高き丘まで、朧々の岩の胸、木の骨土の肉、清水の血に靈あつて、此

處にイめる人に對して、上から大きやかに瞰下すあり、傍から差覗く状なるあり、瞰下す者は魔

であらう、差覗くものは鬼であらう、又嘲笑ふが如きも見え、頷くが如きも見え、冷かに面を背

くるも見え、澄して嘯くも見え、爪立つて飛ばんとするも見え、横に寝たるも見え、慌てて目覺

めたる風情なるも見え、來つて語らんとするも見え、跪いて拜せんとするのも見えた。低く、上

に村岡とお龍を乗せ、高く下より滿天其の光の燦たる毎に殆ど音するかと近き星の光を包める靄

の中に、種々の山の姿

其の嘲笑ふは魍魎よ、魍魎よ、頷くは、こだま、すだま、面を背くるは何者ぞ、嘯くはそれ、

名ある石か、横に寝たるは松が枝か、飛ばんとするは高峰の鳥か、夢覺めたるは猿なりや、來ら

んとするは岩角よ、うづくまつたは樹の根であらう。

怒る時、白山にては白雲雪の谷間に湧きて、綿々紫の岩を攀ぢ、鬚鬚として天に朝し、月を



送り、旭日を迎ふと聞く。

彼處は神仙、此處は妖魔、陰惨たる霧は恠る異類異形を宿して、松明の影に皆動けり。

時しも棹の如きもの、黒き稻妻かとひら／＼と枝打つて、峰ともいはず、谷ともいはず、横ざまに映つて消えた。

あとから脚長く瘦せたる影法師、凡そ四つ、番小屋の背後を衝と、絶頂の方へ駆け抜けた。其後へ、つツと出たのは、張子の虎のやうな首のぶら／＼とした獣で、やがて見えなくなる。

ト中空を馬が飛んだ、何か乗つたのが分れてフツと落ちたと思ふと、木の葉が續けざまに降つて來た。

松明がバチ／＼と鳴つた。

取つて左右に振ると、炎が靄を蒸して、薄赤く靡くと同時に、前後左右にすく／＼と煙の形、人の姿、ぢつと二人を瞻めたのである。

「不二さん。」

「皆、僕の朋友です。」

ひたと男に寄添つて、

「而して仕事とおつしやるのは？」

「應、其の、これから千蛇ヶ池へ行つて、其處を華嚴に擬らへて、僕がしようといふ手初めの一件？」

「え、其ですよ。」

「いや、貴女は氣怯れをしたんだ。此の大勢の僕の朋友を見て驚いたんでせう。此のくらの事に恐れるやうで、此の先とも、何うして、僕と一所に身體が置けます。ですから幾度も、早く留を刺して下さいといつたぢやありませんか。」

僕をお棄てなさいといふのです。」

「然うぢやないの、私は恐いのぢやありません。」

と煩つたやうな身のこなし、お龍は袖を引合せて、松明の煙に色が薄い。

「尤な事です。決して無理はない、いかに氣象の勝つた貴女だつて、これが驚かないで居らるゝものか」と意氣の昂つた不二太の風采、とみかうみて、

「貴下、あなたは魔法つかひ見たやうね。ですから、お友達だから、貴下の使ふのだから、山は恐くはないけれど、早く見たいの、其の仕事といふのは、どんなだらうと思つて、氣が急いで、息がはずむの、胸が痛いわ。」



「然し、然うして千蛇ヶ池へ行つて仕事をするツたつて、何も犠牲のある處ぢやないのだから、人殺をするんでない、放火をするわけでもない、まあ、御覽なさい。」

火影に、洞中のあたりだけ、眠いのを引摺起された風情の、手近な白樺の幹を照して、村岡は立寄つた。

手を舉げて上から下へ、一擦り擦つたと思ふと、爪が鋭かつたか、質がもろいのか、樺の皮はバサリと剥けた。人の面を脱したあとは恚うであらう、これは剥げたあとは目鼻がありさう、生しい木質が面長に露れて、落ちたる皮は、風もないのに、むくくと地に動いたが、暗さに紛れた。

學生は眞直に立向ひ、お龍を顧みていふやう、

「詰り恚うするのです。上の池のふちにも、立樹がある、就中大きく目につくのを、引剥す。それから其處へ、僕が其の時から持傳へて、雨に濡れ、霧に濡れ、雪に埋れ、露に打たれたため、未だ乾かないで、此處に衣兜に藏つてある、矢立の墨で、あの、華嚴の瀑の巖頭の樹を削つて、記し留めた、虚の遺書と同一言、一句も違はないのを認めらんた。」

「而して？」

村岡は高く松明を捧げて持つた。

「恚うやつて、下を見、……」

あかりを衝と腰に曳いて、炎を倒にして伏せて、

「上を見、」

右の肩へ斜めにかざして、

「左を見、」

左へ取つて、面を向けつつ、

「右を見、凡そ世の人の、あの遺書に對してした所業をづらりと視めるです。然うすると、」

渠は力なげに、炬を垂れて、其の二の腕を片手で壓へた、悄然として、

「或者は僕に同情して泣きました、」

いひかけて得もいはれぬ顔をして、綴ぢつけた糸を切る如く、むくくと唇を震はしながら、

大口を開いて、

「或、或者は嘲笑つた！」

と言ふより疾く狂せる如く、礮と大地に手を投げて、土に頭をつけたと見るや、むつくと擡げ、



胸を伸し、諸膝を立てて、樺の木目の惱しげに、面を曝せると相面して、ちつと目を眠つて、片手拜をした。一切の舉動は、活潑に、迅速に、猛烈に、殆ど人をして一言を發せしめず、身動き、瞬だに得せしめざる一分時の間に演ぜられた。

其ま、靜に立つて、あとへ身を退き、

「龍さん、或者は懊惱して哲學に殉じた少年を拜んだです。其の遺書に跪いたですな、十字架を禮する如くに、或者は又死んだです。

其の凡ての人を胸して、否、寧ろ睨めまはして、其處で僕は、一聲、

(馬鹿め)といふ。

悪事の手初め、何うですか。」といつて不二太は放心した體で恍惚して、眞蒼になつたが、霧の中に其面白哲にして、服裝の色藍を帯び、却つて一種犯し難き品威を備へて見えたのであつた。

「殘忍、酷薄、惡逆、無道、鬼畜に齊しいものの爲す事の發端には、立派に價するだらうと思ふねえ。」

お龍は莞爾として、

「ほ、ほ、ほ、」

「(馬鹿め)は、は、は、」

幽に呵々と飭に響いた、恰も深潭に石を投げたる音して。

途端にもものあり、二人の身體戦くよ、地鳴がして、鞍ヶ嶽は揺ぐばかり、上なる峰より、ぐわらくと、響きに應じて、番小屋は附木を裂いたやうに、めり、と崩れて、凡そ牛を轉ばした、黒き影、大なる巖であらう、其ま、谷底に轟と落ちた。

「龍さん、恐くはない。」

「……………」

「瀑の音だ。」

松明を背後へ曳いて、ちつと透す、前なる谷を黒山になして、蔽ひ累なれる霧の中へ、轟と二人の並んだ姿が、フト、飛んだやうに、朦朧と肩を揃へて映つた。

### 緑の旗

#### 三十六

「良助、此處だとよ。」

手取川、河畔の工事が大野戦の準備かと疑はるゝばかり、胡麻を撒いた眺望の人数、此處彼處



に、廣く、大く、流から礫原へかけて、鞍ヶ嶽を近く背後に、白山を遙に横に、開展して行はるる、一幅の活圖畫を、一眸の裡に納めて、小高い堤防の上に建設けた天幕の前で、振向いて呼びかけたは、お龍を乗せた山駕籠の先棒で、要藏といふ口數の少い方、其處から早や小腰を屈めて居る。

良助も揉手をして、うろ／＼しながら急いで来て、

「お、然うか。」

兩人一所になると、要藏が小さな聲、

「一生懸命にお願い申すだ。」

「おい、承知々々。」

時に渠等を導いたらしい、一人の工夫、棧敷を覗くといふ見得で、鼠色の天幕から今日は暑いくらる午後一時頃の光線の中へ、日にやけた顔を出して、炫いか眉を擧め、

「おう、此方へ入んねえ。」

駕籠舁ども口を揃へて、丁寧、

「はい、はい。」

「何だぜ、恠うお前達、用が濟んだら、さつさと歸んねえよ、お頭ア愚圖々々長話はお嫌えた。」

といひく、ツツと出て、擦違ひに見向きもしないで、土手の石原を眞二つに下りて行く。

「若い衆さん、難有うござります。」と弓形に聲を送つて、

「さあ、お主。」

要藏が先へ立つて、畏々、身體一ツだけすぼりと入る、三角の暗い口を、良助は後について、二人とも山賊の構へた巖窖へ入る心地。

先づ見る、左右に妍き婦人、一人は銚子を取り、一人は齊眉き、背後に一人、玉子の脇で、肩を揉む、大王五段襲の葎の上に、熊の皮の敷物かけて、高胡坐、大杯の波に虎鬚を泳がせて、三方犠牲の婦人どもに、涎を垂るゝこと土蜘蛛の絲の如く、前に控へた俎に片足は猪か、馬か、人間か、音に鬼と聞いた工夫のお頭、水所だけに河童に似た酒頭童子と、おつかな、びつくりの良助要藏、思つたとは大相違。

天幕の内は見かけより、胴ぶくれに廣かつたが、小石も草も其まゝに、大形ではあるが粗造な白木の卓子を据ゑて、陽氣のために寛げたか、纒に胸を開いた襟白く、肩を斜に凭掛り、一枚の地圖を展き見つつ、鉛筆を手にして、端然と威儀正しく、唯一人、椅子に控へたのは水上規矩夫であつた。

兩人それと見て、卓子の脚の傍に、焚火のあとが灰になつて白い、土の此方に、肩を附着けて



蹲まる。

「其處へ、お掛けなさい。」

工學士は優しくいつて手で教へた。

「へい、何う仕りました、へい、いえ手前どもは。」

「これが勝手でござります、はい。」

「いや、遠慮は不要よ、私も其の方が勝手だ、さあ、お掛け、」

工學士は再び深切に指示した、椅子は三脚ばかり横縦に亂雑に据ゑられた、なほ卓子の上には、

土瓶、茶碗の類が、取散らされてある、其の不規則なのが、却つて一個々々、緊乎と主人に然か

命ぜられて、各々嚴格に位置を守りつつあるが如く、秩序正しく整然として見えたのである。

駕籠屋はものいはれて一層逡巡、容易に座に就きさうにないから、

「まあ、宜し。」

と向直つて、

「何か用か。」

良助は顔を上げ、

「へい、飛んだお邪魔をいたします。もう、何でござりまして、私どもお願ひにありがとうございました

儀は、他でもござりませぬが、なあ、要藏、

「はい、其の儀につきましてござりまして、え、おい、」

目と目で互にのみこみ合ひ、

「良助、何しろ、あのことから前へ申上げべい。」

「然うよなあ。」

三十七

要藏入交つて恐るゝ、

「え、旦那様、私どもは此の鶴來街道の、田圃の肥料に育ちました、蛆同然な人足でござりま

して、はい、時勢後れな駕籠昇を渡世にして居りますものでござりますが、世の不景氣に連れま

して、からツきし稼業がござりません。近來まる遊びでござります、其處で棒組と相談いたしま

すには、なう、良助、

「全く棒組の申す通りでござります。」

「何とか一ツ命の綱にありつくべいと、低い鼻を突合せたでござります。承りますれば、御支配

の仕事の方で、ものに寄つちや人を使つて下さるといふことでござりますで、慥うやつて、出額



を揃へて、お願ひに上りましたでござりますが、

とはあゝいつて息をはずまし、

「慙う、お前、かはつて申上げねえ。」

良助夢中になつて土を掴み、

「就きましては、私ども、山奥の案山子でござりまして、何のお役にも立ちましねえでござりませんが、御覽下さりまし、足腰は達者、折べしよりましても棒杭の代に使へませうかでござります。棒組とても相當に小力はござりますで、どんな事なり、骨は惜みませぬで、旦那様、一ツ助けると思はつしやりまして、二人をおつかひ下さる譯には参りませぬか、お願ひでござります。」

「お願ひでござります、と續けざまに頭を下げる。」

腰を据ゑ、目を睨り、息を詰めた一揆の劍幕、そも如何なる大事と、氣を凝らして聞き取つた、

水上規矩夫、餘の事に微笑して、

「何か、お前達が日傭に雇はれたいと慙ういふのか。」

「はい、就きまして、……」と要藏一膝乗り出す、良助は拳を握る。

工學士は何事も思はぬ状で、

「そりや違つたよ、人夫の出入は私には解らんね。」

「其處を、もし、何うぞ旦那様のお力を持ちまして、

と身悶してあせつて、繼るにつけ、工學士は意味もなく打笑ひ、

「おい、些だつて私の力は要らんだといふに。お前達は頼む人を間違へて居る。そんな事なら屋島といふのに聞くと可いんだ。幾干でも人夫は要る、潜水夫などこそ、選んで雇つて來てあるけれども、仕事師だ、土方だといふものは、行くさきぐで間に合せるんだから、未だ此處をはじめて十日にならん、却つて此方から頼みたくつて居るかも知れんぜ、多分然うだらう、疾く尋ねて聞か可い、屋島といふ男だ。」

「へい、屋島様、何うだ、良助。」

「然うよの」と何か腑に落ちない體で、もぢく。

「名は藤五郎といふのだ、其處らに働いて居る工夫だちの、誰に聞いても分るよ。」

「でござりますが、旦那様、唯今、此方へ参りますにも、彼處此處まごゝいたしまして、方々で小酷く叱られて、いや、もう這々の體でござりました。」

「宛然八陣へ入りましたやうでござります。はい、ぶツつかりますと最後、天窓がぐわんと鳴つて、目から火の出るやうに劍香を喰ひますんで、此の通、……不寐ながら大汗でござりました。」  
工學士はガタリと椅子をすらし、卓子の土の早附木を取つた、巻煙草に廢と吸ひつけると領



くと一所に、

「亂暴な奴等だ、そりや氣の毒だつたな、屋島は何だ、聞かないでも、其處等見て歩くと、長靴を穿いた、年配四十二三の、極人柄の温良のが其だ。たしか他に、長靴を穿いたのは居ないから、もし知れなかつたら、屋島といふより長靴の大將と尋ねるが可い。」

「はい、はい、それから其のお給金でござりますが、」

「いや、なほ其の男でないと分らない。」

工學士は煙草を差置き、二人が煮切らない様子を視めて、

「そんなに小突かれたか、ぢや此處へ呼んで遣らう。」

良助 慌しく、

「旦那様、一寸。」

三十八

「お給金と申しました處で、金高を兎や角申すではござりません、おい、要藏然うだらう。」

「然うだともよ、棒組も申上げます通り、決してお錢のことではないのでござりまして、お願と申しますのは、實は私ども無給金で、はい、無錢で使つて頂きたいのでござります。」

「無給金？」

と工學士は其意を得ない面色で身を開いて、卓子に肱をついた。より委く靜に聞かん哉の姿である。良助此處ぞと取入つて、

「唯もう焚出しのお餘りでも拾はして頂きますれば、それで難有がりました、二人とも生命を差出して働きます。」

「人を使ふに給金なしといふ法はない、又無錢で仕事をする奴があるものか、勞働には相當の報酬がなくちやならん。私はじめ皆手當を取つて動いて居るのだ。お前達は見受けた處、何だか大層な意氣込んだな。生命がけで働く、働くは結構だが、此の工事の手傳ひをするのに、何も生命がけといふ危険な場合はないよ、それにしても非常に思ひ詰めて居る様子ぢやないか、何うしたのだ。」

「え、其處でござります、旦那様に生命を差上げました氣で、無給金で働きまするかはりに、折入つて、實は其のお願ひがあるのでござりまして、」

「條件づきだな、多分私には分らない事だらうが、まあ、可し、聞けなら聞いて見よう。何だ。」

「はッ、」

頭を下げて、



「さあ、要蔵。」

「まあ、お前から、」

しばらく譲り合つて、良助が額を拭き、

「もし其の、お腹立では恐入りまするが、實は其の、つい此の四五日前に、駕籠を一挺雇はれまして、鶴來から鞍ヶ嶽まで棒組と二人で、客人をお送り申してござります。」

綺麗なお少い方でござりまして、はい、其のお方は、鞍ヶ嶽へ、御亭主を捜しにお上りなさいましたので、お十八九、二十ぐらなるなお嬢様が、何でも東京の御人だと申しまする、はるくおいでなさいました、御存じでもござりませうが、鞍ヶ嶽は、なか／＼頂上まで駕籠は昇けません。

山の中途からは日が暮れまして、あとはたゞ松明で御案内申上げて、七ツ劔の番小屋までお送り申したのでござります。何と、旦那様、其處に籠つて、半死半生の體で寝て居なすつた書生さん風の方が、許嫁でもござりませうか、お嬢様がお尋ねなざる御當人で、皆で御介抱申したあとで、かれこれしらく／＼夜の明方に私どもはお暇を頂いて歸つたでござります。

それから、盗むものはなし、森の中に置放しにして参りました、駕籠のある處まで下りまして、空を昇きながら、なあ、棒組。」

「然やうでござります、何日といふ糧があるではなし、嬢様もまた、どんなことをしても書生さ

んを勧めて、山を下りるといはしつたつけ。就いて気がかりなのは、丁ど早や麓の邊まで、のたくり込んで来た毒蛇。」

「いや、はや、鬼一口の御連中。え、旦那様、腹をお立てなさいませんで、まあ、お聞き下さいまし。」

麓で舌なめずりをして居る處へ、上からあのお嬢様ぢや、何の事はない、棚から牡丹餅……は譬にならぬ。川上から芍薬か、天から菊の露か、松の梢に藤の花といふお美しいのに因つて、一堪りもありやしまい、撈り取つて蹂躪られて、影も形もないやうな目にお逢ひなされう。

路なら五六里、半日と一晚お附き申したばかりぢやけれど、おいとしくつて、おいとしくつて居ても立つても堪りませぬ、などといひ／＼里へおりますると、もう其處等一面に、鱗が立つて、むく／＼隙間もない工夫だち。

こりやならぬ、いよく／＼ぢやと、駈け抜けて、鶴來へ戻りにや戻りましたけれども、久しぶりで、頂いた多分の賃錢で、辻堂の前で徳利を中に置きましても、棒組とも／＼一滴も、へい、咽喉へ通ることではござりませぬ。あ、此處で、駕籠屋さんと、優しい聲で雇つて下すつたと思ひますにつけても、もう、旦那様、へい／＼。」



「お互に親はなし、女房兒はござりませず、一番身體を投に出して、一六勝負にお嬢様を助けて試べいと、徳利を絞つて、相談を極めました。」

なれども對手は鬼千疋ぢや、此方人づれが一人や二人、賽の目になつた處で、迎も力づくで行くことではない、兎も角もこりや近間へ行つて様子を見る事にしますべいと、旦那様。

焚火を掻消して、辻堂の狐格子に徳利をぶら提げて置いて、二人で又鶴來街道をぶら〜遣つて來たでござります。

傾斜地藏の邊には、別段何事もござりませぬが、三宮村へかゝりますと、田も畦も沸返るやうな騒ぎで、何と、昨夜の事ぢやさうにござりますが。親不孝と、お洒落と、束髪と、高慢と、肥満つたのと、塗りますのと、六ヶ敷い字が讀めるのとで、評判な、お貞子といふのが、随分飽くまでな目に逢はされましたといふことで。」と、良助はベソを掻くやうな苦笑ひ。要藏も汗を流して、

「え、お手廻の疾い事で、へ、へ、へ。」とやたらに額を拭ふ。  
工學士は合點ゆかず、

「其の女が何うかしたか。」と巻煙草の吸さしをポタリと棄てた。

其の火と一所に、良助消えも入りたき狀して、

「へ、へ、へ、御串戯おつしやりまし、何うした處ではござりませぬ。其の娘は豫て村の學校の教師野郎と、巫山戯た眞似をして、ペラ〜と唐人言葉で親達に口答へなんかするのぢやさうにござりますが、昨夜日が暮れて間もなくぢやと申します。

其のもし學校の教師が呼ぶやうに、お貞とか何とかいつて、裏口から呼出しをかけたものがござりましたさうな、そは〜立ちますで、親たちが、時節がらぢやと申して留めますのを、例のペラ〜で刎ねつけて、駒下駄を穿いて、瓢箪棚を潛つて、出ましたが最後之助、其の駒下駄がポンと宙返、唐突に引擔がれたでござりませう。

キヤアもスウもあらばこそ、天狗に攫はれたも同様で、足が二本、ぶらりと行くのを見たばかり。

親達が顛倒り、やあ、誰も來い、彼も出い、と近所隣を狩催して、提灯で畦道を八方へ駈けましたが、彼處にも十人、此處にも五人、碁盤の地を取つたやうに、工夫だが、多い事。屯々の篝火で、提灯は光なく、すこ〜引返しますと、入口の橋に並べて、此間お方たちが、其を渡つてお通りなされましたさうな、榎が溪川の上へ伐倒してござります。其の眞中へ何と、阿魔ツ子



を素裸にして横倒し。

何處でどやしつけたか、身體だけ持つて来て打棄つたのでござります、ものの十四五人、すらすらと兩岸に樹の影のやうに突立つて、白いは面ばかりぢやなどとハヤ。

憎まれものでも村の人間、餘の事に取つて懸らうとすると、中にぬツくり、大鉞の刃のギラギラするのを引背負つて立つたのが一人、目を光らして、四邊をぎよろ／＼と見てござるで、誰も手出しがなりません。

鉞をどツしり肩にかけたのが、ドス聲で、

(女郎、口惜くば一思ひだ、目を瞑つて、身體を動かさせえすりや死ねる、川へ落ちて死んぢまへ！ 然うすりや野郎が一疋、下手人になつて行る、何うだ)といひましたつけえ、これを聞く

と尙の事、阿魔は椽に抱きついたさうでござります。  
(さあ、歸れ)と其まゝどや／＼と引揚げました、遠くまで楚音を聞きながら、手出しもならず、やう／＼這寄つた娘を抱へて、皆お念佛を唱へて歸りましたわ、内へ寝かすと大病人。

訴へるとか何とかいうて、教師殿は今朝疾く村を出たさうにござります、いやもう寄ると觸ると其の風説、村は軒並にがた／＼がた／＼、地震のやうに震へて居ります。杭を流に打たつしや大鉞の響を聞いたたら、山鳴ほどに恐がりませう。

そりやこそ推量に違はぬぞ、先づはや村の澤庵で、朝飯は我慢なされた、これから若鮎で一杯などと、待ちかまへてござる處へ、あのお嬢様がつかまつたら何となると、途中から旦那様、胸がどき／＼躍りました。」

工學士は半ば眼を閉ぢて、默然として聞いて居た。

四十

「へい、唯今良助が申す通りでござりまして、親不孝の淫奔ものには、却つて小氣味の可いくらゐるな成され方でござりますが、是が何も神佛のお心といふではござりませす、小癪な奴ばかりを撰取つてお遊びなさります手加減ではござりませんに因つて、此方人等が嬢様は、こんな山家に、何處へも隠れ場處のないほど、美しいだけに案じられます。」

處で、棒組と談合を極めました、二人が生命は突出しますで、どうぞ、其のお嬢様を無事にお通し下さりますやう、へい、覺悟を極めて上りましたから、いふまいこともあけすけに申上げましてござります。御機嫌に逆ひましたら、私どもを如何やうにも御成敗なさりまし、何うだ、棒組。」と目を据ゑて一心不亂。

「頼まれてする事ではござりませぬで、退れとおつしやつても動きませぬ。」と要藏も胴を据ゑる。



學士は靜に聞き果てた。寂しく輝く眼鏡の下に、伏目に打案すること良少時。

黙つて早附木の箱を取つて、しっくりと細い洋服の腕を差し向け、衝と良助に手渡して、

「まあ、一服喫め。」

「お手づから、お手づから、これは、」と頂く。

爾時極めて沈着に、

「然うか。」

此方は喫みかけた煙草を差置き、

「御意でござります、へい。」

「而して、お前達は何か、其の事を私に頼めば、何うにも出来ると思つて来たか。」

「はい、お頭に願ひまして、旦那様が、應と引受けてさへ下さりませれば、お聲がかりで、何とでも成ります事と存じます。」

「然うか、婦人を捕へて、亂暴をするのは、私が爲せるとでも思つて居るか。」と冷かなものいひであつた。

要藏言忙しく、

「滅相な、決して然やうな不都合なことは考へては居りませんが、え、良助。」

「お頭様が鶴の一聲で、嬢様は助らつしやらうと心得てでござります。控へろ、鎮まれ、旦那様のお心通ひになりますのでござりませう。」

「當所で出丸の天狗様が、暴れてしやうのござりませぬ時は、奥の院へ參つて願ふでござります、然ういたしますとお頭が取締つて下さりますので。」

「其處で私を指したんだ、お前達が既に然う考へるやうでは、亂暴をされた人たちも、私が發頭人だと思違ひをしようも知れんな、誤つて警官なども私に心づけて居るかも分らん、何といつた、要藏か。良助か、」

「へい、へい、」

「いや、折角だが、お前達は見損つて来たよ。これは、巡查の前でも、警部の前でも、又村一統の前でも、尋ねられるれば判然といふが、私は工夫の取締ぢやない。唯づつと、これ此の加賀の國の圖の中へ、良い工合に、併行した赤い線を二條通すだけの役目だ、工夫が何をしようが、彼をしようが、些も預らん、もし、皆が、婦人を汚すために線路が狂ふか、火を放けるために、隧道が塞がるやうな事があれば、屹と戒める、必ず處分する、自分の権利の届かぬ處は、然るべき筋へ願つて出て取締る。けれども、一寸づつ、五分づつ、私の思ふやうに、じり／＼と、此の線が延びて、あとに故障がない以上は、蔭で何を爲ようと構はない、又多人數の事だ、構つたつて爲



やうがない、可いかね。

但私の目の前で、見て居る處で、婦人を榎の上へ横へるやうな事をすれば、人情として黙つて居らない、屹と留める、留めるが、……素々私は工夫の頭でも、親分でもないのだ。土方なり、仕事師なり、大工、左官、其の他、すべての人足と同然、爲る事は違ふが、同一給金取だ、いふ事を肯かんければ、黙つて其場を去るの他、爲やうがない。だから、今お前たちの言つて來た事は、すぐに警察、警官に訴ふるより別にやり方はあるまいと思ふ。しかし折角來たものだ、其の男とても巡查のするやうな眞似はしまいが、兎も角、人夫の頭をして、給金の出入、萬端世話をして居るから、私よりは相談甲斐があるかも知れん。今此處へ呼んで遣らう、前刻いつた屋島藤五郎といふ男だ。」

手取川

といひかけた、傍に屋根を通した、青竹の柱に房々と虹を絡めた切の中の、色の縁なるを、軽く引くと、さら／＼と音がして、高く蒼空の竹の尖へ、一流の同一縁の旗。

戶外から見ると其の美しさ、工學士が天幕の屋根には、孔雀の翼、暗號の色々、縁は屋島を呼ぶのであつた。

四十一

「見たか、」

「見た／＼、見た段か。」

「見たとも。」

「何だ、」

「雲だらう。」

鳥の巢も、蜘蛛の巢も構はず打込んだ、河原の篝の怪しい火影に、五六の黑影、漂標の化けて出た形で、いづれも齊く、夜半の空の雲を仰いで、忙しく口々にいふのであつた。

「雲だらうぢやねえやい、雲だな、」

「何、雲に乗つてるんだ。」

此處に陰氣な沈んだ言語が、喧嘩の將に起らんとする時、各自が、激して意中を吐く、口叱言のやうに罵り交はさるゝにつれて、見渡す限り、彼方、此方に、十人、八人、五人づゝ、近きは、其の股、腋の下、胸から、頤の下へ赤く淡く焚火を包んで、工夫を描いた影燈籠。また、闇夜に龜の子の群れる趣して、時々人よりも大いなる、火花が燦と見え燦と消ゆる、遠き方の群集



に至るまで、彼是同時に氣色立つて、譬へば目覺しき花火の後、不知火のつくし湯、月待つ二十  
六夜の風情に似て、何處ともなく、ざわくと、短き草に一陣風が渡ると、船を見よ、船にも人  
の、棹さ、ずしてイむ影あり。

「それにしても何だらう、」

「然うよな、雲にしちや些と判然とし過るぢやねえか。」

「眞個だ、雲を掴むやうなもんぢやねえ。」

「然も二人だぜ、男と女の並んだ姿だ、尋常事でなささうだい。」

「狸かな、」

「いんや、神様だ、空中を飛行する、男女二柱の神だ。」

「高慢な知つたかぶりをしやあがら、山伏め、と交返すものがある。」

「一人陰氣な聲を發し、」

「俺ア、地震だと思ふ。」

「戦争があるのかも知れねえや、」

「海嘯ぢやねえかな。」

「何しろ、不思議だぜ。」

「不思議だ。」

しばらく寂寥となつた、手取の河原の光景は、時々刻々に、層一層陰慘なものになつた。礫原  
の石の山は處々に鋭き三角形に積上げられ、雄大なる萬力は、一ならず二ならず、機械の鐵に灰  
色の光を帯びて、一度、簞が移つたら、其まゝ、立處に炎をまはして、地平の盡くる處まで、ぐる  
ぐる駈け出しさうな氣勢である。

平地に深く、未だ嘗て此の邊には見當らない、恐しき穴は穿たれたり、水なき處に縦横に流が  
出來て、逆流してちよろくと、耳に就いた河音の他に新しい響が傳はる。太い鎖は、十町、或  
は五町のあひだ、遮るものない眇たる凹凸の石の間を潜つて、八重十文字に線を交へ、工夫と  
工夫と工夫等の間に斷續し、八方に奔つて、末は河に入り、果は又雲に連なるなど、恰も世界の  
はじめ、天帝が描いたる、設計の、圖取をこゝに見る如く、或は地球の滅びんとする時や、日月  
暗澹として最後の幕を引く處を、纜に支へた一落數千仞の谷の底なる小都會に、決死の人種が、  
火と水と土と木を敵になし、防ぎ戦ふにも似るのである。時に此の單の輪に、焚火を取巻いた工  
夫等の背後に、兩人、繼子のやうに蹲つて、凍りついた形で、火にも當らず、畏つて居るのがあ  
る。

「え、」



「おい、」

「そっくりぢやねえかよ。」

「殊に女の方なんざ、お嬢様其のま、だ。」

「然う思つて見た日にや、恠う、銀杏近まで肖て居るぜ。」

ひそめき語るは良助、要藏。

四十二

「誰でえ、誰でえ、河童に魅込まれたといふ風で、其處に蹲んでるなア、」

「へい、今晚は、」と要藏ぼやけた聲。

「見や、今晚だとよ、」

「雪隠で出會したやうな挨拶をしやがる、は、は、は、と高らかに笑ふ者あり。」

「新入ぢやねえか、新入だな、手前達ア、」

「御免なさりますし、へい、つい今日から御厄介になりました、新入めにござります。」

「出やな、出やな、何も然うびくつくこたアねえ。」

「お、長靴の大将からお言葉のあつた奴等だ、此方へ寄んな。」

又一人、

「然して手前達ア土地ッ兒だつていふぢやねえか。」

「へい、田舎ものでござります。」

「馬だ、馬だと來やあがら、鈍間が人込へ出やしめえし。」

「さあ、當れよ。」

「待ちねえ、土地ッ兒なら丁ど幸えだ、一ツ聞いて見ようぢやねえか。」

「可からう。」

「時におい、お前たちも今のを見たらうな。」

「何でござります、雲に乗つたお姿でござりますか。」と良助腰を伸し顔を突出す、櫓で踏張つた形なり。

「む、然うよ。恠う此處等ぢや、傳説因縁のあることかの、五月の幾日から何日までは、此の大河の上へ、雲の人像が拜まれるとか何とかいふ、」

「然も女體と、男體だぜ、え、新入。」

「眞個でござります、いえ、おなかま中で、豪い風説でござりますで、私どもも寐ないで居りまして、刻限といふに、唯今御一所に拜みましたが、いやもし、呆氣に取られて了りました。つひ



ぞ小兒の内から祖父祖母に聞いたこともござりませぬ。なあ、要臈。」

「然れば、生れてはじめてでござります。」

「だからよ、私がいふんぢやねえか、恚うやつて河も山も突崩すもんだから、澤山は蹇音を聞いた事のねえ、此處等の、何かの、ソレ主などといふものが、何處かへ引越をするんだとよ。」

時に別に、鋭き舌をひらめかして、

「それにしちや雲の姿といふのが、當世だぜ。おい、月夜に裏町を抜ける、い、中の、並んだ影法師といふ形だ。土地の主といふならばよ、女は撞木を持ちの緋の袴だ、野郎の方は烏帽子を被て、御幣を擔がねえぢや納まらないぢやねえか。それとも四天で百日鬘か、長刀について瀧夜叉といふ處だ。それに何と、突然アノ上へ雨雲で相合傘が覆つて見ねえ、すぐに稻妻で、いろ／＼、と拜まれ給ふなア餘り還俗を爲た魔物ぢやねえか。」

「勿體ないことをおつしやりまし、眞個に恐しい魔所でござります。」

「は、馬鹿をいへ、魔物結構だ。恚う、神佛こそ拜まねえが、魔物があらはれりやすぐに其の乾兒になる、揃つてお頭と奉らあ。待構へて居るんだぜ。魔物は氣を引くといふからな、おらつちが心は先方様が御存じだ、可愛がつて下さるぜ。力松か——トそれ、も、んがあとといふ聲で召しますだ。」

はツといつておともをして、ねえ、おい、黒雲に乗つて暴れて出る、さしづめ、おれなんざ、柄杓のやうな刀を提げたり、烏賊の甲のやうな槍を背負つて、一ツ目小僧で駈け出す役だ。どうかまあ、三晩續けて見る、あの雲が、魔物でくると祈つてらんだい。」

と大氣焰を吐けるものは、かゝる中にも立てらるゝ、小さな身體の大兄哥、一番槍の力松であつた。

「小頭、え、其につきまして、私ども些と心あたり、と申しますのは、あの通りのお二方を鞆ヶ嶽で、」といはうとする、良助の袂を暗がりから、ソツと引いて、ぐいと留める。

良助、はツと思ひ、

「鞆ヶ嶽が、矢張其の、あのものし、へ、へ、へ。」

四十三

「何を、鞆ヶ嶽が何うしたと？」

力松は焚火の中へ、煙管を突込んで聞き返した。

「それが其の何でござりまして、飛だ恐しい處なんでござりまして、」

「何をいつてやあがる、世間の奴等が恐怖がるものが、頼母しいんだといつてるぢやねえか、悪



く威かすない、いや、威かすなぢやねえ、え、小焦つてえ、恐しくはねえのだから、威かすなぢやねえや、氣を抜きやがるなだ、然うだ。眞個によ、おらッちや、何だぜ、もしか、天狗にでも魔物にでも、あゝいふのがあつて見や、荒神様にして拜むぜ。なあ、おい。」と四邊を向し、兩手で顔を伏せて洗ふやうに擦つたが、

「あ、詰らねえ、今夜あたりや、あの雲が舞下つて、二柱が磔へ下りてよ、見參！とか何とかついてくれるだらうと、樂みにして居たのに、山の頂上から、ふうはりと出て、天窓の上を通り越して、背中へ消えるなんざ怨めしいや。

聞きねえ、お互に何だ、仕事の方は、お頭もあり、大將もあるけれど、内職の方には棟梁がねえからな。」

「どツちが内職だか知れたものかい。へ、へ、へ。」

「いやな音で笑つたのがある。」

「本職なら尙の事だ、よく婦人を滅茶にした、よく打壞を行つたなんて、賞められて見たが可い、どんなに嬉しいか、張合があるか知れねえぜ。猫が鼠を捕ればツても、主人の前へ持つて出ら、ソレ首實檢といふ奴だ。」

捨吉兄哥なんぞも、然ういつてら、大巖を打缺いたり、奈落へ枕を打込んだり、山の洞中を抉

るぐらるで、よく爲たといはれたつて、痲癩が納まらねえとよ。何でも、善男、善女の目にや、阿彌陀様が見えるといふから、おらッちがお目にかゝられるのは、悪魔か、外道だ、それが拜めると来たんだから、雲の形は、あゝ見えても悪魔外道だ、口を開いて一言いやあ、殺せ！焼け！だらうツて喜んで居るのにな。失せ給ふなア薄情ぢやねえか。え、恚う、土地兒の新米、お前達、鞍ヶ嶽でも、お馬のドーでも、魔物に知己があるなら、拜みの後生だ、引合して貰えてえ。べらぼうめ、魔物處か、刃物にせえ逢つた事のなささうな徒だぜ。」

と足をすつと踏伸ばして、力松天を仰ぎ、

「やい、吝な處を面桶で伏せようか。」

案外な風向きに、良助屹と思案して、

「小頭、もし、實は私ども、只今申しました鞍ヶ嶽で、あの雲にそツくりといふ、お二方を見ましてござります。」

「餘り不思議でござりますで、眞個にはなさるまいと存じて控へたでござりますが、」

と要藏も氣を持たせて、口を添へる。

力松シヤツキリとなり、

「正物を見たか、お前達ア、」



「知つてるか。何だ、」

「何様だ、」

「誰明神だ、」

各自、指が動くやうに動揺む中から、一人、中腰になつて、頬冠の奥に目をきよろく、

「見ねえ、やー一寸見ねえ、噂をすれば影がさすだ。」

「え、影ぢやねえ、眞物だ。」

「どれ、む、いかさま、御出現。」

「女の方だ、」

「女體々々、」

「辨天様が御降臨。」

「あれ、あれ、美しい。」

「天降り、天降り、」とふはくと踊つた奴は、腰に穿替の草鞋を帯びたり。

たどくと来て其あはひ、三間ばかりにして立停まつた、媚しい聲細く、

「もし、些とお尋ね申します。」

驚破と駕籠舁ども胸ドツキリ。

力松聲を密めて、

「一件か。」

「はて、」

要藏ちつと透して、

「違ふの。」

「まるで別だ。」

と聞くと、静まつて様子を視めた工夫ども這個！獲物こそござんなれと、一時にわやくがや〜。

四十四

「此方へ來ねえ、此方へ來ねえ。」

「早や二三人ばらくと立懸つて、」

「さあ、寄んねえ。」

「すつと來なよ、遠慮をすらない。」

「其處ぢや話が届かねえや。」



「はい、はい、とおどろしなから、右も左も取巻かれ、擴がつた人輪の中へ、突飛ばされた嵐の色鳥、窶れた翼を窘めながら、蹠躑き出でて倒れかゝる、片膝をついて手を下げて、焚火に顔を根らめたが、たぐりよりや最愛よの、細布の十六七、砧に畫く娘である。右の方から摺寄つて、姉さん、何を聞く。」

「あの、尋ねます人が、」と息の下で幽かな聲。

「何だ、尋ねる人だ、生きてる人か、死んだ人か。」と左手から覗いていつた。

「え、」

と吃驚、顔を上げる、前髪が頬にこぼれた、頸許の清らかさ、月の影が宿りさう。

悪工夫等は目を見合せて、北叟笑むあり、手を拍つあり、舌舐すりをしたのもある。

ニヤ／＼と笑ひかけて、

「姉や、恚う、お前の尋ねる人といふのは、頓死をしたのか、首縊か、身を投げたのかと聞くんだよ。」

「お、お父さんは、何うかしたのでございますかい。」と最う涙ぐんで娘はわな／＼。

「は、は、は、泣くな、泣くな、今ツから泣いちゃ爲様がねえ。笑つてくれ、莞爾笑へ。誰も死にやしねえんだがな。お前のやうな美しいのに尋ねられる奴が、此處らに生きて交つてる理窟は

ねえが、何てえんだ、これさ、何て名だよ。」

「甚平と申します。」

「甚平だ。甚平は佐倉の渡場でなくつちや居ねえぜ、お前の父様か。」

「はい、あの、お城下の何でございます、巨山様のお救小屋に居ましたのでございませけれど、其處が厭だからツて駈出して、お夥間へ入りました筈なのでございませ。」

力松が口を入れて、

「おい、昨日あたりも二三人、新入があつたぢやねえか、搜してやれ。」

「然してお前は何て名だ。」

「……………」

「何て名だツといふんだよ。」

「露でございます。」

「露か！ ほウ、といつて、今までたしなんで居た平手で、眞綿のやうな片頬をベツたり。

「あれ、」

「堪らねえ、よしこの言句にある名だ。」

「一番面桶で伏せるかな。」



「あ、れ、」

「待ちねえ、夥間の奴の、娘だつていふぢやねえか。」と力松は掉動かして煙管で留めた。

「嘘の皮、から嘘でさ、兄哥、誰がこんな代物を持つてながら、救小屋へ入つたり、此方が夥間に成つたりする奴があるもんですか、千兩箱だ。」

「屹と親兄に損をさして、色男の後を追つて遁げるんだね。地獄の門番に先方から聲を掛けたなア勸進帳を讀んだんぞ。」

「うむ、それも然うか。」

「メこの、メこの、やあ、おたばたするな、コン畜生。」

「まあ、あれ、あれ、あれえ。」とばかりに、亂髪を小石に敷き、眉を開いて當所なく、助を求むる目も上つり、唇の色眞蒼に、崩るゝ衣紋の乳を隠して、丁と合はせた兩の掌、白き槿の花に似て、露といふ名ぞあはれなる。

力松は苦しい顔、

「おらあ、そんな痛々しいなア見るのは厭だぜ。」

「だつて、兄哥、猫が鼠をくわえても、首實檢だ。」

「巫山戯やがるな。」

「合點だ。」

哄と笑ひ、黒く集つてするゝと引いて行く。

目前へ朦朧と男女の姿、影が並んでフツと立つた。

#### 四十五

力松足を曲げて焚火を圍み、手許を暗くして、熟と見ながら、

「新入、新入。」

「小、小、小頭。」と良助は向うを指し、佛も鬼に一所になつた四邊のさまに、齒の音も合はず、

がた／＼と胴震。

聲を殺して、

「一件か、」

「え、え、え、」

「一件のお方か。」

「見えました、お出でなされました。」と要藏、手で手を引張るやうにしたから良助も一所に、兩人づいと立つて、すた／＼と駈け出したが、お露に集つた一群をついと抜けて、眞先に進むと、



諸共にハタと膝を折つて、件の立姿の並んだ前に、大地に両手を支いたのである。

不思議なる光景なれば、一同齋く目をつけた。

「悪黨だとおつしやりまし、魔物だとおつしやりまし、皆が大事にいたします。え、もし鬼で在らつしやいますな、魔で在らつしやいますな、鬼のやうな、魔のやうなお心でござりませうな。」と要藏胸を叩いていふ。

村岡はお龍とソト目を交した。

未だものいはず。

時に一團の炎あり、磧の上にちらちらと燃えて、やがて近づくくと火花がばらばら、煙はうしろへ、人は前へ、前後して二人ざくりりと来る。

前なる工夫に松明を持たせ、背後に引添うた荒漢、明き片頬火の如く、暗き片頬藍の如く、髪は蓬に(流)の字の破半被、帯にした繩が重量に弛んで、腰に一挺の鉞をさしたが、刃渡二尺俯向けに蒼く、膝の下に輝いて、恰も是阿修羅の隊の飛將軍、月宮に亂入して、其の第三の小王子、三日月を捕へて提げた風情。眼を半眼に、腕を拱き、胸を張つて、素跣なるものを誰とか爲る。力松近く呼んで、

「捨吉か。」

松明は衝と高く捧げられた、穴藏に灯したるやう、ものの色は皆陰々として露れた、あはれ忍泣く犠牲の涙の露も、半ば解けた唐縮緬の帯の端も、爪に疵ついた腕の血も。

お龍は赤毛布を絡うて居た。不二太の靴は破れて居た。

けれども一人は端麗に、他は俊秀にして且つ奇峭なるお龍と村岡が相好は、先づ悪工夫等の迷信に適うて、早や其の十中の九を説法し得たことである。

これより前、橘の香こそ通はね、三々五々屯した、彼方からも此方からも、力松の群の、美しい獲物を嗅ぎつけ、我勝に寄つたのが、鱗に鱗をかさねたから、五人ならず十人ならず、無慮二十人は居合せたらう、娘に太くなつて取着いた毒蛇の骸、両方へ解けて真中から颯と分れる。

「助けて下さいまし、誰方ぞ、来て、下さいよウ。」

トタンに揃つて動き出して、既に危かつた犠牲に近づいて、今、半ば身を起した、お露を前に二人はしつくりと肩を合せた。

河波の音滔々。

「お嬢様、駕籠屋でござります。」

「もし、駕籠のものでござります。」

「お見忘れなりましたか。」



「鞍ヶ嶽へお送り申しました、  
交々言つて擡げた顔を、左右一目屹と見たが、みだりに語らず、其まゝ口を結んで、領いたの  
はお龍であつた。」

力松すたくくと来て小腰を屈め、

「へい、これは。私ア力てえんで、力松てえんで、へい。」

といつたが、未見の人、不二太が黙つて瞻めたので、繼穂なささうに一足退つた。

要藏は又摺寄り、

「お嬢様、旦那様、此の力頭をはじめ、首を長うしてお待ち申して居りましたのでござります。

貴下力は悪魔、え、もし、なあ、なあ貴下方は悪魔外道で在らつしやりますで、皆の隊長で在  
らつしやります、悪黨で在らつしやりますな。」

四十六

「ねえ、兄哥、」

密と力松の半被の裙を曳動かした奴があつた。

「そツくりだね、此間ツからの雲の形に瓜四つだ、執方が影だか分らねえな。」

力松は恠る珍客の前に、餘り口敷を利くを不躰なりと思へる如く、黙して領いたばかりであつ  
たが、松明の火に照された兩個の姿と、唯ぬいと立つて手を拱いたなり未だ一言も發せざる、捨  
吉の顔とに目も放さず。

裙を曳くものは益々低聲で、

「可いぢやねえか、兄哥、組合の加勢に天降つた一件ものなら、何も遠慮することはなささうな  
もんだぜ、見て居る前で、一番、其の阿魔を打めよう。」

忽ち傍より、

「畜生、旨え處へ氣が付きやあがつた、然うだ、違えねえ〜。」

「おいら又、彼の人たちが、おらツちに下すつたお土産だらうと思ふが何うだ、然うでなくつて

お前、今時こんな美しい代物が、恐しい此の鰐の口へ自分で飛び込む奴があるものか。

猫の死體から南瓜が生えた話はあるが、お露ツて娘が積に顯れよう理窟はない、第一品物が好

過らあ、縁日ものぢやねえからな、え、力兄哥？」

「黙つてろ、」と制して力松は、今更ながら、影向した魔神の男體が、無言で睨み合つた捨吉と、

服装こそ違へ、殆ど見紛ふばかりの顔容に、一層信仰の念を増して、愈々差控へて渠等が爲す處

を瞻るのである。



折からむら／＼と黒き影、映ると見れば人となり、闇に人ありと見れば影さして、工夫は西より、東より、夜の色の動くとともに、足を交へ、肩を組んで、次第々々に數を増して、ぐるりと四邊を取巻いた。

此處に無慮百に餘る工夫等は、後れたるものは先づ、前んじたるものは屢々、いづれも仰いで疑はしき雲を仰ぎ、訝しき姿を視めて、目も口も吐く呼吸さへ、盡く二人の膚を襲ふのであるから、もし是をして鎖したる一室に於いてあらしめよ、いかに氣丈なればとて、窺見るが如き、かよわき女性の、毒氣に觸れて眩いて倒れたであらう、幸に深夜の積は沙漠として、隨處散點せる異類異形の怪物は、山の雄、河の大なるがために、却つて風に吹散らされたる木の葉に似て、豫め山中の孤家の、物凄じきを見たる目に、お龍は恐るべき惡工夫等の姿を宿して、然も冷靜なる態度を保ち得たのである。

されば少くとも此の美人の、裙端折りたる襦袢の裾、なほ其の、はら／＼とあるおくれ毛をさへ、打揺がし得たものは、僅に鞍ヶ嶽を颯と下して、川面を渡る夜嵐あるのみ。

其の夜嵐や、一時、松明の火は高くひらめき上ると見れば、低く手許に絡んで、振照らしつつある工夫の足許に、媚めかしい犠牲の娘、半ば死してたゞうつとりと夢見るやうな横顔を、露はに白き二の腕に搔垂れて、胸まで縮めたる脛を戦かしたのが、不意に、苦と叫んだ時であつた。

衝と一足出た不二太の前へ、肩を聳してじり、と寄つたのは捨吉で。

ゆるく組んだ腕を解いて、片手を鉞の帯にかけて、片手でお露を指して、

「お主ア、此の娘を何うするかい。」

「……………」

「助けようといふのか。」

色をかへた村岡不二太、思はず振返つてお龍を見た。

お龍はつか／＼と出て、猶豫はず、娘の手を取つて扶け起すと、一目見て觀世音、ぶる／＼と

震へて袴と紐、しをらしい兩の肩に、毛布をかけて、身を斜めに、捨吉に立向ひ、婀娜な聲し

て、

「黄道吉日を相てお殺しなさいな。私が預つて置きますから、」

しばらくして捨吉は、黙つて手を下げて、一禮した。

良助と要藏は、重荷を下したやうにへと／＼と又頭を下げた。

力松ぢたゞらを踏んで、

「やあ、拜め、天からお授けの隊長だ！」



「誰？」  
 「私、屋島でございます、未だお休みではなかつたのですか。然して夜更にお立出で、はあ、それでは矢張今しがたの雲の姿を、貴下も御覽になりましたか。」

隔はないが慇懃に、慇懃工學士にいつたのは、數々噂された屋島藤五郎、即ち長靴の大將と稱する人物、いかさまにも長靴を穿つて、蒼硝子の小形の瓦斯燈を提げて居る。此の明を手にして、不規則に散ばつた多勢の工夫の間を過つて、此處に工學士の天幕に近づいた姿は、異彩を放つて、星の流るゝが如き光景であつた。

屋島が歩調は、極めて正しく、整々堂々として大跨で、一足毎に常に馬の脊を跨ぐに齊しい。此の人は嘗て騎兵の曹長であつた、今も常に身に絡ふのは、古びた記念の軍服で、歩行くに靴の音の、大く聞ゆるのも、或は兵營以來の皮を、幾度も修復して重厚になつて居る所爲かも知れぬ。尤も籍を軍隊に置いたのは久しい以前で、後には地方の中學校に體操の教師をした事もあつた。

體操の教師であつたが、算數の術に長けて、字を能くし、讀書の力も深い、のみならず、屋を設くるに圖を引き、木を相して柱を撰ぶ、日の陰晴を豫知して卜筮を嗜み、星の名を知り、衣服の裁方も心得て居れば、風邪ぐらゐるは醫し、火酒をつかつて繻帶も遣る、工夫が祝事する時の、たとひ、煮染にしる、料理の指揮もする、萬藝に通じたもので、殊に驚くべきは、工學士の天幕に、暗號の旗を備へて、竹の柱の切を曳けば、中空に色の顯るゝ仕掛の如きも、此人ものすきの細工なり。

數年前、家についた公債證書、また若干の資産を残らず投じ、教師も辭して、若い細君を——地方には番臺がない——長火鉢の向うに坐らせて、湯屋を開いた、爾時自ら號を混堂と稱へて、何と風流でせうと、腰折歌、俳諧などを樂んだが、三月と経たず、フト細君が家出をすると、敢て其の行方を尋ねようともしないで、商賣を留めて、自分が却つて金澤の市に姿をかくした、其が恁の如く工夫の中に顯れた次第である。

其處で、略歴は、石川縣士族、騎兵曹長、體操教師、湯屋の主人、細君出奔、工夫の組頭となる。

數も千に餘る工夫の悉皆を取締るのではないけれども、支配下の、給金萬端、賄から、着るものにも心づけ、怪我也治せば、金も貸すので、他に頭を持つ徒のみか、其の長までが歸服して、



長靴の大將軍。

既に團體に名するに、風流組を以てしたのも屋島で。

藤五郎は、十四五も上だけれども、年下の工學士に對して、宛然神聖なるものに齊眉く如く、主に事ふるが如くする。

けれども、敬するよりは其の實愛するのであつて、彼の我を招くに縁の旗を以てせしむる如きは、其の徒然を慰むるためにもなれかし、一種の大人びた玩弄器を與へたつもり。

此時此處に來たのは、招かれたためではない、少しく語るべき仔細あつて、もしやと試みに深更の闇に訪ひ寄ると、工學士は未だ寢に就かなかつたばかりでなく、獨り立つて天幕の外に、物思ふ狀してゐんで居たのであつたが、

「屋島君か、風説の通り空を通るのを見たですよ。」

此方の言も丁寧である、水上規矩夫は中學に居た時分、其の體操の科の生徒であつた。然るに先生を稱して先生といはないのは、此の十四五弟の、少年の家に通つて、屋島が又外國語を習つたから。

「貴下は何と御覽でした。」

「私は單に、あんな雲だと思つたです。」

四十八

「屋島君、而して貴下は何と見たのです。」

例の靴の音が一ツ靜に響いた。

「は、私は然うすると、貴下よりは餘計に買ひました、私は彼の雲を、人の影と見たのであります。」

工學士は微笑して、

「成程、其の方がおもしろい、私のやうに、平氣で唯、あんな雲だといつて了へば其ツ切です。いや、實に冷淡でした、人の影ですか、成程。」

「然し、よく貴下、こんなに晩くまでお寢みにならないで、あれを御覽になりましてございますな。矢張、工夫どもの騒ぎが豪いので、つい釣り出されてでございませう。」

「一昨日の夜中からだといひますね、誰が見つけ出したのです。」

「然やう、何とかいひました、何でも船の中で見つけ出したので。然うです、多見次といふものでした。フケスの枕を打ちましたのが、水の流れ工合が悪いから、其處ぢや不可ん、と傍のものがいつたのを、何、こいつを承はりの己が打込んだ、洪水にだつて、びくとも動くのぢやない、



慍うして見せるツて、貴下、強情ぢやありませんか。其の晩、積には上らないで、野郎、其の自分打つた川の中の杭に、小船を纏ひつけて大の字形に寝たんださうです。

處が慍ういつた流ですから、船がぐらついて多見の奴、寝心が悪かつたか、寝つかれないで、まじまじやつて居ますと、見ましたな。鞍ヶ嶽の頂から、すら／＼と人の姿が出て、仰向けに寝た空を流について、すつと川下の方へ通つて行くのが、月はありません、今夜の通り、焚捨の箒にぼつと隈取つて見えたさうで、奴は龍宮へ行く夢だらうと思つたといひますが、あまり歴々と見えたもんですから、天窓の上を越した處で、不意にひよいと立つて、見送る拍子に、腰を極め損なつてどんぶりと落ちて、した、かに陥つたさうで。

ふるへ上つて其の話をすると、さあ、おもしろづくに氣が寄りました、我も我もと昨夜は揃つて、何でも一時から二時の間が刻限だといふので、臥待も居待も立待も一所に見張つて居ると、果して多見次のいふ如しで、それから、今日へかけての騒ぎであります。

「しかし、多見次か、其の男は危険でしたな。」

「何、貴下、船手の奴ですから水心は十分あります。」

「ですが、もし其の杭が抜けて船が流れたら何處へ行くでせう。」

是は唐突な質問であつた、けれども答ふるに何の仔細はない。

「貴下、終には海でありませうが、しかし幾つにも流が分れて居るのですから。……」

「假にです、かりに誰か、まあ、私とする。私が其の小船に乗つて、水にまかせて、此の川を流れるとすると、何處へ着きませうか、と深く思入つた語調で、重患の病人が、醫師に其の豫後を聞くやうなものの問ひやう。

天幕の前の姿黒く、工學士が其時の顔を見て、且つ心を讀まうとするには、蒼い火の小さな影は暗かつた。

屋島は返答にフト支へたが、

「地の理はよく御存じで在らつしやいます。此處に工事を起しますに就て、貴下は流の模様から、手取は其の川床まで、掌に乗せておしらべになつたです、船は最も流の疾い方へ流れ下りはしませんか。」

「けれども、です。」

「けれども、とおつしやるのは？」

「私に聞かれるれば、私だつて分りやしません。強ひて尋ねらるれば、貴下のいふ通です。しかし、そりや、あの雲を、唯、あんな雲と、思ふものいふ處で、貴下は、もつと買つて、人の影だといふたではありませんか。」



ですから、もつと買つて、まあ、何の方角へ流れませう。」

「あゝ、それでは、それでは先づ、……」

としばらく考へ、

「ひとりでに出来た大な水溜でありますから、船はひとりでに、屹と芙蓉の湖へ落ち込みませうな。」

「芙蓉の湖？」

「瀬瀉です、巨山の別荘のあります處。」

時に身動きもしない、工學士の態度が、激しく鋭く我を襲つた如く、屋島は何となく感じた。

四十九

「あの別荘には、いつも住んで居るものがあるんですか。」

「工學士は少時して又聞いた。」

「主人巨山は一寸々々参るさうでございますな、其夫人は大抵別荘の方だといふ事を申します。」

「其夫人？」

「はあ、巨山夫人、縣の門閥家で、大な製絲場を建てて居る、堅川といふ財産家の令嬢、美樹子

といつて、有名な美人で、才學、淑徳兼備した御方であります。」

再び何となく工學士の動かない姿から、一氣逆しつて暗中に屋島の胸を打つ感じがあつた。

故と話を轉じた様子で、

「あゝ、屋島君、多見次が船の中で見つけ出して、風説が事實になつた、今の、貴下は人の影と

見たし、私は唯あんな雲と思つた出来事に對して、一般の工夫はどんな考へを持つて居ます、騒

ぎといふのは何ですか。」

屋島はこゝで長官に對する時の一禮を施した。

「實は其の事について、一寸伺ひに出ましたわけで。工夫どもは最初から、あれを空でない、形あり生あるものと思つて、多分は通り魔の類だらうと信じて居ました。中には又自分たちのために出現した神、正直の頭でなければ宿らないとしますれば、工夫どもには、神、佛ではありませんな。何しろ靈あるもので、鬼にしる、魔にしる、信仰すべき本尊の姿だといふのであつたのですが、果して、彼の形によく似た人物が、しかも男女で、一統の前へ、正に顯れましたのでございます。」

「突然？」

「然やう、雲が消えて間もなかつたさうであります。」



其處で工夫どもの、歡喜と尊敬は一方なりません。どうぞ、此のあらゆる人夫の、守本尊として置きたいといふ望ですが、貴下のお許がなければ不可せんから、其の事を、私から一寸お伺ひ申しますので、いかがなものでございませうか。」

「佛者のいふ本尊、工夫仲間の宗教です。詰り大導師といふのでせう、語は違つても。」

「然やうでございます。」

「なるほど、ちらく風説を聞くんですが、工夫どもの亂暴狼藉、極る處がないに就いては、いづれ、然ういふのがなければなりません、位牌といふ言さへ知らない奴等も、遂には何か、精神を支配するものが必要になる數です。」

「お差支へはありませんか。」

「仕事の邪魔にさへならなければ、私は一向構はんです。」

「否、其は決して、私が致させません。」と屋島は誓ふが如くいつたのである。

「それなら寧ろ結構です。」

「私も、わきから、われくを見ますのに、目印があつて可からうと考へまして。」

「私は是を焼點といひます。」

「私は又、工夫どもの惡氣の凝つて形に顯れたものと思ふのであります。」

「同一事です、社會的にいへば代表者、寫眞屋ならば其にピントを合せます。といつて工學士は呵々と笑つた。」

「では工事の御支配は貴下なさいます、精神の指圖は其の人が、いたしませう。然して此の邪氣凝つて神を顯すやうな工夫どもが寄つて造ります。出來上りましたら、鐵道は生きて、靈を保つて、石炭を焚かないで汽車は動きませう、線路は夜も光りませう、實に愉快であります。」

といひかけて、

「え、それから、どうぞ貴下、其の本尊といふのにお逢ひ下さるやうに願ひます。御承諾下さいますれば、直ぐに此方へ參るつもりで、彼に、皆、私の暗號を待つて居ります。」

### 五十

屋島が軍服の膝に隠れた、蒼い色の瓦斯燈は其の中指にかゝつて、腕長く衝と空に翳された。是は工學士が面會を許した、報知の光で。

直に薄赤い焚火を擁して、墓石の如くすらくと立つたのが遙に見える汀に近き一群の工夫の中から、一點松明の火が高く燐火の飛ぶやうに相應じた。

空なる雲にも映らんず、陰に籠つた夜更の宙を、件の松明尾を曳く下に、すらくと仄暗く、



軀十四五、脚を交へて連つて、やがて近くとともに波状を暗がり描ける火の、此方の瓦斯の蒼い光と、冷く一ツになつた時、村岡不二太の異様の姿は、天幕の前に來たのである。

ト目迎へて屹と見た、工學士と、一名の工夫が捧げた松明の明に、互に顔を見合せたが、凝と瞻つて、雙方ぶる／＼と肩で震へた。

途端に、屋島はポカリと長靴の音を沈めて、胸を斜めに身を開いて、二人の間を一足遠退く。

其の時、瓦斯燈の影が映つたか、寔れ果てた不二太の顔は、兩眼のみ輝き活きて、死せるが如く蒼白かつた。

「幽霊？」と凡そ世に、此の人、恠る場合にあらでは、發し得べからずと思はるゝ、變つた調で呟いて、工學士は眼前に襲ひ至れる、恐しき影を拭ひ消さんと欲するやう、腕を伸べつつ、だらだらとあとへ退る。

「呀！水上。」

と叫んで、幽霊の不二太は、却つて兎の躍るかと、烈しく飛絶つて、水上が差伸べた腕の下を、搔潜ると齊しく、丁と兩の手で工學士の肩を抱へた。

村岡の其の背を、水上も其の腕でしつかと抱いたが、

「むゝ、村岡。」

「……………」

「活きて居たか、村岡。」といった聲は冷靜に復したのである。

村岡は手を拱いて茫然として立つた。

こゝに手を拱いたのは、不二太ばかりではない。同一姿で捨吉が居たのである、力松も居るのである、お龍は携へて來た娘お露の手を放して、面を背けて差控へた。

「村岡、活きて居たか、村岡、き様死ななかつたか。」

「……………」

「死ななかつたな、馬、馬鹿な奴だ、頼母しくない奴だ、羨しくない奴だ。」

おい、僕の祕密と、き様の祕密を、お互に知つて居るのは、世に唯二人ばかりだといふことを

覺えて居るか。

覺えちや居らんか。

僕の祕密といふのは、知つて居よう、堅川の娘の事だ、美樹子の事だ、巨山夫人の事だ。」

工學士は溜息を吐いて、

「意中の人の事だ、欺かれた事だ、不叶戀の事だ。」

僕が迷つた事だ、迷の覺めない事だ、斷念られない事だ、如何ともし難い事だ、他人の女房の



事だ、人の媽の事だ、恐るべき事だ、罰せらるべき事だ、誅せらるべき事だ。  
が、き様の祕密といふのは、華嚴の瀑の事だ。いや、其の遺書の事だ、其、其處に居るお龍さんの事だ。

き様が、華嚴の瀑で死んだと聞いた、僕は信じたよ、其の死を信じたよ。けれども哲學のために殉ずるといふ、其の遺書は疑つた、何、斷じて信じなかつた、世を欺くと思つた、虚名を賣ると思つた、可い加減なことをと思つた、卑怯な奴だと思つた、未練な奴だと思つた、悟られない人間だと思つた、浮ばれない亡者だと思つた、馬鹿な奴だと思つた、不埒な怪しからん、途方もない奴だと思つた。

何故なら、僕はお龍さんの事を、其の祕密を知つて居たから……けれども。」

五十一

「けれども敢て疑はなかつた、遺書は嘘にしろ、死んだのは事實と信じて、僕は羨しかつた、實にあやかりたかつたぞ、村岡。

同一死ぬならば、僕が死ぬのだ、僕が活きちや居らん筈だ。き様の方は、唯女との中を妨げられたといふに過ぎない、其でも死ぬのに。

僕は何うか、思ふ人は既に他に結縁いて了つて居る。村岡、獨身の水上規矩夫が、悶ゆればといつて、泣けばといつて、怨めばといつて、憤ればといつて、巨山夫人美樹子を何うする、萬事休矣、もし生きて堪へられなければ死あるのみだ。

けれども僕は死なんのだ。いや、死に得ないのだ、死ねないから、死んだき様が羨しかつた。あ、羨しい、たとひ遺書はいつはりにもしろ、身を投げたのは實である、最期の際に世を欺く、卑怯な見得をした事は、共に齡すべからずであるけれども、一死萬罪を償ふに足る、其も可し、羨しい。

渠は思想界に遊んで哲學を修めた、即ち想ひを幽冥の間に走せて、戀のために死ぬことが出来た、自分は徒に土方の親方たるべき修業をして、蟻の塔、蜘蛛の網にも及ばない仕事にあくせくするから、死なれないのは情ない、き様のために、村岡、き様の死のために、少くとも水上一個人専門の術として、此の神聖なるべき工學を恥ぢて、巢を造る蜂の營にも不如とした。

何うだ、水上が設計して、かく夥多の工夫が、經營慘憺、火の中に石を伐り、水の中に油を煮て、加賀、越前の、形を變じて、二條の鐵線を敷くにつけ、日夜叫喚の聲を上げ、朝夕山河を震動した處で、出来上つて、汽車を造らして見、黑煙を吹いて、烈風の如く駆けた處が、村岡、き様の學んだ、印度哲學の参考書の一ページ、否、其の一行、眼鏡がなくては見えないうやうな、



目蓮といふ二文字にさへ及ばないことを知つて、羨しくつて堪らなかつた。

既に今しがたの雲の如き、僕は我が事業の上にて、單に、あんな形と見たけれども、豎川の女美樹子に對して、迷の晴れない心ぢや、不思議千萬、いつも忘れん、互の祕密を知り合ふまで、世に唯一人の信友だつた、亡き村岡の影であらう、靈であらうと思ふにつけ、嗚、我を憐み、我を嘲つて居るだらうと、悵然として、仰いで、且つ謝し、且つ恥ぢ、君が羨しくつて、羨しくつて、常に自ら抑へて居る、自殺の望がむらくと起つて居たのだ。」

工學士は次第に言弱く、聲沈んで、愁然として、やがて又爽に、  
「然るに村岡、生きて居たな。」と屹と見た。

「……………」

こゝにあるものは皆黙した。

「馬鹿な奴だ、羨しくない奴だ、が、決して死ぬなよ、僕も死なん。」

といひ果てて、フト四邊を、屋島をはじめお龍をはじめ、多人數の其處にゐるのに心着いて、  
「あはれ言ふまじき事をいつた——工學士はものに激して、別に人あるを忘れたのである。巨山夫人美樹子の名は、世に唯一人の信友の他に、口にすべき事ではなかつた。工學士は、思はず悚然と寒氣立つやうに肩を竦め、突立つたる足は其まゝに、忙しく身體を揺つたが、眼鏡の光き

らゝくと、然も狼狽へたらしく八方を覗いた、穴あらば消えなんと思ふ、天幕を見るより、衝と向直つて、天窓から被つて隠れようとした。

「水上！」

最う一度、

「水上！」

「何だ。」

不二太はつか／＼と進み寄つて、

「成敗してくれ、水上、僕を罰してくれ、殺してくれ。」

然して、又朋友になつてくれ、水上。」

### 五十二

「なんだ、成敗、罪を罰しろといふのか、村岡、そりやき様、人違ひだ。

天ならばき様を罰する、地ならばき様を成敗する、人ならばき様を殺す。しかし水上は天でない、地でない、又人間でもない。」

「人間でない？」



「いかにも人間でない、既に他人の女房になつた婦人を、思ひ切れないやうなものが、人間か。僕は人らしい人ではない、が鬼でもない。」  
美樹子はたとひ巨山夫人でも、斟酌しないで、踏込むやうな事を爲し得るなら、そりや、鬼だ。待て、村岡、天でなく地でなく、人でなくも、鬼ならばき様を捕へて、罪することが立派に出來る、僕は鬼でもない。」

唯水上規矩夫といふ、北陸鐵道の技師だ。」  
といつて、冷々然として、半ば、天幕に隠る、處を、不二太は兩手に力を籠めて、工學士の左の手首を緊乎と握つて

「水上、君は天でない、地でない、  
靜に、

「然うとも、」

「人でない、鬼でもない。」

「應、」

「君は唯水上工學士だ。」

「土方の親方さ。」

「それでは土方の親方だ。」

「人の女房を戀する馬鹿だ。」

「……馬鹿でも可い、」

「き様の死を羨んだ、あはれなものだ。」

「あゝ、あはれなものだ。」

「其の水上に何の用がある。」

村岡は戦きながら、

「水上、君は、天でない、地でない、」

「然うとも、」

「人でない、鬼でもない。」

「應、」

「君は唯水上工學士だ。」

「土方の親方さ、」

「それでは土方の親方だ。」

「人の女房を戀する馬鹿だ。」



「……馬鹿でも可い。」

「き様の死を羨んだ、あはれなものだ。」

「あ、あはれなものだ。」

「其の水上に何の用がある。」

不二太は蒼くなつて、

水上、君は、天でない、地でない、

「然うとも。」

「人でない鬼でもない、」

「應。」

「君は唯水上工學士だ。待ち給へ！君は唯水上工學士だ。けれども僕の朋友だ、村岡は、君の

と……も……だ……ち……だ……だ……

といふ、額は思はず其の兩手で押へた工學士の冷い、カフスに垂れて、

「天でない、地でない、人でない、鬼でない、工學士は、此の朋友を何うするか。」

工學士、

「屋島君、此の方たちの寢床は何うです。」

「は、」と肩を引いて藤五郎はガチャリと瓦斯燈を下に提げて、  
「私が計らひます。」

天に二つの太陽はないけれど、

なぜか一人ぢや寐られない。

船で唄うたものがある、彼處に人影。

聞澄して、捨吉が、

「多見次の奴、」

「何か、いつて居やあがら。」と力松が聲を合せて、顔を見て二人で高笑。

田舎酒

五十三

風流線

手取川の流が岐れて、芙蓉の湖へ灌がうとする、川口の一漁村、今入といふのに、船着の堤防を前に見て、小柳亭、誰が附けたか、しをらしい名の一寸とした飲食店がある。  
名代の鯉こくを腰障子に、晝で蜆をあしらつたが、描方が大いから蛤かと怪しまるゝ、別看板



蒲焼の、鮎はすぐに取れさうな、軒下の小溝、廂の柳、料理は店蔭で拵へて奥が一間、あとは土間の腰かけで客をして、川魚一式といふのだけれども、海が近いからお望ならばあるでござる。蛸殿の脚も、緑艶かな枝にされて、水の垂るほど新しいが、照り梅雨で雨のないため、此の邊でも店前へ水を打つた三時すぎ、俵から直接に掴み出したほど、仰山に、鹽花を盛澄して、亭主兼帯の板前が、漣團扇でバツ／＼バツ。

「白く堆い料理場の七輪の尉を、三ツばかり煽ぐ處へ、門口から旅の客。」

「入らつしやいませ、奥が開いて居ります、お上りなさりませ。」

柳を潜つて、づいと入り、腰かけを、ト見たが、ずらりと眊して、

「御免よ」と日和下駄を脱いで、取着の、其處ばかり。突當を開けツ放した縁の外は青田といふ小座敷に上らうとして懐中から出した切立の手拭で、はた／＼と足袋の塵埃を拂いて通る。

此の男、久留米の緋の、些とござつた單衣に兵兒帯をしたが、突然平胡坐で壁を背負つた、脚には紺の脚絆がけ、扇子を手にして、荷物は大形中古の提革鞆。

色こそ白が目つき、口許、舉動、正に腹掛、三尺帯、振分の荷物、道中笠、懐に短刀でなければならぬに、足袋の白いのと、扇子と革鞆と、殊に麥藁の帽は相應はない。

仔細あるべきものなれども、しばらく差置いて勘定の時を待たう。

「お客様だアよ。」と亭主が聲をかけると、納戸から、前垂と絲屑をつけたまゝ、ちよろりと出て来て手をついて、客の前を通抜けて、土間へ下りて、

「お誂は、」

招きの娘、晝は閑だから絲車でもまはして居たらう、夜になると、若いものが押かける、近邊の女どもも入交りに盛るので。

遠くで機音がする。

「姐さん、何が出来る。」と扇子を指いて、革鞆の紐をわがねながら聞いた。

「鯉こく、蒲焼、鮎汁でございます、鮎の照焼、鮎のそろばんもございます。」

「鮎のそろばんといふのは何だね。」

「はい、膾にしまして、大根おろしの中へ入れますのでございます。」

「それが鮎の算盤か、まづ勘定の時にしよう。慥う、姐さん、そんなものより、彼處にぶら下つた肴がある、あれを酔で食はして呉んな。それから、鯉こく、まあ、持つて来るさ、蒲焼も可しさ、それから酒だ、二合ばかり、こいつは奮發んでおくれ、極佳いのを頼むぜ、急ぎだよ。」

娘より先へ、亭主が、

「唯々。」



さて、膳が出て飲みはじめると、客は娘に祝儀をした。

「姐さん、些とばかりだ。」

小柳亭、開闢以來の珍事である。

「まあ、お客様、」

「滅相な、」と亭主も滅相な顔をして、板前から立つて来る。

「あ、御亭主、つかん事を聞か、」

聞かれたさうに、

「へい、へい。」

「此の前に芙蓉の湖といふのがあるツてな。」

「え、ござりますとも、つい其處でござります。船では棹の尖が届くくらゐでござりますが、

陸を行らつしやると、一里ばかり、それも内端でござります、はい。」

「其處に、何だつけ、別荘があるといふね。」

亭主大な聲で、

「はあ、如來様の御別荘。」

五十四

客人妙な顔をして、

「何だ、寺か。私は財産家の別業のやうに聞いたね。」

「へ、へ、へ、これはお客様、手前が如來様の別荘ぢやと申したのを、お間違へなされました。い

えもし、巨山様といふお方のお邸でござりますが、諸人助けを遊ばします、廣大なお方で在らつ

しやいますに因つて、活如來様々と申しますのでござりまして、へい。何でござりますか、お

客様は、其へお越しなさりますか。」

「實は行きたいと思ふんだ。」と一口干して猪口を取つてツイとさし、

「一ツ何うだね、」

「私に、へい、これは。」と亭主、田舎人の人珍らしげに、座敷の隅へ土間に居て腰をかける。

「姐さん、酌をしてお上げ。時にどうだらう、知らない者が行つちや不可からうか。」

「はッはッ、」といったがぐいと遣つた處、急に聞かれたので咽喉に支へ、掌で口を壓へて咽る。

娘が赤い顔をして、横目で客を見ながら、

「お父様、彼處は見物は出来ませんか。」



亭主はやうく、ぺろりと唇をなめて納まり、知らぬ顔で、

「然やうでござりまして。随分人出入もござります、御城下からお歴々のお方も澤山見えられますが、御見物とあつては、如何なものでござりませうか。」

「其處へ行つちや、寺か堂だと世話がない。」

「へい？」

と問返して、ニヤリと笑ひ、

「大きに、もし、お客様、失禮ながら、貴下は何方でお在なされます。」

「私は東京だよ。」

「でござりませう。どうも此の邊や、京阪地ではおありなさりませんやうにお見受け申しました。大層御遠方から、

「諸國を歩行くのさ、私は畫師だよ。」

「畫の先生。」

「まあ、然うで在らつしやいますか。」と二人とも讀めた顔色。

「なか／＼、先生などといふのぢやない、修行に歩行いて居るので、景色だの、何かね、佳い處を見て稽古のために寫すんだが、山中の温泉で、其の芙蓉の湖にある別荘といふのは、是非一度

見て置く可きだと、人がいふに就いて出向いた譯だよ。

突然行つて頼んだ日にや、斷られりや其ツ切だ。何うだらう、其の別荘に此家で知つたものはなからうか。

上になけりや又下々で、仲働とか小間使とかいふやうなものでも可い、それとも用を聞く八百屋、魚屋などでも可いね。恠ういふ商賣をして居なさるから、随分人の出入も多からうと思つて、頼むんだが、何とか工夫はあるまいか。まあ、其の杯を貰はうぢやないか。」

「これ、お松や、杯洗を持つて來い。然やうでいらつしやいますか。え、一寸お待ちなさいまし。

これが、お庭ぐらゐる御覽じます思召なら、私がお隨伴をいたしても濟むやうに存じまするが、づつとお奥まででござりませう。」

「出來るものなら、然ういふ大家だ、古い處の佳い軸物などもあらうから、何とかを得て何とかを望むとやらだが、實は願ひだ。」

「成程。お松や、お酌をして差上げんかい。何うだなうお松や、彼の方は、」

「然うですなえ。」

「誰か居なさるか。」



「いえ、もし、其のお邸においでなさいます劍術の先生でござりますが。」  
「劍術の」といつて電の如く眉を寄せた。  
些とも気がつかず、

「塚原傳内様とおつしやるのが、始終手前どもへ召上りにおいでなさりまして、能くお顔は存じて居ります、其の方とも存じますが、ついお住居へ伺ひましたこともござりませんで、何うかなう、お松や。」

「一寸、お父様。」

堤防の方で、えへん、えへん！

「ね、あの咳拂、」

「ほんに、」

「塚原様でございますよ。」

「噂をすればでござります、へ、へ、へ。」

五十五

「お別荘の旦那、もし、」

「何だ、旦那は此にあるが錢はないぞ、どうだ、姐え。」

お松に呼ばれて門口に歩を留めた半白の老壯士、角ばつた赭ら顔、鼻も腰もどツしりと、身の丈高く、肩の幅の廣いのが、白緋を裾短に一着して、麥藁の海水帽を猪首に被なし、自然木握太な杖を控とついで、それまで振つて來た大手を、門の柳に静めたのである。

「御申戲おつしやりまし。」

串戲ではないが錢もないわ、き様が呼留めた塚原傳内、即ちこれにありぢやが、其者には用事あるまい、盆まで待て、大分の借ぢやが節季には些少な間ぢや。な、松。

傳内面は猪の熊ぢやが、今日は此の前を通るに、帽子を傾げた、可愛かる、と、亭主に然う謂へ、可いかい。ヤ然らば、と行きさうにする。

「まあ、旦那、そんなことを申すのではござりません、一寸お寄りなさいましよ、しばらくでございますねえ。」

「實に多日、は、あ、其では飲ませるか。」

「差上げますとも。」

傳内据眼で娘を視め、

「はて、心得ぬ。此の方が香を嗅いで、腸に染込まするだけ、き様たちは鼻撮みの豪傑ぢや、門



口へ出て呼ぶなどはつひぞ無い事。むう、扱は、き様が青大将に魅込まれたか、亭主が鱈の亡霊にでも取着かれて、此の方退治役といふのかい、イヤ案じるな。」

ぬつと入ると、新に肴を通されたか、又板前を働く亭主。

「さあ、お上りなさりまし。旦那、御機嫌宜しう。」

「一別以來ぢや、は、は、は、は、面も借金も久しいなう。」と忍の緒を解いてかなぐり取つたが、

兜を腰かけへボンと投げると、軽くて大いから、くるりと廻る。娘が初菊といふ身で取つて、小座敷の、先客が飲んで居る對面の壁の處へ持つて行く、と機會に旅の客、居座を直して、

「さあ、どうぞ此方へ。」

「やあ、お妨をいたす、此方此處で構はん。」

「旦那、そんなことをおつしやりませんで、折角あゝやつて、お膳を傍へおやりなさいましたものですから。」

「恐縮千萬、然らば。」

と傳内さしむかひに座を構へて、

「此の恐縮さ加減御覽じろ、此方、當酒亭には借があるで、は、は、は。」

「飛んだことを伺ひます。」

「あんなことばツかり、と娘は兩方の顔を見競べながら、一寸嬌態をやつて、其ま、板前へ行つたが、豫て心得たらしく、膳を其へ。

傳内じろりと見ると、コップが乗つたり。

「松、我儘をいふべきでないが、ビールは不可ぞ。此方、似たものは麥湯もあやまる。」

「否、まあ、大いのでお引掛けなさいましな。」

「珍事々々、空恐しい事だ。」と傳内、他流仕合にまるつた體。

亭主皿を持つて出て、小腰を屈め、

「へい、旦那、御好物の、そろばんでございます、唯今に蒲焼も出來ますで、おゆつくり召上りまし。」

「愈々奇ぢや、これ、盆が近くとも此分な胸算用にも入れて置かぬぞ、此方酒さへあれば、香のもので澤山だて。」

「え、先生、先生。」

「私かな、はい、はい。」

「失禮ながら、其の今日の處は、私がほんのお知己のしるしまでに差上げますから、御心配下さ



「いませんやうに。」と旅客は丁寧ていねいに手を支たいて一禮いちらいした。

「き公きこうはえ。」

「唐突たうたけに御無禮ごぶれいですが、お名前なまへは、當家たうけから承うけたまつて承知しょうちいたしました。手前旅てまへたびのものでござい  
ますが、實じつは其その、書あを修業しゆげふいたします、多見たみ……多見たみ、

といひかけて、やゝあつて、

「多見五郎たみごろうと申まをしますものでございまして。」

五十六

「實じつは其その、後學こうがくのために、先生せんせいが人いらつしやいます、湖みづうみの別莊べつさうの中なかを拜見はいけんしたいのですが、何なに  
とか、特別とくべつを持ちまして、お計はからひ下さるわけには参まゐりますまいか。」

「何なに、城しろが見みたいな。」

「お城しろえ？」と自ら多見五郎たみごろうと名告なつた男をとこは、持もつた猪口ちくを、ト顛あごの下したに張はり脇わきで持もつて片手かたてを疊たむ  
について怪訝けげんな顔かほ。

傳内でんない蟹かにのやうに身構みかまへて、

「城しろぢや、浮城うきしろぢや、此方このほうが守護しゆごする彼あの巨山家おほやまけを、別莊べつさうなどといふ奴やつは、武邊ぶへんの片端かたはしも存ぞんぜぬ、

今時いまときの町人ちやうにんどもだての。

き公きこうも志こころざしのある仁じんなら、然しかるべく心得こころえられたい、何處どこから視みめても立派りっぱな城しろだわ。聞きかつせえ、  
此處こゝを五里ごり放はなれた處ところに、小松こまつがあつてな、名代なだいの丹羽長秀にばながひでが籠こもつた浮城うきしろがある、それに倣ならうた繩なは  
張はりぢや。又此またこゝの傳内でんない、老おいいたりと雖いへども武士ぶしだ、別莊べつさうなどいふ、腰こしの抜ぬけた隱居所いんきよしょの番ばんはせぬ、天あつ  
晴はれ一城いちじやうを預あづかると心得こころえて、酒さけは飲のんでもちやんと守護しゆごする。此方このほうと附合つきあふなら、向後かうご洒落しゃれにも別莊べつさう  
などいふまいぞ。女小兒をんなごどもは何なんと申まをしても取合とりあぬが、き公きこう、酒さけは振舞ふるまはつしやる、いかにも話はな  
せさうぢやに因よつて、心づけをいたすぞ。諸國しよこくまはらるゝなら加州手取川かしろてどりがはのほとりには、巨山氏おほやまうぢ  
の浮城うきしろがあると物語ものがたらつしやい。當城たうじやう承うけたまりの大將たいしやうは、塚原芙蓉守つかはらふようのかみ平傳内ひらでんない、といふぢやがな、  
此方このほう芙蓉守ふようのかみといふ面つらでない。美名みめいはの、巨山氏おほやまうぢの御内室ごないしつ、これが又古今またこゝんの美婦みぶだから、其その方ほうへ  
奉たてまつつて、芙蓉夫人ふようふじんぢや。湖みづうみに今いま一ツ名ながある、即すなはち此方頂戴このほうちやうたいに及およんで、塚原つかはら賴之守らいのかみは何なんうだ、  
はゝ、はゝ。」と笑わらを下腹したはらから天井てんじやうに揺ゆ上げた、久ひさしぶりの狂水きやうみづに賴之守らいのかみ機嫌きげん不斜ふな。

多見五郎畫伯たみごろうがわはくはなかくの眞面目しんめんぼくにて、

「お城しろですか、は、成程なるほど。然さう承うけたまりますと一層いっそう執心しよくしんになります、どうぞ先生せんせい、まあ、お一ツ、  
否いな、先まづ獻上けんじやう。」



「は、は、は、發奮む、發奮む。いや、御懸念無用ぢや、浮城拜見の儀な此方屹と引受けた、仔細ない。」

「へい、難有う存じます。」と嬉しさに、びた／＼と頭を下げたが、フト心着いたと見えて、急に片附けた風をする。

瀨之守委細構はず、

「然しな、主人は不在ぢや。好きな道の、謠に可い對手があつて、何時にない長逗留をされたが、此の城下金澤に假名俱樂部と言ふのがあつて、文武の百官、在野の有志、何も歴々が集會をさるるぢや、此方主人是に參會のために、然も何と、今日歸られたで、折が悪い。實は此方それを送つての歸りぢやての。」

「おや、大旦那様がお通り遊ばしたのでございますか。」と娘が一寸口を入れる。

「今しがたよ、何が、送迎はさせぬ仁ぢやが、此方好い假託に伸出したて。いや、二人連の處をき様に呼ばれんが僥倖よの。何さ、き公、主人不在でも夫人は、觀音のやうに優しい人ぢや、其に此方引受けたれば、拜見の儀な念に及ばぬが、ソレ又一枚も賣つて、旅銀の處だての。」

「飛んでもない、決して松竹梅を持つて出て、草鞋錢を強請りますやうなわけではありません。そりや、お情ない。唯好い景色を寫さして頂きますので、お席料は差出しましても宜いのです。」

と故とらしいが少し憤氣。

「こりや、悪かつた、瀨之守目違ひぢや、しかし見上げたの、晝も定めて旨からう。何は、何はやらつしやるか、別嬪は。」

「別嬪ですツて？ 出来ない事もございませぬ、未熟ですが。」

「は、あ、そりや惜しい、主人別嬪の晝が大好でな、金澤に居る上手なのに頼まれたが、いや、半年の餘にもなつて未だ描かぬさうで、あせつて居られた、在城なら一段であつたがな。」

「まあ、お一ツ。」とついと獻す。手つきから、目のくぼり、身のこなしを、傳内、とろりと見て、「き公、小取まはしで、恐しく氣が利くぞ、風雅人のやうでない、敵方の間諜か、敵討の大願でもありさうぢや。傳内醉はされたかも知れぬてな。」

「え。」

「何さ、それなら尙の事だ、たとひ盜賊でも、傳内が守護する浮城、自分で連込んで自分で生捉る、望む處だ、は、は、は、申戯だ、大失禮、盛に頂く、ゲエー。」

綾の鼓



戀草の露も思も亂れつつ、心狂氣に馴衣の、巳の日の祓やゆふしでの、神のたすけも浪の上、哀に消えしうき身なり。あはれ古を思ひ出づれば懐しや、行平の中納言、三歳は爰に須磨の浦、都へ上り給ひしが、此程のかたみとて、御立烏帽子狩衣を残り置き給へども、是を見るたびにいやましの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も忘れればこそあぢきなや。筐こそ今はあだなれはなくば、忘る、隙もあるものと、讀みしも理りや、猶思ひこそ深けれ、宵々にぬぎて我寐るかり衣、かけてぞ頼むおなじ世に、住むかひあらばこそ、忘れ筐もよしなしと、捨て置かれず、取れば面影に立まさり、起ふしわかで枕より、跡より戀のせめくれば、せむ方涙に伏沈む事ぞかなしき。……

「松風だ。」

と梢に聲ある、枝に背を凭せたのが、其の謡と、鼓の調を聞き澄まして、姿も幽に聲も低く、傍なる、同一洋服扮装の、より多く瘦せたのに囁いていつた。

微妙なる一調は、水に響いて、浮城の門の、松の葉越に、明き高樓から聞ゆるのである。こゝに此の湖上の邸宅と、芙蓉の水と、夢見るやうな、白砂の眇たる中に、小松原とを存して、人は唯兩個の他に、似たるは獺の影もあらず。

さら／＼と寄る波や、風が渡つて、やがて目に見ゆる限りの、夜の外へ吹き去ると、再び中空に高く、此のあたり遮るものなき白山から、別に一陣颯と送るまでは、ものの戦ぐとも覺えず。寂寞とした、二ツの人影も、暗を遊ぶ木精の、松の姿に立戻つたかと思ふやう、唯木の枯れて立つ風情。

また謡ひ出した、此度は女性であつた。

松に吹來る風も狂じて、須磨の高浪烈しき夜すがら、妄執の夢に見ゆるなり、我あと弔ひてたび給へ、暇申して歸る浪の音の、須磨の浦かけて、吹くやうしろの山おろし、關路の鳥も聲々に、夢も跡なく夜もあけて、むらさめと聞きしも今朝見れば、松風ばかりや残るらむ／＼。

瘦せた方が、

「今のは、」

「舞。」

や、あつて男の聲音、トン——トンと鼓に合せて、

忘れんと思ふ心こそ、忘れぬよりは思ひなれ。然るに世の中は、

「綾の鼓だな。」と脊の高い方が呟いた。

今一人の瘦せた方は脊も心ばかり低かつた。



「謠ふのは亘山か。」

「否、別人。」

「鼓は夫人……？」

「叱」と抑へたが其まゝ黙した。

風がまた音づれて、白砂に描ける一幅の松原は、湖水をかけてざわと漾ふやうになつたが、得もいはれぬ優しい聲、ヤオと懸かると寂となる、トントンと鼓の音。

……つひに行くべき道芝の、露の命のかぎりをば、誰に問はましあぢきなや。などされば是程に、知らば然のみに迷ふらむ、驚けとてや東雲の、眠を覺す時守の、撃や鼓の數しげく、ねにたゝば待つ人の面影もしやみけしの、綾の鼓とは知らずして。

「私は欺かれた、あの通り」と思はざる状していふと、フト謠が止んで、すぐに鼓ばかり二挺になつて調が揃つた。

打つたり矣、一調、あはれ、天女、樂譜の風に身を任せて、月の都に行く道の、羽衣の袖のゆらぐにつれ、瓔珞の珠星に觸れて、乳房を撫づる音ならむ、折からの雲のたゝすまひ、花降りかかる氣勢して、ばら／＼と松葉がこぼれた。

五十八

はら／＼と松葉がこぼれた。

「非常に巧いぢやないか、感極る。」といつて軽くコト／＼と靴の足踏をした。

脊のやゝ、高いのが答へて、

「む、上手に打つ、然も此の一調は鼓の秘曲だ。」

「なか／＼委しいな。」

「父親は鼓打だつたよ。」

「然う、然う、然うだつた。而して、君の戀人は其の弟子だつてな、忘れて居た。知らずに聞く僕でさへ膚が粟立つ、君は感慨無量だらう。」

と顔を差覗くやうにしたが、肩を震はして、眞直にすつくと立つと、上衣の下に隠して持つた、蒼い燈の瓦斯燈を、別荘の門の方へは背後向けにして砂に置いたが、二ツ三ツ松葉が見えて、脊の高い方は幽に蒼然として照らされた。

些も猶豫はす衣兜に手首を突込んだ、脊の低いのが、衝と抜き出して高く片手を指伸ぶるや、手中に陰々として五寸の黑影、驚破、短銃を構へたのである。



「何をする、」と慎重な音調で留めていった。  
「餘りの事だ、此の神境を攪さないでは、君は氣絶して倒れよう。」  
「待て、待て、其は以前の事、私は今、もつと神経が遅鈍になつて居る。」  
「寧ろ過敏かも知らん。」といったが、ゆるやかに手を引くと、殺氣は其の懷中に納まつた。しばらくして、

「大膽になつたぢやないか。」

「臆病の結果です。」

二人とも更に耳を傾けた、鼓の音は愈々澄んで湖の底なる小石にも、染入るばかり訝ゆるるのである。

「あ、また同一やうなのを繰返す、別なのか。」

「同一處だ、綾の鼓……彼處に言句がある、謠がある。」

「何といふのかね。」

「明を。」

聲に應じて、一人が瓦斯燈を取つて宙に釣ると、他は其の下へ手帳を開いた、鉛筆の青い色と、白紙との上へ、齊しく四ツの目を注いだ顔は、村岡と水上であつたことは謂ふまでもない。

工學士は、打進む鼓とともに、しなやかな指で、すら／＼と手帳の面へ、

綾の鼓とは知らずして、老の衣手力そへて、打ども聞えぬは、もしも老耳の故やらむと、

聞けども／＼、池の波、窓の雨、いづれも打つ音はすれども、音せぬものは此の鼓の、

と記しかけて手が戦いて、仰いで、高樓を屹と見たが、

「失敬な！」

不二太は單に文字を読み辿つて目も放さず。

「村岡、」

「應、」

工學士は口早く、鋭く疾く、

「此の謠を知つて居るか。下司下郎の老人が、生命をかけて、女御を慕つたと思へ。其の女御が  
だ、綾で造つた鼓を渡して、さあ、打て、もしも此の鼓が鳴つたら思を叶へよう、妄執を晴し  
て遣らうといつた。鳴るものか、鳴るものか、綾蘭にも、太蘭にも、細蘭にも、燈心草の鼓が鳴  
るか！ 鳴らぬ鼓を打つて／＼、老人は遂に池の水に溺れて死んだ。」

村岡、君ならば華嚴の瀑だ。

何うせ出来ない相談だから、鳴らぬ鼓を打ては可いが、たとひ向うぢや忘れても、水上といふ



ものが、世にあるのに、憚つて然るべき譚ぢやないか。

一調に住なるものは、三井寺もある、花筐といふのもあるのに、それも構はん。村岡、人は彼を、湖の女王と稱へるといふではないか。」

不二太は黙つて打領く。

「む、思ひ上つたな、怪しからん、失禮だ。」といふうちに、びり、手帳を裂いて取つて、殆ど無意識に丸けて落とすと、静なる砂は靴の先にほろ／＼と崩れた、鼓は地にも響いたのである。

酒の香が芬として、大喝一聲。

「誰だ！」

唐突に背後から、聲とともに手にかけて、工學士の上衣を、ぐい。

### 妖 靈 星

#### 五十九

「面を見せろ、怪しい奴だ。さあ、此の方承りの城に對して、土塀の高さに見當をつけるやうな奇怪至極な事をする、強盜屋尻切の斥候と睨んだ、汝何者ぢやい。」と引捕へた上衣を掴んで、

身體をぐるりと松の樹を廻つて出て、工學士に詰寄せたは、今更めて謂はずとも、塚原頼之守傳内なるわ。此の豪傑、今入村の小柳亭に、饗應酒の悦に入つて、對手の旅書師を怪しまず、よし又戒心すべきにせよ、腕に覺えの古強兵、筋が動く、腕が鳴る、事あらば尙一興と、性根を据ゑて飲むほどに、けるほどに、とつぷりと日が暮れて、漸々に御腰を上げた。田圃道、湖づたひ、高咄に噓を交へて、や、別荘に近くと、醉顔を吹く風冷かに、大な噓一ツして、駭然とする耳許に、丁と響いたのは鼓の音。

己が稱へ奉る芙蓉夫人のすさみぞと思ふと齊しく、門を守る者は別にあつても、留守を預る大役に心着いて、一番魂を据ゑ直すと、おや／＼自分のが抜けて出たか、砂地の小松の枝にか、つて、茫乎とした蒼い灯。

宵闇の水は暗く、地は却つて湖の面の如き中に、大魚の鱗の光かと見えて、恰も龍燈といふものめいたり。

螢に遅いわたりなり、見渡す限り圓な砂地、小松はあれど人は見えず。

恚る勇士の性として、傳内事を好む癖なるに、酔心地なり、腹は出來たり、這奴、曲者ござんなれ、件の怪火掴んで呉りよ。大人氣ないぞと袖を控へて、畫師の留めるも聞かばこそ、燐火を捉ふるに靜なるべし、謀は密なるを可しとすで、傳内其の場で下駄を脱ぎ、件の杖を小脇に搔込